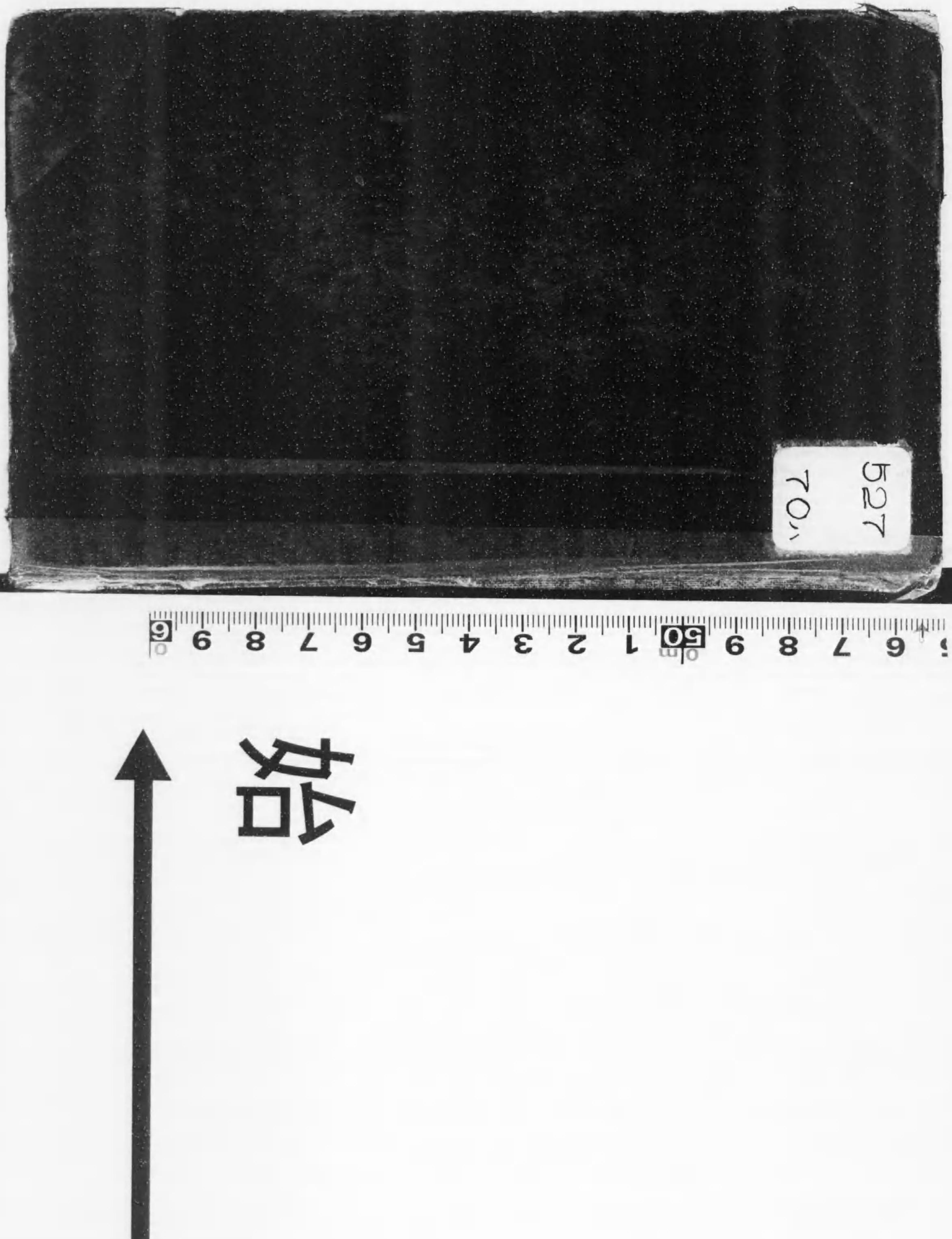
527
70.
40

7.30

2.7.30

自癒

作ゝキスロエイトスド

述譯作金濱石

春陽堂譯述叢書

東京
春陽堂
13. 11. 5
内交

白痴目錄

第一編　發端……一
一　ミシユキン公爵……一
二　ナスターシヤ……一〇
三　エパンチーン一家……一三
四　嵐……一八
五　夜會の夜の混亂……一〇
第二編　靈の彷徨……一五
一　その後の狀況……一五
二　情慾の鬼……一四
三　聖なる煌き……一六
四　遺產事件……一九

五　公園音樂演奏場にて……二〇九
六　綠のベンチ……二二三
七　微夜の酒宴……二二五
八　青春の胸……二二七
第三編　悲しき落日……二二四
一　慟哭と愛情……二二四
二　戀心……二二八
三　婚約者披露の夜會……二三〇
四　嬌婦の會見……二三八
五　結末、悲しき落日……二三八

527-70は

白痴

第一編

發端

ミシユキン公爵の歸國

瑞西の田舍のとある村に一軒のあばら家があつた。もうすつかり古ぼけて了つた小さな家で、その家には二つの窓がついてゐたが、その一つの扉や框を外してそこから眞田紐や縫絲や煙草石鹸などを賣りたがる人相口をしてゐる一人の老婆があつた。老婆は病身で兩足がすつかり腫れてゐたので、何時もちつと家にばかり坐つてゐた。此老婆の娘に名をマリーと呼ぶ年の頃二十歳ばかりの女がある。痩せひよろけた脾弱さうな女で、もうずつと前から肺病に患つてゐたが、彼女は毎日苦しい日傭仕事に傭はれて、家々の床を洗つたり、洗濯物をしたり、庭を掃除したり、

牛や馬の肉を骨から放したり、そんな仕事をして方々の家を廻り歩いてゐた。所が或る時此村へ一人のフランスの商人がやつてきて、此マリーを誘拐して連れ出して了つたのである。商人はしかもその上に、此連れ出したマリーを一週間經つか經たぬ間に或道端に捨てゝ、こつそりと何處かへ逃げ延びて了つた。マリーは汚れ腐つた襤褸を着、破れ靴を穿いたまゝ途中人々の袖に縋つて漸く家まで歸つてきた。その時は何しろ一週間といふもの徒歩で歩き廻し、夜は野原に寢たりしたもので、彼女は酷い風邪を引いて、足は傷だらけ手はむくんで 皸 だらけといふ有様であつた。尤もマリーは以前から決して美しいと云へる女ではなかつたが、唯眼がしつとりとして人が好さうで罪がないといふので、村の人々は彼女を可愛がつてゐた。マリーは無口な女で以前或時何か仕事をし乍ら、ふと何やら歌を唄ひ出した事があつたが、その時には傍にゐたものが皆吃驚して笑ひ出し、「マリーが歌唱つたぞ！　何マリーが歌唱つた？」と騒ぎ立てたので、彼女は吃驚してまごつついて、それから後は一切永久に緘默して了つたといふ逸話がある。が、それは兎に角としてマリーが男に捨てられて、病み疲れ責め苛まれて村へ歸つてきた時には、誰一人彼女に同情を寄せてやる者はなかつた。此方面の事に關しては、世間は實際殘忍で酷薄な見解を持つてゐるものである。マリーの母親は一番に先に立つて、憎惡と侮蔑の眼を以つてマリーを迎へたのであつた。

「お前はわたしの顏に泥を塗つた。」

かうして母親は娘を一村の惡口嘲罵に任せた。一方マリーが歸つてきたと聞くと村中のものは老人も子供も女房も娘も群をなして貪婪な眼を光らせ乍ら、歸つて來たマリーを見てやりに此老婆の小屋へと馳せ集まつてくる。マリーは老母の足許の床に饑ゑ疲れて、ぼろ〳〵の着物にくるまつて身を抛げ出して泣いてゐる。人々が馳せ集まつた時には彼女は、おどろに振り亂れた髪の毛に身を包むやうにして、ひたと床に吸附いてゐた。周圍に立つてゐるものは皆それをば何か汚らはしいものでも見るやうに眺めてゐる。老女はマリーの罪を數へ立てゝ罵る、若い連中は笑ふ女達までが責めたり惡口ついたりしてマリーを輕蔑した。母親も母親でそれを咎めようともせずに傍に坐つて見乍ら頻りに合點々々をしてみんなを勵ますといふ有様。

母親はその時分既に病氣が非常に惡くなつてゐたが、やがてそれから二ケ月許りも經つと到頭本當に死んで了つたのである。母親は自分でも死期の近づいた事は知つてゐたのであるが、それでもとう〳〵死ぬまで娘を許さうとはしないのであつた。そして一言も口を利かず、寢る時も入口の間へ娘を追ひやつて、飯もろく〳〵食べさせはしなかつた。マリーはそれでも、母親の病中腰湯をつかはねばならなかつた時には、毎日湯を立てゝ足を洗つてやるなど看病を怠るやうな事は少しもなかつたのである。しかし母親はそられの親切な介抱を默つて受けるばかりで、一口も優

しい言葉はかけてやらなかつたといふ事である。マリーはそれをぢつと辛抱した。マリーはそれを當り前の事のやうに考へてゐたのである。彼女は以前から自分を世界中の一番賤しいものか何かのやうに思ふのが習慣であつた。だから彼女はどんなに輕蔑されても苦められても決して怒るやうな事はなかつたのである。さて、老母が床に就いてからといふものは、その村の規則によつて村の婆さん達が順番に交る〳〵その介抱にやつてきたので、その時からマリーは全く食を離れて了つた。彼女は村中何處へ入つても追拂はれ、誰一人以前のやうに仕事をさしてやらうといふ者はない。まるで唾を引つかけないばかりで、男は彼女を女の仲間とは思はず實に酷い惡口を浴びせかける。時々日曜などには酒に醉つた連中が慰み半分に小錢をいきなり地べたに叩きつけると、彼女は默つてそれを拾ひ上げるのである。マリーはその頃から血を吐くやうになつてゐた。それにも拘らずまた或時には村の小學校の生徒達が組を作つて彼女を調戯つていつたり汚いものを投げつけたりするのであつた。

或日、マリーは村の牧人の所へいつた。そして自分を牝牛の番に雇つて呉れるやうにと頼んだ。しかし彼女は勿論追つ拂はれて了つた。するとその翌日からマリーは斷りなしに自分で牝牛の群れを連れて毎日朝から晩まで家を出るやうになつた。それが大變手助けになつたのであらう、それからは彼女が來ても牧人は餘り追ひ立てもせず、時々は食べ殘した乾酪やパンを呉れるやうに

なつたのである。牧人はしかしそれを大變な慈善をしてゐるやうに考へてゐた。

母親が死んだ時、村の牧師は恥し氣もなく教會で大勢の人の前でマリーを侮辱した。マリーはいつもの如くぼろ〳〵の着物を着て棺の後に立つて泣いてゐると人々は皆そのマリーの姿を嘲つてやらうと思ひながら教會へ集まつて來る。その時まだ年の若い、どうかして偉い説教者になりたいといふ野心に燃えてゐる牧師の一人が、マリーを指しつゝ一同に向つて云ひ出した。

「皆さん、この女こそかの尊敬すべき婦人の死なれた原因であります。(序でに云へばこれは眞赤な嘘であつた。なんとなれば佛は既に二年前から患ひついてゐたのであるから) この女はかうして今皆さんの前に立つた儘、顏を上げる事さへも出來ないでゐます。それは神樣の御心によつて運命を定められたからであります。御覽の通り此女は身に襤褸を纏ひ足ははだしであります。何と善行を失つた人達のよい見せしめではありませんか。此女は抑も何者でありませうか！ 亡くなられた方の娘御なのであります！」

これは何んといふ言葉であらう。しかも此の、牧師としては卑劣極る言葉がまた聽衆の氣に入つたのであつた。世間の人々といふものは、得てひとの惡口を云ひ、苦める事に興味を持つてゐるものと見える。彼等はさうして一人の人間を苦しめ乍ら、自分はそんな事はしなかつた、自分はそんな者ではないと心秘かに滿足を感じ乍らその自分の正しさを喜んでゐるのである。若い野心

に燃えてゐる牧師は人々のさういふ氣持を煽るやうな方法でマリーを恥しめ乍ら話を進めた。だから無智な聽衆達が牧師のその言葉を嬉んだのに無理はない。

しかし、この時突然こゝに、一つの不思議な事件が起つた。教會の窓硝子を目がけて一團の投石の雨が降り出したのである。人々は驚いて窓の方を見た。すると、どうであらう、そこには一團の少年の群が集まつて一勢に窓を目掛けて石を投げつけてゐるのである。それは此牧師の言葉に怒つてマリーをかばはうとした少年の群れであつた。人々は驚いた。此村には一人だつてマリーをかばはうとする者は居ない筈であつた。少年達も嘗ては道端のマリーを見付けると罵つたり汚物を投げたりしたものである。しかも今、此マリーをかばはうとする少年達が居るのは一體どうした事であらう。その時、更によく見ると、それ等の少年達の中を、一人の年若い青年が顏に優しい微笑を浮べて、しかし心配氣な面持で、少年達の投石を止めさせようとしてゐるのであつた。少年達は投石を止めた。そしてその青年のもとに集まり懐し氣に彼を見上げてゐた。青年は相不變優しい顏に人懐こい微笑を浮べてゐる。これは實際不思議な光景であつた。しかしこれには一つの物語がある。それに就いて先づ我々は物語らなければならぬ。なんとなれば、この優し氣な青年こそ、この小說に於いてやがて重要な主人公の位置を取らねばならぬ人物であるから。彼は名をミシュキン公爵といふ。

ミシュキン公爵はロシアに於ける古い貴族ミシュキン公爵家の唯一人のこされた最後の人であつた。彼は生來身體が虛弱な上に一つの不思議な病氣を持つてゐた。それは何か實際不思議な神經病で、身體が震へて引き吊る、云はゞ癲癇か舞踏病のやうなものであつた。その病氣の爲めに彼は本國ロシアを離れて瑞西へ養生にやられたのである。そこで彼はシュネイデルといふ博士の厄介になつて病氣の治療をはかつてゐた。彼は生來氣の優しい善良な青年であつたが、また單純といふ、よく世間の人からは「馬鹿」或は「低能」と誤られ易いところの美德を持つてゐた。實際思ふに、この單純といふ美しい性質は本來非常に尊ぶべきものであるに拘らず、世の中が複雜になり人間の心が邪まな事に慣れてきた現代では稍もすると「低能」「白痴」と嗤はれ勝ちなものとなつてきた。それは悲しむべき事である。が、我がミシュキン公爵は實にこの美しい性情の持ち主なのであつた。彼は瑞西滯在中村の人々からは「白痴」と云はれてゐた。村の少年達も初めは、彼を調戲つたり惡口したり石を投げたりして惡戲した。しかし偶然な事からやがて子供達は彼を慕ふやうになつたのである。そしてそこで彼と子供等との永久の友情がつながれるやうになつたのであつた。

ミシュキン公爵は初めから、哀れな娘マリーに同情してゐたので何か彼女の爲めになる事をしたくて堪らなかつたのである。マリーは丁度金がなくて困つてゐたので彼はマリーに金をやらう

と思つたが、實は彼自身一文の金も持つてゐなかつたので、丁度その時持つてゐた小さなダイヤの留針を賣る事にした。彼は或日、村から村へ渡り歩いて古着などを賣買する商人をつかまへてそれを八フランで賣つた。その留針は大丈夫四十フランの價値はあつたのであるが公爵はそれを商人の云ふ通り八フランで賣つて了つたのであつた。で、公爵はその八フランの金を持つて人の見てゐない所でマリーに渡してやらうと思ひ乍らその機會を待つてゐたが、到頭ある日村端れの生垣の傍で、山に登る裏道のとある木の下で會ふ事が出來た。公爵はその八フランをマリーに渡した。そしてもうこれ以上は一文もないのだから大切に藏つて置けと云つてマリーを接吻してやつた。それから公爵は更に續けて云つた。

「僕がこんな事をするからつて、何か好くない目的があるやうに考へては不可い。僕がお前に接吻するのはお前に惚れたからぢやない、只お前を氣の毒に思ふからに過ぎない。僕は事の抑もの始めから決してお前が惡いとは思つてゐなかつた、只不仕合な女だと同情してゐる丈けだ。」

公爵は更にマリーを慰めてやつて、お前はそんな風に自分を人に較べて賤しい者だと思つては不可い、とも諭してやつたが、しかしマリーにはそれは分らなかつた樣子である。

マリーは始めから終ひまで伏眼になつて、恐ろしく氣まり惡がり乍ら默つて公爵の前に立つてゐた。が、公爵がこれ等の事を云ひ了ると、彼女は公爵の手を取つて接吻した。公爵もその手を

握つて接吻しようとする。マリーは急いで手を引つ込めた。だから公爵はマリーを接吻する事は出來なかつた。しかしその時早くも二人の姿は子供等の一群の目にとまつて了つたのである。子供等は口笛を鳴らすやら手を叩くやら、笑ふやら大變な騒ぎをしてこの「白痴」と「嫌はれ娘」との會合を冷嘲し出した。マリーは堪らなくなつてとう〳〵駈け出して了つた位である。そして公爵が子供等に何か云はうとすると、彼等は石を拋げたりするのであつた。かくて公爵とマリーとの會合は忽ち村中の噂さになつて了つた。この噂が立つてから、その噂の尻はすつかりマリーの方へ掛つていつて、マリーは以前よりももつと嫌はれるやうになつた。一時は彼女を處罰するなど〳〵いふ評判が立つた位である。しかしその評判は運好く其儘に濟んで了つた。その代り子供達のマリーに對する惡戯は前よりも更に力を加へてきた。彼等はマリーを見ると、通せん坊をしたり、汚い物を投げ附けたり、追つかけたりするので、その爲めに胸の弱いマリーは、はア〳〵と息を切らして苦しんだ。それを子供達は尙も後ろから喚いたり惡口ついたりするのである。或日、ミシユキン公爵は、矢張さうしていぢめられてゐるマリーを見て子供達を相手に喧嘩を初めた事があつた。それからといふものは、ミシユキン公爵は暇さへあれば、毎日子供等をつかまへて說教を初めたものである。子供等は初め勿論說教などを聞かうとはせず、かへつて石を投げたり惡戯をしかけたりしたが、それでも時々は立止まつて公爵に耳を傾けるやうになつた。

ミシユキン公爵はその子供等に向つて、マリーが如何に不仕合せな人間であるかを話すのであつた。すると不思議な事に子供等は間もなくマリーに惡口を吐くのを止めるやうになつた。それのみかマリーの通る時には默つて道をよける樣にさへなつたのである。ミシユキン公爵と子供等は次第々々に兩方から口を利くやうになつた。公爵は子供等に何一つ隱さずにすつかり打明けて話した。子供等は大變面白がつて公爵の話を聞いてゐたが、間もなくマリーを氣の毒がるやうになつてきた。或者はマリーに出會すと愛想よく挨拶をする。といふのは瑞西のこの村では人が途中で行會ふと、たとへ知り合でなくつてもお辭儀もして「今日は」と云ひ合ふのが習慣であつたから。しかしその時、マリーはどんなに吃驚した事であらう。彼女は今までさうして人並に挨拶をされる事なんか斷えてなかつたのだから。或時二人の少女が食物を買つて、マリーの所へ持つていつてやり、それからミシユキン公爵の所へきて話した。マリーはひどく嬉しがつて泣いたから、自分達はもう〳〵あの人が好きで堪らなくなつたと。さうしてそれからといふものは子供達が皆マリーを可愛がるやうになつたのである。彼等は以前マリーに汚物を投げつけたり惡口ついた事などはとうに忘れて了つたやうにして、マリーに會へばマリーを可愛がつたり物を與へたりした。そしてそればかりでなく子供等はまたミシユキン公爵をも好くやうになつた。彼等はしよつちう公爵の所へ來て何か話して呉れと强請る。公爵は後には只その連中に話して聞かせうが爲

めのみに勉强もし本も讀むといふやうになり、さうして三年の間公爵はいつも話してばかりゐたのであつた。

しかしこゝに此公爵が子供達に對して何一つ隱さうともしなければ、また大人にする話をそのまゝ子供にしてやるといふ事に就いて公爵を非難する言葉が村人の間に起つた事がある。公爵が厄介になつてゐるシユネイデル先生さへその仲間であつた。しかしまた公爵には公爵自身の考へがあつたのである。彼は次のやうに考へてゐた。子供等に嘘をつくのは恥づべき事だ。子供等は大人がどんなに隱しても皆知つてゐるものである。それのみならず獨りで知つた事は惡い方に解釋するかもしれない。だから公爵自身教へてやればそんな眞はない。兎に角各人自分が子供であつた時の事を思ひ出して見たらそれでいゝのだ——と。然しこの公爵の考へには誰〻も同意するものがなかつた。

例の牧師がマリーの母親の葬式の日マリーを群集の前で恥しめた時、子供等は既にミシユキン公爵の味方になつてゐたので、公爵は直ぐに子供達に向つて牧師の演說を話し、よく合點のゆくやうに說明してやつたのである。そこで子供達は一勢に牧師と村人のその行爲言葉に憤慨して前に述べたやうに投石を初めたのであつた。村の人達はこの事を知つた時、公爵が皆子供をさうして惡くして了ふのだと云つて責めた。しかし後で子供等がマリーを可愛がつてゐると聞いた時に

は有繋に皆が驚いた。マリーはと云へば彼女はその頃にはもう實に幸福に暮してゐた。子供達はマリーと途中で會ふ事さへ禁じられてゐたが、それでもこつそりと村から五町も離れてゐる可成り遠い牧場まで駈つていつた。大抵何か土產物を屆けてやるのであつたが、中には只マリーを抱いて接吻して、「マリー、わたしはお前が好きだ」と云ひたいばかりにわざ〳〵走つて行つて、直ぐにまた韋駄天走りに歸つてくるものもあつた。マリーは思ひも掛けぬ此幸福に殆氣も狂はぬばかりであつた。全く此樣な事は彼女の思ひも掛けぬ事であつたので。彼女は嬉しくもあり羞しくもありといふ樣子であつた。

子供達、殊に女の子達はマリーの所へ走つていつて、ミシユキン公爵が大變彼女を愛してゐて始終子供達に彼女の噂ばかりするといふ事を當人のマリーに知らせたくて堪らないやうであつた。彼等はまたそれから公爵の所へ駈け戻つてきて、嬉し相な忙しさうな顏附きで只つた今マリーに會つてきた事、マリーが公爵によろしくと云つた事などを傳へた。每晚夕方になると公爵は瀨へ散步に出かけた。其處には村の方から少しも見えない場所が一つあつて、周圍にはポプラ樹が茂つてゐた。子供等は每晚此處をさして公爵の傍へやつて來るのであつた。或者はそつと家を拔け出して來る。彼等にとつては公爵のマリーに對する愛が堪らなく愉快だつたと見える。

公爵は瑞西滯在中此子供等に對して嘘をついたのは只一つであつた。それは公爵が子供等に對

して、自分は決してマリーに惚れてゐるのでは無い、唯非常に哀れに思つてゐるだけだなどゝ云つて彼等を失望させる事には堪へられなかつたので、自分がマリーを愛して居るやうに見せかけた。といふのは子供等は自達が想像し分自分達の間で勝手に定めた事が本當であれはいゝと一生懸命なのであるから。だから公爵は默つて巧く圖星を指されたやうな顏をしてゐた。子供達は公爵がマリーに惚れてゐる、マリーを愛してゐると思つてゐる。それにつけても子供達の小さな心といふものはどんなにデリケートでまた優しい事であらう。彼等は自分達の「好きな小父さん」が、見すぼらしい服裝をして靴さへも持たぬマリーをばそれ程迄に愛するといふ事が有得べからざる事のやうに思はれたので。マリーに靴だの靴下だの襯衣だの、おまけに島渡した着物の類まで持つていつてマリーを少しでも美しくしてやらうとし初めた。一體どんなにして小さな智慧袋を搾つたのであらうか、兎に角何十人かの子供達が皆一致協同してそれをしてやつてゐるのであつた！　ミシユキン公爵はそれに就いて子供達に訊ねた事がある。しかし子供達は唯愉快さうに笑ふばかりであり、女の子達は手を叩いて嬉び乍ら公爵を接吻するばかりである。それは實に可愛らしい姿であつた。そして公爵はその度びに子供等に對する愛を深められたのであつた。

やがて、しかし、マリーの病氣は漸々と酷くなつてきた。もうろく〳〵歩けなくさへなつて、終ひには牧人にとつて少しも手助けにならないのであつたが、それでも彼女は依然として每朝牛を

つれて外へ出ていつた。そしてマリーはそこの捨石に腰かけたまゝ朝早くから牛の群れが歸つて了ふ頃まで一日殆身動きもせずに坐り通してゐた。肺病はいよ〳〵恐ろしく進んで身體は衰弱し息は重苦しくなつて彼女はよくウト〳〵と眠つてゐた。顏は骸骨のやうに痩せ落ち汗は額や蟋谷にも滲み出してゐた。公爵は村人の目を盜んでほんの僅かな時間を彼女に會つてやりに來る。

公爵が來ると、マリーはぶる〳〵と身體を顫はし目を睜いて公爵の方へ飛んでゆき、その兩手に縋つて接吻するのであつた。これが彼女にとつては此上ない幸福なのである。しかし彼女は既に身體も心も衰弱してゐるので口を利かうとしても云ふ事が判然せず、たゞ興奮と歡喜で夢中になつて身を慄はせたり泣いたりするばかりであつた。時とすると、子供達が公爵と共に來る事があつたが、その場合には子供達は二人から少し離れた所に立つて二人を護るやうな態度を取るのである。子供達にとつてはまたそれが非常に樂しいらしく見えた。そして公爵や子供達が歸つていつた後には、マリーはまた一人ぽつちになつて石に身體を寄せかけて眼を瞑り、以前のやうに身動きもせずに坐つて夢のやうな氣持で時を過ごすのであつた。

或朝、マリーはとう〳〵牧場へ出掛ける事も出來なくなり、空家同然の自分の家に寢てゐた。子供達はすぐその事を聞き知つて、其日は殆皆の者が交る〴〵見舞に出掛けていつた。マリーは床の上にたつた一人切りで寢てゐた。さうして二日の間といふものは子供達許りでマリーの介抱

をしてゐたが、やがてその事が知れると村の婆さん達が來て、傍につき添うて徹夜で彼女を見護つてやるやうになつた。その頃には村の人達もマリーを可哀相に思ふやうになつたのであらう、子供達を別段叱るやうな事もなかつた。しかし、マリーはいつもウト〳〵としてゐて、その間にも苦し氣に咳き入つてゐた。お婆さん達は子供達が來るとかへつて邪魔になるやうに思ひそれを追つ拂ふのであつたが、子供達はいつも窓の下まで來てマリーの樣子を見てゆくのであつた。中にはまた一言「お早う、わたしの好きなマリーさん」と云ひたいばかりに走つてくる子もあつた。マリーはその聲を聞くか顏を見るばかりで非常に元氣附いて、年寄達の止めるのもきかず、無理に片肱をついて起き上り、こつくり〳〵と感謝の意を表するのである。そして子供達が色々の土產物を持つてゆくに拘らず、彼女はもうそれを食べる事も出來ずに、到頭或日の朝がけに彼女の魂は此世を去つていつたのであつた。しかしそれは、恐らくマリーにとつて幸福な死であつたであらう。マリーは子供達の爲めに自分の薄命な事を忘れて了つたやうであつた。そして、死ぬまで自分を非常な罪人か何かのやうに考へてゐたマリーにとつては、此子供達の見舞は彼女の罪を許してやるといふ神樣の聲のやうに聞えた事であらう。

そして可哀さうなマリーの葬式の日が來た。その日、子供達はどんなに止められても彼女の棺を花輪で飾る事を怠りはしなかつた。そしていざ出棺といふ時になると、彼等は自分でそれを舁

ぐのだと云つて一時に棺に飛び掛つていつた。しかし勿論子供達だけでそれを昇ぐ事は出來なかつたので加勢して貰つたが、棺の進むあとについて皆は走り乍ら聲を出して泣いた。それは悲しくも美しい葬儀であつたと云へる。かうして我が可哀さうなマリーの魂は此世から葬られて了つたのであつた。

それ以來マリーの墓守はいつも子供達ばかりであつた。彼等は年中花を持つてきて墓を飾り、周圍には薔薇の木を植ゑ込んだりした。しかしこゝにまた一つの悶着が起つた。それは、この可哀さうなマリーに幸福な終りを與へてやつたのは、子供達とミシュキン公爵の愛によつてゞあつたのに、村の人々は公爵をつかまへて子供等を煽動したといふ件で、公爵を非難し迫害し出した事であつた。子供達は公爵に會ふ事すら禁じられ、シュネイデル先生は公爵の監督といふ役になつた。けれども公爵はやはり子供達と會ふ事を止めはしなかつた。公爵と子供達はよく遠い所から信號で話し合つたりした。子供達はまた公爵に可愛い手紙を送つたりした。さうしてこの村の迫害はかへつて公爵と少年達との仲を深くしたのである。公爵の子供に對する愛はもはや不可抗になつてきた。彼は世間の大人達と話をする事さへ好きなくなつた。好きないといふよりはそれは能きないといふ方が適當かも知れぬ。公爵は相手がどんなに善い人でも、その人が大人だといふと何んとなく窮屈に感ぜられてならないのである。そしてそんな時には彼はいつも彼の唯一の

友人、子供達のところへ逃げるやうにして急ぐのであつた。彼は、正午學校の退け時などに、袋をぶらさげたり石盤を抱へた連中が、喚いたり笑つたり巫山戯けたりしながら、賑々しくやつてくるのを見ると、實際不思議な程强烈な幸福な感覺を覺えるのである。そして絶え間なく走り續ける子供達の小さな足がちら〳〵する有樣や、連れ立つて走る少年少女や、彼等の笑つたり泣いたり喧嘩したりするのを見てゐるうちに、どんな胸の鬱もすつかり忘れて了ふのであつた。そしてミシュキン公爵の瑞西滯在三年間は、子供達と仲よくなる事によつて公爵に幸福に過ぎたのである！

しかし、こゝにミシュキン公爵の生涯にとつて一つの重大な事件が起つた。といふのは、若し公爵がこのまゝ此瑞西の地に止まる事が出來たなら、彼は恐らく世間の人からは「馬鹿」だ「白痴」だと云はれ乍らも幸福な日を送れたであらう。ミシュキン公爵は愈々本國ロシアに歸らねばならぬ日が來たのである。實際彼は今までロシアに歸る事などは考へてみた事さへなかつた。彼はたゞ夢のやうに自由に無邪氣に日を送つてゐたのである。しかし、公爵を世話してゐたシュネイデル先生がもう公爵の世話をしきれなくなつた爲めであらうか、或はまた他のもつと重大な事件によつてゞあらうか、兎に角シュネイデル先生は公爵の旅費までも負擔して公爵にロシアに歸る事を進めたのであつた。

公爵は突如として夢の中から此現實の世界へ唯一人おつぽり出されるやうに感じた。彼は多くのものを、多過ぎる位いろ〳〵のものを此地にのこして行くやうな氣がして悲しかつた。そして彼は考へたのである。

「俺もこれからは人間の中へ出てゆくのだ。大方俺は何一つ知つてゐないだらう。それだのにもう新しい生活がやつてきた。」

公爵は以後自分の爲すべき事だけは十分潔白に、そして堅固に遂行しようと決心した。そしてその第一段として、總ての人に對して慇懃に且つ正直でありたいと思つた。そして人々が今まで彼をその單純で正直であるが故に「馬鹿」と呼んでゐたのに對しては、心の中で「あゝして皆が俺を馬鹿扱ひにする。しかし人が何んと云つたつて俺は智慧のある人間だ、唯人はそれに氣が附かないだけなんだ」と考へた。

子供等も公爵の去る事を悲んだ。彼等は毎晩例の瀧の傍へ集まつてきて、別れる時の話ばかりをした。どうかすると以前と同じやうに愉快な晩を過ごす事もあつたが、只いよ〳〵家へ歸るといふ段になると皆が熱心に公爵を抱いた。或者などは皆のゐない所で二人切りで公爵を抱き締めたいばかりに、他の者に知れぬやうにそつと走つてくる。そして愈々公爵が出發するといふ時には、子供等は一同打ち揃つて停車場まで見送りに來た。

村から停車場までは十町もあつた。その間皆は泣くまいと一生懸命に押堪へてゐたが、隨分と泣いたのであつた。殊に女の子達は聲を立てゝ泣きむせんだ。そして一同は時間に遲れまいとして急いでゐたのであつたが、俄かに一人の子供が道の眞ん中で、群を離れて公爵に飛びついて、その小さな手を擴げて抱きついた時には、唯それだけの事の爲めに皆は足を止めて、その子の別れを告げる間を待つてゐた。

公爵が汽車に乘り、汽車が動き出すと、彼等は一齊に

「ウラー！」

と叫んで汽車が見えなくなるまで一ト所に立ち盡してゐた。公爵も亦彼等の姿が見えなくなるまで汽車の窓によつて彼等の方を見てゐた。さうしてミシユキン公爵は、愛すべき子供等と別れて了つたのである。子供等は歸り〳〵口々に

「レオンが行つて了つた。レオンが永久に行つて了つた！」

と呟き乍ら、悲しい面持で村道を歩いていつた。ミシユキン公爵、名をレオ、ニコラーエ并ツチ、ミシユキンと云ふ。此小說は此レオ、ニコラーエ并ツチ、ミシユキンのロシア歸國後に起る戀物語である。

（二）ナスターシヤ

ミシユキン公爵が瑞西から本國ロシアに向けて出發した頃、露都ペテルブルグにはナスターシヤ、フイリツポブナといふ非常な美人がゐて偏くその名を知られてゐた。噂によると彼女は當時大地主で財産家で色々な會社商會の關係者であるアフアナーシー、イワノヰツチ、トーツキーといふ者の思ひ女だといふ話であつた。此噂は萬更間違つたものとは云へないけれど事實はもつと詳しい事情がないでもない。それは次のやうなものである。

凡そ今から十八年前、中部地方なるトーツキーの裕福な領地と隣合せに或る貧しい小地主が住んでゐたが、重る不幸に疲弊し盡してゐた。それは絶え間なく失敗を續けてゐるので有名な男であつたが、元はさる由緒ある貴族出の退職士官で名をフイリツプ、アレクサンドロヰツチ、バラシコフと云つた。彼は有りつ丈けの物を抵當に入れ盡して、首も廻らぬ程借金に苦しめられてゐたが、幾年か囚人百姓同樣の勞働を續けて、やつと其些さやかな財政をどうにか息のつける丈けに整理した。此の僅かの成功にも彼は元氣づいた。元氣づいて希望に滿ちた彼は、重立つた債權者の一人と面談して巧く行けば綺麗に片をつけて了ふ位の積りで二三日の豫定で町へ出掛けて行つた。彼が町へ着いて三日目、折から頰は燒け爛れ髯は黑く焦げた村の百姓頭が馬を飛ばして駈け附けてきた。そして昨日の正午頃、その百姓頭の言葉によれば「代々傳つたお家が燒けて」了つて、其際「奥樣もお燒け死になされて、お子供衆ばかりは息災でおいでなさりまする」といふ報告を齎らしたのである。此異變ばかりは、流石に殘酷な運命の笞に馴らされてゐたバラシコフも堪へ切れなかつた。彼は氣が變になつて、一箇月後熱病で死んで了つた。燒け荒らされた領地は路頭に迷つてゐる百姓共もつけて、借財の抵當に取られて了つた。六つと七つになる二人の女の兒はトーツキーの持前の義俠心によつて引取られ養育される事になつた。孤兒達はトーツキーの支配人なる非職官吏で家族の多い獨逸人の子供等と一緒に育てられた。しかし間もなく幼い方の兒は百日咳で亡くなつたので、ナスチヤといふ娘が一人生き殘つた。トーツキーは主として外國で暮らしてゐたので、五年も經つうちに二人の女の子の事などはまるで忘れて了つてゐた。

或時、彼は所用で何處かへ行く序にふと自分の領地の有樣を見て置かうと思ひ立つた。そして村の持家で思ひも寄らず一人の美しい子供が、獨逸人の支配人の家族に交つてゐるのに氣が附いた。年の頃十二ばかり、活潑で發明で愛くるしい、成人してからの並々ならぬ美しさを思はせる、やうな女の兒であつた。此の道にかけたらトーツキーは決して眼鏡違などする事のない大家であつた。其時彼は四五日しか領地に滯在しなかつたけれど、樣々の指圖は洩れなくして了つた。そして此女の子の教育上に著しい變化が行はれたのである。即ち教育があつて人からも尊敬されて

ゐる、可成年寄つた瑞西生れの女が、家庭教師として招聘された。この家庭教師が田舎の家に住ふやうになつてから幼いナスターシヤ(ナスチヤ)の教育はめき〳〵進歩した。滿四年で此教育が終つて家庭教師は去つた。その後へは矢張りトーツキーと領地を隣り合はせてゐる或女地主がやつてきた。そしてトーツキーの依頼でナスターシヤを自分の所へ連れて歸つた。此の小さな領地に新たに建つたばかりの木造の家があつた。その家は實に優美に飾られてあつて村の名もまるで故意と附けたかのやうに慰樂村と呼ばれる。女地主は直ぐにナスターシヤを此閑靜な小家に連れてきた。ナスターシヤの身のまはりの用を足す者には、取締りの老婆と氣の利いた小間使とが出來た。さうして家の中には種々の樂器、優美な少女圖書室、繪畫、木版、繪具など目の醒めるやうな文房具が飾られた。

二週間程經つてトーツキーがそこへやつてきた。それ以來といふものは彼は不思議に此邊鄙な荒原中の一小村を愛して、毎年夏になるとこゝを訪れては一箇月、また多きは三箇月位づゝ滯在するやうになつた。かくして可成多くの時が經つた。四年の月日がその間を流れた。ところが或時次のやうな事が起つたのであつた。それはトーツキーが慰樂村へ來て僅か二週間かそこ〳〵で歸つて行つてから凡そ四箇月ばかり經つた冬の始めの頃であつた。トーツキーがペテルブルグで或財產家で名望家の美人と結婚しようとしてゐるといふ噂が擴まつた、といふよりは此噂がナス

ターシヤの耳に這入つたのである。後になつて此噂も細々とした點では不正確な所の多い事が分つた。結婚はほんの目算に過ぎず、總ての事は全く漠然とした狀態にあつたのであるが、ナスターシヤの運命は此時から一大變化を來したのであつた。突然彼女は非凡な決斷力を持つた女となつた。ナスターシヤはよく考へようともせずに、すぐさま田舍の家を捨てゝ、只一人ペテルブルグのトーツキーの所へ押しかけて來た。トーツキーは驚いて何やら云はうとしたが、忽ち氣が附いてぎよつとした。といふのは今彼の前には、この七月慰樂村で別れた女とは全るで別の女が立つてゐたからである。

此新しい女は今見れば、驚く許り多くの事を知り且つ解してゐるやうである。どこからこの樣な知識を得てきたのであらう、彼女は法律上の事もよく知つてをり、また世間では如何なる事が如何なる力を持ち得るかをも知つてゐる。かと思へば、以前は何んとなくおど〳〵して小娘のやうにとりとめがなく、或時は飛び放れたお轉婆になるかと思ふと或時はまた妙に鬱ぎ込んで僅かな事にも泣き出しさうになるといふ風な女であつたのが、今はまたまるで違ふ性格になつて了つてしまつてゐる。さう、今彼トーツキーの前には思ひも寄らなかつた異常な一人物が、から〳〵と傍若無人に笑ひ乍ら毒に滿ちた冷嘲で彼の心を苛んでゐるのである。そして此新しいナスターシヤは今迄自分の心の中に深い〳〵侮蔑の念の他、嘔氣を催すやうないま〳〵しい侮蔑の念の他

如何なる感情も彼に對して抱いた事がないと無遠慮に打ちまけた。それのみか、彼女はまた事實トーツキーが誰れと結婚しようがそれが彼女にとつて何の關係もないものではあるが、唯彼女は彼に結婚させない、意地でも結婚させないやうにしてやる積りだといふのである。それは只さうしてやりたいと思ふからだけで、さうしたいといふのはつまりさうしなければならぬといふ事になるからだとまで宣言した。そして彼女はまた附け加へた。

「まあそれで不可なければねえ、只散々お前さんの事を笑つてあげにきたんですよ。何故つて妾だつて好い加減な時には自分も人の事を笑つてやりたくなりもしませうさ。」

人間といふものは長い間心にそまぬ侮辱を蒙つてゐると、突然何かの機會で今までその心に秘めてゐた怒を爆發させて、恐ろしい向ふ見ずの態度をとるやうになるものである。ナスターシヤは今都に於いてトーツキーが地位あり名望ある家の娘と結婚したいと考へてゐると聞いて今までの自分は全く踏附けられてゐたものだと思ひ出したのである。

トーツキーは彼の年來の經驗と、その經驗によつて鋭くされた彼の眼光とによつて、今彼の前に立つてゐる女は並大抵の女ではない、此女は只口で嚇かすばかりでなく、必ず實行するといふ事、そして恐ろしい何物に對しても決して狐疑逡巡するやうな事のないものであるといふ事を見知つた。それはやがて彼の今迄築き上げた社會上の地位や名聲や信用に傷をつけるやうな事を仕出すに違ひないとも思はれた。トーツキーがこの新しいナスターシヤを恐れ出したのは勿論である。

ところがやがてトーツキーは一つの考へを考へ出した。といふのは、此ナスターシヤを早くどこかへ嫁がせようと考へたのであつた。ナスターシヤはその時既に成熟した、都會にも珍らしい美人であつた。それに彼女のさういふ捨ばちな氣性が彼女の顏を一層凄い美しいものにもした。彼女は實際見る者の氣を狂はす位の美しさを持つてゐたといふ噂であつた。だから、彼女の美しさをよく知つてゐるトーツキーにとつては彼女を相當才智あり地位ある男に嫁がせる事はさまで困難な事ではないと考へた。トーツキーはいろ〳〵の人を探がし初めた。

しかし、話はすぐに纏りさうもなかつた。ところが可笑しい事には新物食ひのトーツキーは、やがてまた怪しい慾望を起し出したのであつた。彼はもう一度此女を玩具にする事は出來ないかしらと考へ初めた。これはあながちトーツキーのみを責める理にはいかない事であるかも知れない、といふのは、それ程ナスターシヤが素晴らしい美人であつたといふ方が適當であつたとも云へようから。兎に角トーツキーはやがて、ナスターシヤをペテルブルグに住はして、思ひ切つて身の廻りを贅澤にさせる事に決心した。ナスターシヤ位の女なら決して人前に出して恥しくない。それどころか或る仲間の間では大に名譽を贏ち得るに相違ないとも考へたからである。そしてナ

スターシヤのペテルブルグ生活も既に五年經つた。

當時ナスターシヤはよく芝居見に出掛けていつた。彼女が劇場の買ひ切りの棧敷に坐つてゐると、それを傍から若い士官達がひどく感じ入つた樣子で眺め乍ら囁いたものである。

「おい〳〵、あれが例のナスターシヤ、フイリツポヴナだよ。」

こゝに名をパルフエン、ラゴージンといふ一人の若者があつた。この男の事に就いては吾人はやがて後にもつと詳しく述べる折があらうが、その男が或日ネーフスキー通りといふ街を歩いてゐた時、丁度ナスターシヤは店で何かの買物をしてきたのであらう、とある家から出て來てそのまゝふいと馬車に身を乘せたのであつた。パルフエン、ラゴージンは全く眼を刺し拔かれたやうな氣がした。彼は暫く茫然として立ち盡した。それからやがて、傍に立つてゐた友人ザリヨージエフに氣附いた。その時、ラゴージン自身は身に三年越しの親父の古服を着てゐたのである。と同時にザリヨージエフはと云へば彼は全く理髮屋の若衆のやうな歩きつぷりで、片眼鏡なんか嵌めてゐるのである。ラゴージンは當時まだ部屋住の身であつた。靴はと云へば臭い墨を塗りこくつたもので、食物は精進汁といふ躾け方なのである。

「おい〳〵」とザリヨージエフは、ナスターシヤに見惚れてゐる汚いラゴージンを叩き乍ら云つた。

「あれはお前なんかの相手ぢやない。あれはお前公爵家の奥方だ。ナスターシヤ、フイリツポブナつてんで、苗字はバラシユコフ、今はトーツキーの思ひ女だ。」

しかし、ラゴージンの憧れるやうな目の色は變らなかつた。彼は遠く去り行く夢を追ふやうな氣持で、ナスターシヤの馬車を見送つてゐた。ザリヨージエフはそのラゴージンの樣子に心を勵かせた。そして、實はトーツキーは今あの女から離れようと蹟いてゐる、といふわけはトーツキーは事實もういゝ年をしてゐながら、ペテルブルグ一番の上品な美人と結婚しようと目論でゐる、といふやうな事を教へた。そしてラゴージンをそゝのかすやうな口調で續けて云つた。

「今日お前、「大劇場」へ行けばナスターシヤが見られるよ。いつも買切りの棧敷、平土間のボツクスで所作事を見るんだから。」

その言葉は茫然として自失してゐたラゴージンの心に一吹の息を吹き込んだ。彼は今晩「大劇場」へ出かけようと決心した。ラゴージンの親父は名だたる吝ん坊である。ラゴージンが芝居見物などに行く事が知れたなら親父は全く彼を殺して了つたかも知れない。だが熱に浮かされたラゴージンはその晩秘かに家を拔け出して、一時間程を劇場で過ごしたのであつた。ナスターシヤの姿は今や全くラゴージンの心を燒きつけて了つた。ラゴージンはその夜一睡も出來なかつた。

翌朝がきた。それとは知らぬ親父はラゴージンに五分利附五千ルーブリの債券二枚を渡して云

つた。

「行つてこいつを賣つて來い。そのうち七千五百ルーブリをアンドレエフさんの事務所に持つて つて、殘餘は何處へも寄らずに眞直に俺の所へ持つてくるんだ。」

ラゴージンは胸が震へた。彼は債券を賣つて金を受取つたが、アンドレエフの事務所には寄らなかつた。彼の足は傍目も振らず彼を英吉利屋へ導いた。そこで彼は有りつ丈の金を拋り出して耳環を選り出した。兩方とも胡桃大の金剛石のついたもので、その爲めに金はまだ四百ルーブリ程足りなかつたが、名前を云つて信用で借りてきた。

耳環を持つたラゴージンはその足ですぐザリョージエフのもとへと急いだのである。

「おいザリョージエフ、これから一緒にナスターシヤの所へ行つて呉れ。」

やがて二人は戸外に出た。ラゴージンはその時足の下に何があつたか、眼の前兩側には何があつたか少しも覺えなかつた。彼の二つの眼は道の上を二つの光のやうにみじろぎもせずに進んでいつた。

ナスターシヤの家に着くと二人は直ぐに廣間へ通された。ラゴージンはどうしてどういふ所を通つてそこへ導かれたかまるで夢中であつた。唯彼は自分が廣間へ通されたかと思ふとすぐ目の前にナスターシヤ、フイリツポヴナの凄艶な姿が表れてゐた。ラゴージンは不思議な怖えを感じ

た。彼はどうしても自分がこの耳環の贈り主である事は云ひ出せなかつた。

「パルフエン、ラゴージンからの使でございます。昨日お目にかゝつた徵ですから、どうぞお納めなすつて下さいまし。」

ナスターシヤは手に受取つた耳環の箱を開いて中を見たが、するとにたりと笑つた。そして云つた。

「御親切な御心配、實に有難うございますと、貴君のお友達のラゴージンさんに御傳言を願ひます。」

さう云つたかと思ふと、彼女は默つて輕くお辭儀をして出て行つた。そのあとでラゴージンは不思議な感情に襲はれた。それは實際不思議な感情であつた。彼は自分がナスターシヤに會つた事、ナスターシヤがラゴージンなる者に對する感情の憶測などは少しも湧かずに、唯あの時自分の傍にゐたザリョージエフの事ばかりが氣になつた。

「あいつ奴、何一つ非の打ち所のない裝をしてやがる。あいつ奴何もかも流行づくめで頭はポマードをなすりつけるやら鏝を當てゝちゞらせるやら、いやほんのりといゝ血色をして格子の頸飾などゝいふ洒落た風をまでしてやがつた。それにあいつはその上お世辭を振りまいた。」

ラゴージンはかうしてザリョージエフの事を考へる一方自分の姿風體を心で顧みた。

「それに俺はどうだ。俺は背が低いうへに身なりときたら全るで獣のやうだ。」

その時ラゴージンは不思議な衝動に動かされて突然ザリョージェフに云つたのである。

「おいお前はもう俺んとこへ足踏もして貰ふめえ！」

これは嫉妬といふものであらうか。彼はなんとなくザリョージェフを憎む心があつたのである。

だが、相手は驚きはしなかつた。ザリョージェフは氣味悪くにや〳〵と笑つた。そしてラゴージンを煽てるやうにして云つた。

「ラゴージン君、だがお前は一體何んと親父に言分けする積りだい。」

この一言はラゴージンの心を打ちのめした。彼は自分が親父の金を總て費ひ盡した事を思ひ出したのである。瞬間彼は自分をどこか水の中へ投げ込んで了はうとする慾望に襲はれた。しかしまた直ぐ次の瞬間には全く別な考へが起つた。それは虐げられた悪魔のやうにラゴージンの心に蔽ひ掛つてくる。

「え、何だつて同じ事だ！」

そして彼は、全るで死刑の宣告を受けた人間のやうな痛々しさで家へ歸つた。

ラゴージンが親父の金で耳環をナスターシャに贈つた事は、ザリョージェフの云ひ振らしによつて直ぐ親父の耳にも入つた。親父はラゴージンを捕へて二階に押し込め、一時間許り彼を叱りつけ苛んだ。

「いゝか、これはほんの下用意だ、また今夜やつてきてとつくりと腹に入るまで聞かしてやるから。」

ラゴージンの親父はそれからナスターシャの所へ急いだ。そしてその胡麻鹽頭を地べたにすりつけて泣く〳〵、ラゴージンの贈つた耳環を返へして呉れと頼んだ。彼はそれを持ち歸つてまた金に變へようと思つてゐたのである。

「どうぞ、はい、まことに恐れ入りやす。悴奴がはい、このわつしの金を盗みやして、はい、まことにどうも恐れ入りやすが、はい……」

ラゴージンの親父の眼には涙がたれてゐた。ナスターシャはそれ等を默つて聞いてゐた。それからやがて奥に入つて、耳環の箱を掴んできた。彼女はそれを親父の前に投げつけたのである。

「さあ髯爺さん、これがお前さんの耳環ですよ。パルフェンさんがそんな恐ろしい目をして手に入れたものだと聞いたら、此耳環が十倍も有難くなつた。何卒パルフェンさんにはよろしくお禮を云つて頂戴。」

パルフェン、ラゴージンはその晩何處からか二十ルーブリの金を借りてきて汽車で地方へと立

つて了つた。彼はその地に着いた時、酷い熱が身體を燒いて、土地のお婆さん達は彼の爲めにお經を誦んだ。その翌日からラゴージンの姿は町の酒屋に現れた。彼はさうしてそれからは酒屋酒屋を飲み歩いて日を送つてゐたのである。ナスターシャの名はそれから一層人々の耳に廣まつた。

(三) エパンチーン將軍一家

十一月下旬の事であつた。珍らしく暖いとある日の朝九時頃、ペテルブルグ・ワルシャワ鐵道の一列車は全速力を出して露都に近づきつゝあつた。空氣は濕つて霧深く、夜は辛うじて明放れたやうに思はれた。汽車の窓からは右も左も十歩のさきは一物も見分ける事が出來なかつた。旅客の混んだ三等車には近所の小商人連が多かつたが、誰も彼も疲れ切つて一晩の中に重くなつた目をどんよりとさせ、身體をがた〳〵と慄はせてゐた。どの顏もどの顏も霧の色に蝕まれて蒼黃色く見える。

とある三等車の窓近く、夜明け頃から二人の旅客が膝と膝とを突合はせて腰掛けてゐた。どちらも若い人で、どちらも身輕に裝うた奢らぬ扮裝、どちらも可成り特徴のある顏形をしてゐて、どちらも互に話でも初めたいらしい樣子である。若し此二人が何故自分達の身の上が殊に此場合

驚くべき性質を帶びてゐるかといふ事を互に知り合つたら、彼等は必ずや自身等兩人をペテルブルグ・ワルシャワ線の三等車に向ひ合つて坐らせた運命の奇に驚いたであらう。一人は背丈の高くない二十七歳ばかりの男で、殆ど眞黑い髮毛は渦を卷き小さい灰色の目は火のやうに輝いてゐる。鼻は低くつて平つたく、頰骨は尖つて高く出つぱり、薄手な唇は絶えず何んとなく傲慢な、人を小馬鹿にしたやうな毒々しい薄笑ひを含んでゐる。けれども額は高く秀でゝ恰好よく整ひ、卑し氣に發達した顏の下半部を補つてゐた。彼は恰も死人のやうに蒼ざめた色光澤をしてゐるので、これがこの若者に體格の巖丈さに似合はぬ疲憊し盡した人のやうな外貌を與へるのであつたが、それと同時にその思ひ上つたやうな粗暴な薄笑ひや、自足したやうな鋭い眼眸とは全るで調和しない、堪へきれぬ迄に熱情的な或物があつた。彼はゆつたりとした黑い羊皮の外套にぬくぬくと包まつてゐるので、昨夜の夜寒もさまでに感じなかつたらしいが、向ひの席の相客は、思ひも掛けなかつた濕つぽいロシアの十一月の夜の酷しさを、背を震はせ乍ら押しこらへねばならなかつたのである。彼は大きな頭巾附のだぶ〳〵した地の厚いマントを着てゐたが、それはどこか遠い外國瑞西か伊太利あたりで冬の旅行に使はれるものそつくりであつた。しかしいくら伊太利あたりで便利な物でも、ロシアでは餘り結構ではない事が多い。

此青年も年は同じく二十六か七か、背は並よりも少し高く、房々とした艶々しい亞麻色の髮、

こけた頬、一撮み程の頤鬚、そして大きな空色の眼はぢつと据つて、何か物を見る時はなんとなく重々しい奇怪な表情に充たされるのであつた。とは云へ、彼は繊細で氣持がよかつた。彼は中味の貧しさうな色のさめた古い風呂敷包を兩手にぶらさげてゐる。見たところその中には彼の旅行中の用具一切が含まれてゐるらしい。

髪の黑い羊皮の外套の男はこれ等をつく〴〵と觀察して居たが、到頭無作法な嘲笑を洩しつゝ氣のない調子で話し掛けた。

「寒いかい？」

さう云ひ乍ら彼は肩をちよいとすくめた。

「えゝ實に」

と、相手は驚く許りの素直さで答へた。「ねえ今日はまだしも雪溶けの天氣ですから我慢出來ますが、若しこれが凍り日だつたらどうでせう、僕はロシアがこんなに寒いとは思はなかつた。忘れちまつてゐたんです。」

「外國から來たんだね」

「えゝ瑞西から。」

「ふつ！　ほんにお前さんは何んて……」

髪の黑い方の青年はかう云つて笑ひ出して了つた。話はこんな風で始まつたのである。頭巾附マントを着た方の青年は實際相手の質問が人を馬鹿にした無遠慮な態度から發せられる事には少しも氣附かぬらしかつた。そして自分が外國に行つてゐたのは自分の病氣の爲めからだといふ事を話した。

「どうだね。そして癒つたかね。」

話を聞いてから黑髪の青年は例の人を馬鹿にしたやうな傲慢な口調で訊いた。

「いゝえ、癒りませんでしたよ。」

と相手は答へた。これは再び傲慢な青年を笑はせた。

「べつ！　大方無駄な散財をやつたんだらう。同じ事ならこつちで費つた方が御利やくが多いや。」

「いや全くほんとの事でがすよ。」

年の頃四十許りの赤鼻で痘痕顏の小役人らしい男は、今迄默つて二人の會話を聞いてゐたが此時突然かう口を出した。

「全くほんとの事でさあ、ロシアの力はみんなかうして外國の奴等に奪はれて了ふのでげす！」

「いゝえ、どう致しまして。貴方々は飛んだ勘違ひをしていらつしやいますよ。」

と外國からの患者は靜かに宥めるやうな聲で遮つた。

「僕は詳しい事情はよく知りませんが、僕のドクトルはなけなしの金を割いて僕の旅費を出して呉れました。それにあちらにゐた三年間といふものは皆自費で養つて呉れたのです。」

「ちや何かね、誰も拂つて呉れ手がなかつたといふのかね。」

「えー、もと仕送りをして呉れたノヴリーシチエフさんが二年前に死んで了つたのです。それから僕はこつちにゐる人で遠縁に當るエパンチーン將軍夫人に手紙を出しましたが、返事はなかつたのです。ロシアへ歸つたのも一つはそれが爲めです。」

「そして何處へこれから行きなさるんですね。」

「つまり何處へ泊るつもりかと仰有るんですね。さあ、まだ分りません、實際……その……。」

二人の聽手は更に笑ひ出した。

「そして大方その風呂敷包の中に、お前さんの道中の手廻りがすつかり這入つてるんだらうなあ。」

黑髮の青年がかう訊いた。

「それに違ひごわせん、わつしが首でも賭けまさあ。」

と、恐ろしく得意な顏付きで赤鼻の小役人が口を挾んだ。「さうして手荷物車の中にも何も預けものはなさゝうでがすぜ。例にも貧乏は罪にならんと申しやすが、それにしてもこれはちと……はゝゝあ。」

不思議な事にはこれ等の話中に當の相手なる瑞西マントの青年は、自身も二人の樣子を見て到頭笑ひ出したのである。それがまた相手の浮々した氣持を助長させた事も疑ひない。

「いやそれにしてもあんたの風呂敷包には大分意味がありさうですなあ。いや無論、その中にナポレオンとかフリイドリッヒとかまたは下つてアラブとかいふやうな外國の金貨束が入つてゐない事は殆ど間違のない所でがす、それはあんたの外國風な靴にかぶさつてゐるゲートルを見たゞけでも察しがつきまさあ……併しですなあ、例へばエパンチーン將軍夫人の如き御親戚を加へるとあんたの風呂敷包も大分違つた意味を帶びて來ますて。だがそりや勿論エパンチーン將軍夫人が本當にあんたの親戚で、あんたがうつかりと思ひ違ひをしてをられん場合に限りますがね、はゝゝあ、いやさういふ事は實際よくある事でがすからなあ、その何んといひやすかな、想像の過剩といふやうな、ね。はゝゝあ……。」

漸々と調子にのつてきた赤鼻先生はしまひには到頭こんな氣の利いた口振りで冷嘲を初めたのである。

「おゝ、あなたはまた云ひ當てましたね。」

と瑞西マントの青年はそれにも拘らず、不相變素直な微笑を浮べ乍ら答へた。「全く殆ど思ひ遠ひをしてゐるといつてもいゝのです。そのつまり親戚でないかも知れないのです。ですから彼方で手紙を出した時に返事が屆かなかつたけれど、實際少しも驚かなかつたのです。始めからそれを豫期してゐました。」

此の會話中、黑髪の青年は欠伸をしたり、あてもなく窓の外を眺めたりしながら旅行の終りをもどかし氣に待つた。彼は何んとなくそは〳〵してゐた、何かしら心配事でもあるらしく酷く樣子に落付きがなかつた。時に聞くともなく耳を傾け、見るともなく眺めたり、何かの拍子に笑つてもすぐ、自分のその笑つたのを忘れて了ふやうでもあつた。そして突然彼はマントの青年に問ひかけた。

「お前ラゴージンを御存じかね。」

「いや知りません、全く。僕はロシアに知人といつてはいくらもないんですものねえ。で、君がラゴージン君ですか。」

「うん、おれなんだよ。パルフェン……。」

黑髪の青年は何と思つたのか、かう眞直ぐに答へた。

「え？　パルフェン？　それぢやあんたはあの例のラゴージン家の人では……。」

黑髪の青年の答は、痘痕赤鼻の小役人をひどく驚ろかせたらしく、彼は如何にも思入つた物々しさでパルフェンの方をふり向いた。

「あゝ、あの例のだ、例のだ。」

とラゴージンはぶつきら棒な苛立しげな聲で口疾に遮つた。

「へえ……」と此方は驚いて叫んだ。「これあ一體何としたこつた！　ぢやあ、あの一ト月ばかり前に二百五十萬ルーブリの遺産を殘して亡くなられた、名譽市民セミョン、パルフェノー井ッチ・ラゴージンさんの？」

役人の痘痕面は見る〳〵卑屈な位恭々しい調子を帶びてきた。事實、パルフェン・ラゴージンの父親は、パルフェンが親父の金を横取りしてナスターシヤに耳環を買ひ與へた事から、到頭地方へ向けて逃げ去つた事のあつた日から五週間許り經つて或日、中風でどつかと倒れて了つたのである。そしてセミョン、パルフェノー井ッチ・ラゴージンは巨額の遺産を後にその吝しい一生を終つたのであつた。ペテルブルグ、ワルシヤワ鐵道で十一月の朝、パルフェンが露都をさして急いでゐるのは、つまりその爲めである！

汽車は愈露都に近づいた。

「こんどはナスターシヤもあんたの機嫌を取り出すに違ひこわせん。今ぢや旦那も耳環位わけは

ありませんや、いひゝゝ。」

役人は尙も、今は百萬長者となつたラゴージンにあやからうとするかの如くお世辭を續けてゐた。汽車はペテルブルグに着いた。停車場には、もう幾人かの人がラゴージンを待受けてゐて喚いたり帽子を振つたりしてゐた。

「ちよつ、ザリョージェフの奴もゐやがる」とラゴージンは勝誇つたやうな毒々しい微笑を浮べて呟いたが、不意に、かの瑞西マントを着た青年の方を振り向いて云ひ出した。

「ねえ君、何故か分らんが俺はお前に惚れ込んぢまつた。おれの所へ來な。そのゲートルを脱がして、素的な紹の外套を着せてやる。燕尾服も飛切り上等な奴を縫はせようし、チョッキは白いのなり何なり氣に入つた奴を拵へさせ、どのかくしにも皆んな一杯に金貨をつめてやらあ……そして……一緒にナスターシヤの所へ行かう！　來るかね？　來ないかね？」

青年は立上つて慇懃に手をラゴージンに差出し愛想よく答へた。

「えーもう喜んで參ります。それに君が僕を愛して下すつた事に對しては、實に感謝の念に堪えません。間に合ひさへしたら今日にも上るかも知れません。實は打明けて云ひますが僕も君が大變氣に入つたのです。いやもうその前から、君が陰氣な顏をしておいでになると思ひ乍らも矢張り氣に入つてゐたのです。お約束下すつた服も外套も有難く頂戴します。實際服も外套も直ぐに

ゐるもんなんですから、金はまた今のところ殆ど一カペイクも持ち合せがありません。」

「金はすぐ出來る。夕方迄に出來る。やつておいで。」

「出來ますよ、出來ますよ。本當ですよ。」

と役人は我事のやうに口を挾んだ。

「だがお前さん、女は餘つ程好きかね。先きに一寸聞かせといてくれ。」

ラゴージンは何事かを胸で考へるやうな樣子で、瑞西マントの青年に問うた。

「僕、いゝえ、僕はだつて、君は御存じないかも知れませんが、その生れつきからの病氣で全く女といふものを知らないのです！」

彼は少し羞し相な顏に不相變の優しい微笑を浮べて答へた。そしてラゴージンの一行はかの汽車中で知り合ひになつた赤鼻の役人をも引連れて停車場を出掛けた。

「ところで失禮でがすが、あんたは何誰でごわすかな。」

と役人は青年に訊いた。

「レオ、ニコラーエヴツチ、ミシユキン公爵。」

青年は猶豫もなくきつぱりと早速に答へた。かうして、パルフエン・ラゴージンとミシユキン公爵は、偶然な車中の同席から見知り合になつたのである。これは丁度、瑞西から本國ロシアへ

向けて出發したミシユキン公爵の旅中の出來事であつた。役人の名はレエベヂエフといふ。ラゴージンの騷々しい一行はヴズネセンスキー通りの方へと去つた。ミシユキン公爵はまたリチヤイナヤ街へ曲らなければならなかつた。彼はエパンチーン將軍夫人をたよつて同家を訪れようとしたのである。

エパンチーン將軍はリチヤイナヤ街近くの自分の持家に住んでゐた。此立派な家の他に彼は他の街にも大きな家を持つてゐてこれがまた非常な收入になる。此等の家の他、ペテルブルグの直近くに至つて收入の多い領地があるし、また郡部には何とかいふ工場もある。今は彼は同時に甚だ鞏固な或株式會社にも關係があつて仲々に大した勢力を持つてゐる。金の澤山ある人、仕事の澤山ある人、交際の澤山ある人として彼は通つてゐた。と同時にまた、イヴン、フヨードロヰツチ、エパンチーンは無教育で兵隊の悴から成り上つたものだといふ事も徧く知れ渡つてゐた。彼は頗る利口で敏活で、自分の出るべき幕ではないと思つた所には決して出しやばらない。

將軍には又花の咲いたやうな家庭がある。卽ち夫人と三人の娘である。將軍が結婚したのはずつと以前でまだ中尉時代であつた。花嫁たる同じ年の娘は格別縹緻がよいといふわけではなし教育があるといふのでもなし、只持參金として五十人の農奴が附いてゐるきりであつた。尤もこれが彼の將來の運命の基礎となつたのであるが。そして將軍は後々までも決して自分の早婚を悔ゆ

る事なく、夫人を尊敬し又時としては恐れ、終には惚れ込んで了つた位である。夫人はミシユキン公爵家の生れであつた。家柄はさう大したものではなかつたけれど至つて舊家なので、その生れの爲めに自分を尊いものとしてゐた。

此數年間に將軍の三人の令孃もすつかり發育し成熟して了つた。アレクサンドラとアヂエライーダと、アグラーヤと。實際三人とも持參金はタップリあるし、父親は今に顯位高官にも昇らうといふ勢である上に、母方の血筋は公爵家の血を引いてゐるし、それに見落してはならぬ事は三人とも珍らしい美人だといふ事等、咲いた花のやうである。今年二十五になる長女アレクサンドラもその數に洩れなかつた。次は二十三で、乙娘のアグラーヤはやつと二十になつたばかりである。此アグラーヤはもう人並優れた大變な美人で世間からも喧ましく評判になり出した程である。この上に三人が三人揃つて教育、知識、才能の諸點で卓越してゐる。彼等が互に愛し合ひ扶け合つてゐる事も人に知れ渡つてゐる。二人の姉が一家の偶像たる妹の爲めに一種の犧牲になつてゐるといふやうな事まで世間では云はれてゐる位である。しかし三人とも餘り交際社會には顏出しをしなく、その點少々愼み深すぎるといふ程であつた。

アレクサンドラは音樂家である。アヂエライーダは秀れた畫家であつた。それに此三人の娘に對する世間の反對者の言葉によれば、彼等姉妹は恐ろしい位多量の讀書をし、また結婚を急がう

とするやうな所は少しもなく、父親は娘を全く娘の意志次第にやらせるやうにしてゐる。娘等はだから社會の或階級に對して決して尊敬の念を抱いてゐない、いや輕蔑をさへ持つてゐる、さういふ噂さへ立つてゐた。

此エパンチーン將軍の花の咲いたやうな家庭に、これは勿論將軍一家の家族ではないが、通稱ガーニャと呼ばれてゐるガヴリーラ、アルダリオーノヰッチといふ將軍氣に入りの書記官がゐる事も見逃せない。彼は二十八歳位の美男子であつた。中肉中背のすらりとした金髪青年で、ナポレオン式の小さな髯を蓄へ利口さうなしかも素晴らしく美しい顔をしてゐた。只、あまりに纖細過ぎるし、それに笑ふ時に覗く齒並が眞珠か何かのやうに餘りに整ひすぎる。そしてその眼付は隨分快活で無邪氣らしくも見えはするが、何だか餘り据り過ぎ、あまり探りを入れようとし過ぎるやうにも思はれる。

ミシュキン公爵が、瑞西から歸國し、初めて將軍の住居を訪れて玄關のベルを鳴らしたのはもう十一時頃であつた。玄關の扉を開いたのは將軍家の下男であつた。彼は胡散臭い容子で客の姿やその手に持つてゐる風呂敷包を眺めた。公爵は此男との押問答に可成の時間を費やさなければならなかつた。下男はやがて何遍訊いても自分が正眞正銘のミシュキン公爵であつて急用の爲めどうしても將軍にお目にかゝらねばならぬと返答するので、不承々々ではあるが、傍に添ひつく

やうにして客間の手前、居間の直ぐ傍にある控室へと公爵を導いた。そして此控室の當番で客の取次を役目としてゐる男に手から手へと引渡した。それは燕尾服を着込んだ四十過の男で何時も仕事の事が大變氣に掛るやうな勿體振つた樣子をしてゐる。閣下の居間專任の召使と取次を兼ねてゐるので仲々氣位が高い。

「何卒客室の方でお待ちを願ひます。包はこれにお置きなすつて。」

悠々と勿體振つて自分の安樂椅子に腰を下しに掛つた彼は、公爵が包を手に持つたまゝすぐ自分の隣りに座を召めたのを見て吃驚して六ケ敷しい顏をし乍ら、かう注意した。

「若しお邪魔でなかつたら」と公爵が云つた。「僕は君と一緒に此處で待つてゐる方が勝手がいゝですよ。あんな所に一人切り坐つてゐたつて初まりませんからなあ。」

「でも控室においでになるつて法はありません。あなたは訪問の人、つまりお客樣ですからね。あなたは將軍閣下に直接お會ひになるのですか。」

「えゝ僕は少し用事があるもんですからねえ……」と公爵が云ひ出した。

「わたしは御用事のことなんか聞いてはゐません、わたしは只あなたを御案内したらいゝのですからね。併し今申した通り祕書の方がいらつしやらないと、何うも御取次する譯に參りませんが。」

此下部の疑念は次第々々に增長してゆく樣であつた。此公爵は彼が日毎に接する客の種類と餘

りに似てゐる所が少なかつた。

「ですが、あなたは全く外國からお歸りになつたのですね。」と、彼は何氣なしに訊いたが終の方は妙にへどもどしてゐた。それは彼は實は

「ですがあなたは全くミシュキン公爵ですか。」

と訊かうとしたのであらう。

「えゝ、たつた今汽車から降りたばかりです。併し何だか君は僕が實際ミシュキン公爵であるかどうか訊かうとしたのを、失禮だと思つて止めたやうに思はれますよ。」

「む！」と下部はびつくりして唸つた。

「大丈夫ですよ、僕は君に嘘なんか云やしないから、君が僕の事で責任を負ふやうな事はありやしません。又僕がこんな裝をしてこんな包など提げてゐるのも別に驚くことはいのです。目下僕の財政は頗る逼迫してゐるんですからねえ。」

十分程後に祕書のガーニャが出てきた。その間ミシュキン公爵は取次と彼の部屋で死刑に就いての話をしてゐた。公爵はフランスの死刑についてその人間の精神に及ぼす殘酷さを說いた。そして、自分がフランスで見た死刑の現狀を話し、且つ意見として次のやうに云つた。「ところがねえ君、本當にするともしないとも君の勝手だが、死刑臺に上るとその男泣き出したですよ。紙

のやうに白い顏をして。まあ、そんな事があつてもいゝものなんですか。實に恐ろしいぢやありませんか。子供ぢやあるまいし四十五にもなるといふ大人がねえ……。」さう云ひ乍ら公爵は益益その口調に熱を込めて續けた。「拷問といふのならねえ、これを受けるものは身體に傷を附けられたりなんかして苦しいでせう。けれどもそれは肉體の苦しみだから却つて心の苦しみを紛らして呉れます。だから死んで了ふまで只傷で苦しむばかりです。ところが一番强い痛みは多分傷ぢやありますまい。今一時間經つたら、十分經つたら、三十秒經つたら、魂が身體から飛出して了つてもう人間ではなくなるんだといふ事を、確實に知る事です。この確實にといふのが大切な點です。――僕はねえ君隱さずに僕の意見を云ひますが、殺人の罪で人を殺すのは當の犯罪以上の刑罰です。宣告を讀み上げておいて人を殺すのは、强盜の人殺しなどゝは比較にならぬ程恐ろしい事ですよ。强盜に夜森の中か何處かで殺される人は必ず最後の瞬間まで救助の希望を持つてゐます。此最後の希望があれば十層倍も氣易く死ねるものを、死刑はそいつを確實に奪ふのぢやありませんか。これは實に恐ろしい苦痛です。人間の本性は發狂せずにそれを堪へる事なんかどうして出來ませう……。」

此時控室へ手に書類を持つた若い男が這入つてきた。

「ガヴリーラ、アルダリオーノヴィッチ。」と取次は恭々しく彼に話し掛けた。「此方はミシュキン公

爵とか申されまして、奥様の御親戚ださうでございます。今しがた汽車で外國からお歸りになつたばかりださうでして、風呂敷包をお抱へになつて只今……。」

「あなたがミシュキン公爵でございますか。」

と、ガヴリーラは思ひ切り愛想よく丁寧に尋ねた。公爵は一切の爲し能ふだけの説明を手短かに聞かした。ガヴリーラはそのうち何やら思ひ出した様子で

「あなたぢやありませんでしたか。一年程前確か瑞西からエリザベタ様に手紙をお寄越しになつたのは。」

「え、さうです。」

「ぢやこちらでは貴君の事を御存じですから屹度覺えてをいでになるでせう。早速お知らせして來ます。併しあなた、一寸の間客間の方へいらつしやいませんか……どうしたつてまたこんな所にいらつしやるのだ。」と彼は可怕い顔をして取次の方を向いた。

「さう申したのですが、嫌だと仰有いますから。」

居間の戸が開いて手提鞄を抱へた軍人が聲高に喋り乍ら會釋をして出てきた。

「ガーニヤ、君此處に居たのか。」と居間の中から誰やら怒鳴つた。「鳥渡此處へ來て呉れんか。」

ガヴリーラは公爵に首を一つ振つてみせて忙し氣に居間へ這入つていつた。エパンチーン將軍

の客なる軍人が歸つて、愈々ミシュキン公爵面會の順が來たらしい。三分程經つて又戸が開いた。そしてガヴリーラのよく通る愛想のいゝ聲が聞えた。

「公爵、お這入り下さい！」

イヴン、フョードヰツチ、エパンチーン將軍は書齋の眞中に立つて、並々ならぬ好奇心を抱き乍ら、入り來る公爵を眺めた。そして堪へ兼ねたやうに二歩ばかりその方へ踏み出した。公爵は進み自ら名前を名乘つた。

「はゝあ成程」と將軍は受けた。「一體どんな御用ですかね。」

「格別急用といふ程のものもありませんが、僕の目的は唯貴方と御昵懇に願ひたいのです。無論御面會日も又貴方の御都合も知らないのですから御迷惑だとは存じましたが……何しろ今汽車を降りたばかりなんでして……瑞西から着いたばかりなのですから……。」

將軍は危く笑ひ出しさうにしたが、氣が附いて止めた。それからもう一遍氣が附いて顏を顰めさて改めて客の姿を頭から足の爪先まで眺めた。やがて手早く椅子を客に指し自ら自分は稍斜かひに腰を下ろし乍ら、もどかし氣な期待を持つて公爵の方へ向いた。ガーニヤは書齋の隅の机に寄つて書類を選り分けてゐた。

「左様、わたしは全體お近附なんていふ事には餘り時間のない方でして」と將軍が云ひ出した。

「併し、あなたは勿論何か特別な目的を持つてお出でゞせうからして。」

「僕も前からさう感じてゐました、」と公爵は遮つて、「僕の訪問に何か特別の目的があるとお思ひでせうと。けれども全く、御昵懇にさへして頂いたら滿足なんでして、他に私用などゝいつてはないのです。」

「成程。いや勿論それはわたしにとつても御同樣ですがね、併し何時も道樂半分ぢや濟まない。それにわたしはどうしても今迄お互の間に共通な點、つまりその原因を發見する事も出來ないのでして……。」

「原因、勿論ありません。又共通の點の少い事も爭はれません。何故と申して、よしや僕がミシキン公爵で、あなたの奥樣がわたし共の家からお出になつたとしても、これは申す迄もなく原因ぢやございません。併し僕が此方へお尋ねした理由は全部それに懸つてゐるのです。僕はもう四年以上もロシアに居なかつたのです。それに出ていつた時の僕の有樣は殆白痴同樣でしたからその時だつて何も分らなかつたのです。だから今では猶更の事です。それで今いゝ人を近附きに欲しいと思つてゐます。これが唯一の用事なんです。何しろ何處へ落付いていゝやら、それさへ分らないんですからねえ。未だ伯林あたりを通つてゐる時から考へました。「あの人達は殆ど親類のやうなものだから、あの人達から始めよう。若しかしたらあの人達は自分の爲めに、自分はあの

人達の爲めにお互に役に立ち合ふかも知れない。但しあの人達がいゝ人だつたならば」とこんな風に考へたのです。ところがあなた方はいゝ人といふ事を聞きましたので……。」

「いや實に何とも有難うございます。」と將軍は度膽を拔かれて「失禮ですが何處へ宿をお取りになりました。」

「僕はまだ何處にも宿を取りません。」

「それぢや汽車から眞直ぐにわたしのところへ？」

「えゝ、宿はいづれ夕方までに取れるでせう。」

「では矢つ張り宿をお取りになるつもりですか。」

「おゝ、それは無論さうです。」

會話はかういふ調子で進んだ。將軍は公爵にこれから何か仕事をしてゆくつもりか、また何か才能を持つてゐるかを問うた。それに對して公爵は

「職の事でしたら僕も大變望みなんです。四箇年の間僕は絶えず勉强しました。ロシアの書物も大分讀む事が出來ました。」

「ロシアの書物を？　それぢや讀書算術の心得もおありでせうな。誤謬なしに文章が作れますか。」

「おゝ大丈夫出來ます。」

「それは何より。そして手蹟は？」

「手蹟は立派なものです。恐らく僕の才能はこれにあるでせう。この點にかけては僕は實際能書家です。なんなら僕試驗の爲めに何か書いてみませう。」と公爵は勢込んで云つた。

「何卒お願ひします。それは寧ろ必要な事です。併しわたしはあなたの早速なのが氣に入りました。公爵あなたは全く可愛いゝ方ですよ。」

「お宅の文房具は何て立派なんでせう、そして何と澤山のペンや鉛筆でせう。紙も實にしつかりして立派ですねえ。それにこれは全く立派な御居間です。あゝ此風景畫は僕知つてます。これは瑞西の景色です。僕は此場所を見た事があると思ひます。これはウイリ縣の……。」

「大きにさうかも知れません。尤も此處で求めたのではありますが。ガーニヤ、公爵に紙を差上げて呉れ。さ、ペンと紙、そしてこの卓子においで下さい。何だそれは？」と將軍はガーニヤの方を振向いた。ガーニヤはその時自分の手提鞄から大形の寫眞を取り出して、將軍に差出したのである。

「や、ナスターシヤ！　これは自分で君に送つて寄越したのかね。自分で？」と、將軍は急に元氣附いて烈しい好奇心を以つてガーニヤに訊ねた。

「今わたしがお祝に行つたらこれを寄越したのです。前から頼んでたもんですから。何ですか、事によつたらこれはわたしが今日のやうな日に贈物も持たずに空手で行つたといふあてこすりかも知れません。」とガーニヤは不快氣に薄笑ひし乍ら云ひ足した。

「なんの、そんな事」と將軍は押遮つて「ほんとに君の細胞組織はどうかしてるよ。あれがあてこすりをするなんて、それに決してそんな慾張りぢやない。あゝ寫眞と云へばあれの方からも君に呉れと云はなかつたかい。」

「いゝえ、未だ呉れとは云ひません。えゝ大方何時まで經つても呉れなんて云はないでせう。特に閣下、あなたは無論今夜の會の事を覺えていらつしやるでせうね。あなたは特別に招待されていらつしやる人なんですから。」

「覺えてゐるよ。覺えてゐるよ、勿論。そして出席もする。分つてゐるぢやないか、二十五の誕生日だもの！　ふむ！……そこでだね、ガーニヤ俺はすつかり君に打明けて云ふが、それはもう當り前の事だけれど、君、しつかりやらんといかんぜ。今夜否やか應かの返事をするやうに、あれが俺とトーツキーさんに云つたんだからねえ。ほんとに用心しなくちやいけないよ。」

ガーニヤは稍顏色の青ざめる程どぎまぎし始めた。

「あれは確かにさう云つたんですか。」と訊ねた聲は何んとなく震へてゐた。

「一昨日約束した。俺達二人うるさい程附き纏つて到頭無理矢理にさうして了つたのさ。併し君に丈は暫く云はずに置いて呉れと云つてた。」

将軍はぢつとガーニヤを見詰めた。彼の困つたやうな様子は明らかに將軍の氣に入らぬらしかつた。

「ですが閣下、あなたは覺えていらつしやいますか。」とガーニヤは心配さうに思ひ切り惡く云ひ出した。「あれは自分で決心する迄は、わたしにも熟考の自由を與へると云ひました。それにその時が來たつてわたしの決心はわたしの意志次第ですから……。」

「ぢやあ君は、ぢやあ君は若しや……」と不意に將軍は怖えたやうにかう云つた。

「わたしは何でもありません。」

「ほんとに冗談ぢやない、君は俺達をどうしようといふのだ。」

「わたしは別に嫌だと云つてはゐないぢやありませんか。」

「いゝや、君は嫌だと云つたのだ。」と將軍は忌々しさうに、またその忌々しさを隱さうともせずに答へた。「ねえ君、君が嫌だと云はないのが問題ぢやない。問題は君があれの申出を承諾する時の用意とか滿足とか乃至は喜びとかいふものにあるんだ。それで一體家の方はどうなんだね。」

「家の方ですか。家の方は只わたしの意志一つです。父親は例によつて馬鹿の限りを盡してゐる

んですから、あんな人と口を利く必要はありません。いや實際母さへゐなかつたら出て行つて貰ふ所なんですよ。勿論母はいつも泣き通しですし、妹はぷり〳〵怒つてばかりゐます。」

「ところで君、俺に未だに分らないのは」と將軍はちよいと肩をすくめ、兩手を擴げ乍ら心配さうに云ひ出した。「ニーナさん（ガーニヤの母親）が此間やつて來たらう。あの時しきりに溜息をついたり唸つたりしてゐられるぢやないか。何だか、聞いてみるとニーナさんは不名譽な事でもあるやうに思つてゐられるらしい。何が一體不名譽なんだらう。譯がわからない。誰がどういふ點でナスターシヤの惡口を云つたり、後指をさしたりするのかね。或はトーツキーさんと一緒にゐたのが惡いといふかも知れないが、そんな事なんか一顧に價しないたは言だ。ましてあゝいふ事情があるんだもの！　ちよつ！　ほんとに、ニーナさんにも困つて了ふ。一體どうしてその分らんのかなあ……。」

「まあ何卒あの人にさう腹を立てんで下さいまし。併し兎に角わたしはあの時よく云つておきました。他人の事にあまり干渉しないで下さいつて。ですが今迄は未だ愈々といふ所は云はないで家の人達を押へつけてゐるんですが、大嵐は今にも襲つて來さうなんです。ですから今日にもその愈々の所を云つて了ひますと、自然一切の片が附いて了ふでせう！。」

ミシュキン公爵は片隅に坐つて筆蹟の試驗を準備し乍ら、二人の會話をすつかり聞いて了つた。

やがて書き終へて卓子に近寄り、書いた紙を差出した。

「あゝ、これがナスターシヤ、フイリツポヴナですか。」と彼は一心に好奇心の眼を光らせ乍ら寫眞を眺めて呟いた。「素晴らしい美人ですねえ！」彼は熱心な調子で附け足した。

寫眞には實際驚くばかりの美しい女の姿が寫されてあつた。彼女は思ひ切つて單純な、而も優美な仕立ての黒い絹の服をつけてゐる。眼は暗く奥深く、額は物思はし氣で、顏の表情は熱情的で、そして何となく人を見下すやうであつた。ガーニヤと將軍は吃驚して公爵を眺めた。

「え？　ナスターシヤ、フイリツポヴナ！　あなたは一體ナスターシヤを御存じなんですか。」

「えゝ、ロシアへ來てたつた一晝夜にしかならないのに、もうこんな稀世の美人を知つてゐますよ。」と公爵は答へた。彼は今朝、ペテルブルグ、ヴルシヤヴ鐵道の一列車内で、ラゴージンとレーベヂェフの會話や、ラゴージンが彼に云つた言葉からナスターシヤの名を聞いてゐたのであつた。公爵はその旨を答へた。

「さうら又嫌な事が起つた！」と注意深く公爵に耳を傾けてゐた將軍が再び心配を始めて探りを入れるやうにガーニヤの方を見た。

「大方只の痴情騒ぎでせう。わたしもその男の事を聞いた事があります。」

「おゝ俺も聞いたよ。」と將軍が受けた。「あの耳環の騒ぎのあとでナスターシヤが俺に話したの

さ。併し今はもう問題が別のやうだぜ。今度は實際百萬ルーブリといふ奴が控へてゐるかもしれないからな。それに何だか執着が強さうだからね。よし例へ下等な執着であるにしても、兎に角執着の匂がしてるよ。全くかういふ先生が醉つ拂つたらなにを仕出來すか分らんからねえ！　ふむ！　又何か一騒ぎ起らねばいゝが！」と將軍はかう物案じ氣に結んだ。

「あなたは百萬ルーブリが可怕いのですか。」とガーニヤはにやりと笑つた。

「君は勿論さうぢやないだらうねえ。」

「えね公爵、あなたにはどう思はれました。」とガーニヤは不意に公爵の方へ向いた。「その男は何か眞面目な人間ですか。そのラゴージンといふ男は。それとも只の道樂者ですか。」

此問ひを發した時ガーニヤの心中にも何か或る特殊なものが湧上つたやうであつた。

「さあ何んといつたらいゝでせうか。」と公爵は答へて、「只僕はあの人には恐ろしい情慾が、寧ろ病的な情慾が潜んでゐるやうに思はれました。それにあの人自身からして病的な人間らしいですから、屹度二三日中に病氣を再發させますね。」

「さうですか、あなたにはさう思はれましたか。」と將軍は此評言に驚かされたやうにして叫んだ。

「えゝさう思はれましたよ。」

「そんな風の騒ぎは二三日のうちどころか、今晩にも起るかも知れませんよ。屹度何か變つた事が降つて湧くに相違ありません。」とガーニャは何故か將軍に薄笑ひをして見せた。

「鳥渡ガーニャ」とその時突然將軍はきつとなつてガーニャを顧みた。

「いゝ序だから云つておくがねえ。一體われ〳〵は何故かうして君とナスターシヤの結婚について騒いでゐるか知つてゐるかね。いゝかね、此事件に含まれた俺一個の利益はもう迅くに保證されてゐるんだよ。俺は方法はともあれ、どうしてゞも俺一個の都合のいゝやうに出來るんだよ。トーツキーさんもその事についてはもう固く決心してゐるんだからねえ。それだによつて今俺が何か新しく望んでゐるとしたら、それは只君の利益のみだ。まあ、少しは自分でも考へてみ給へ。それとも君は俺に信用出來ないとでも云ふのかね。俺は君が利口な人間だから、俺も君に望みをかけてゐるのだ。だのに君は隨分可笑しな人だねえ。ガヴリーラ。君は全るであのラゴージンとかいふ町人の小悴が出てきたのをいゝ逃口のやうに思つて喜んでゐるぢやないか。いゝや俺には判るよ。逃げ口が出來たと思つて嬉しいんだ。しかし君、ガーニャ、これ丈けの事は忘れて貰ひたくないね。この事は初めから分別を基本にしてやつて行かなければならぬといふ事はね。即ち相方から公明正大に了解し合つて、その何だね、互に迷惑をかけないやうに前以て心掛けてゐて貰はねばならぬ。ましてさうする時日も十分あつたのだからな。いや今でもまだ十分餘裕がある。

といつても今晩のナスターシヤの夜會までには五六時間程しかないが、君どうだね、分つたかね、分つた？ 嫌なのか嫌でないのか、實際のところ、若しあれと結婚するのが嫌なら嫌と云ひ給へ。全くお願ひいたしますよ。誰も君に强請してゐるんぢやないから、無理に君を畏にかけようとしてるんぢやないから、それに君はまるで自分が畏にかけられてゐるやうに思つてる！」

「決して嫌ぢやありません。」とガーニャは云つて眼を伏せ乍ら暗い沈默に落ちた。

將軍は大に滿足した。彼は鳥渡激昂したけれど、あまり自分が遠くまで横道にそれたのを後悔してゐる樣がもうあり〳〵と見えた。

「おゝ」ふと公爵の差し出した手蹟見本が目に入ると將軍は安心したやうにして大きく叫んだ。

「こりやまるでお手本だ。おまけに立派なお手本だ。ガーニャ鳥渡見給へ。立派な御腕前ぢやないか！」

厚い犢皮製の紙に公爵は中世紀ロシアの書體で左の一句を認めたのであつた。

「僧院長パフヌーチー自ら此處に名を署す。」

「つまりこれは」と公爵は異常な喜びと活氣とを以つて云つた。「これは僧院長プフヌーチー自筆の署名を十四世紀頃の模寫からかりて來たのです。趣味や苦心が十分現れてゐます。」

それから公爵はその字體についての驚くべき深い知識と研究とを述べ出した。公爵は將軍の氣

に入つた。その時もう時計は十二時半になつてゐた。將軍は

「ことによつたらもう時間が時間ですからもう今日はお目にかゝつてゐられないかもしれません。」さう云ひ乍ら、公爵に二十五ルーブリの金を呉れて

「無論差上げるなんて失禮を云ふのぢやありません。御都合の時に御返濟下さればよろしいのです。」

それから公爵の住居の爲めには丁度、ガーニヤの家で貸間をするといふので、賄附きでそこに公爵を置いて貰ふ事にガーニヤと相談を決めた。かうしてミシユキン公爵とエパンチーン將軍との交際は初まつたのである。將軍は別れに臨んで公爵に、

「わたしはあなたの親友として申すのですが、そのラゴージンといふ男の事はすつぱり忘れて了ひなさいと忠告します。」と云つた。そして將軍は出ていつた。公爵はその時又してもナスターシヤの寫眞の側に立つて、しみ〴〵とそれに見惚れてゐた。

「あなたはそんな女がお好きですか、公爵。」とそれを見てガーニヤは鋭く問うた。

「素晴らしい顔ですよ。」かう公爵は答へた。「此人の運命は人並外れたものだと僕は信じますね。顔はなんとなく樂し相ですが、實際は非常に苦勞したんでせう。ね、それは眼がちやんと表してをります。それに此顔は實際プライドに充ちてゐますね。併しい〻女なんですか。あ〻若しい

〻女だつたら救はれるんだがなあ。」

「ですが、あなたゞつたら此女と結婚しますか。」とガーニヤは相手の顔から燃え立つやうな目を離さずに云つた。

「僕は誰とも結婚するわけにゆかないのです。病身な生れですから。」と公爵は答へた。

「ではラゴージンは結婚するでせうか。」

「さうですね。僕結婚するだらうと思ひます。事によつたら明日にもやるかも知れません。結婚したら多分一週間經たぬうちに殺して了ふでせう。」

公爵がかう云ひ切るか切らぬ内に、ガーニヤは公爵が危く叫聲を立てようとした程烈しく身震ひした。

「君、まあどうしたのです。」と公爵は相手の片腕を支へつ〻かう云つた。

「もしお客樣、あなた奥樣の所へいらつしやるやうにと閣下の御言葉でございます。」

下部が戸口の所に立現れて公爵に云つた。公爵は下部のあとに附いて出ていつた。

エパンチーン將軍家の長女アレキサンドラは全く思ひ掛けなく（よくある事だが）何時の間にかもう二十五歳を越して了つてゐた。これと同時に、アファナーシー、イワノー非ツチ、トーツ

キーは妻を娶りたいといふ以前からの希望をまた〳〵新たに發表した。彼は前にも述べたやうに非常な金持で、種々な事業に携つてゐる一上流紳士で、當年五十五歳、すつきりとした伊達者で人並優れて洗煉された趣味を持つてゐる。彼は何時の頃からかエパンチーン將軍と一方ならぬ親密な間柄となつたが、其後樣々な事業に共同で携はるやうになつてから、其親しさは益々深くなつていつた。で、或時、トーツキーはエパンチーン將軍に向つて、將軍の令孃のうち誰かと自分との結婚を想像する事は、果してなし得べきや否やを訊ねて、その親友としての意見と指導を求めた。

三人の中で爭ふ餘地のない美人は前にも述べた如く末娘のアグラーヤであつた。併し恐らく利己的なトーツキー自身ですら、アグラーヤは自分の求め得る範圍外である。アグラーヤは自分の妻となるべき人ではないといふ事を心得てゐた。アグラーヤの運命は決して單な期待ではなく、十分實現の可能を帶びた地上の樂園の理想として思はれてゐた。で、兩親も、この娘に對する姉達の心も知つてゐるので、トーツキーから相談を受けた時も、二人の姉のうちのどちらかゞトーツキーの望を空しくせぬやうにするといふ事に就いては殆んど些しも疑を持たなかつた。まして、トーツキーは持參金の事でかれこれ云ふ氣遣ひはなかつた。トーツキーの申込は將軍一流の處世觀から云つても並々ならず有難い事であつた。併しトーツキー自身もあれやこれやの特別の事情

の爲めに、一歩々々用心に用心を重ねて話を進めてゐるので、將軍も明確な言葉を以つて娘達の意嚮を聞くといふわけには行かなかつた。で、或時將軍は勿論こんな事は一個の想像だがといふ顏附きで、二人の姉達にさういふ事を話してみた。それに對して娘達の方からも矢張り漠としたとは云へ少くとも親を安心させるやうな意嚮を述べた。それは姉のアレクサンドラが多分承知するだらうといふのである。彼女は仲々氣立ちの確りした娘ではあつたが、人が好くて利口で而も非常に素直であつたから、トーツキーの所へも喜んで行くかも知れぬ。それに一旦約束した事は何處までも履行してゆく人間であつた。あまりけば〳〵しい事は嫌ひで、又狼狽てゝ騷いだり急に心持を變へたりする心配はなく、寧ろ與へられたゞけの生活を靜かにし調和させてゆく丈の力があつた。容貌は大して魅力もないが併し非常に美しかつた。

とはいへ、こゝに一つ非常に邪魔になる事情が生じたのだ。これに附いては家庭の母たる將軍夫人も非常に不機嫌である。といふのは、トーツキーとナスターシャの關係であつた。トーツキー自身もこれには非常に弱つてゐた。で、彼は將軍の令孃を所望するについて、父たる將軍に如才なく親友としての意見を求めた時、卽座に高潔なる態度を以つて一切の事情を露骨に打明けて了つた。己れの自由を得る爲めには如何なる方法をも躊躇しない事、よしやナスターシャが今後彼の安寧を妨げないと自分から申し立てゝも、彼は決して安心せぬ、口先の誓などでは十分でな

い、何等の不足なき完全なる保證が必要である、といふ事なども打明けた。樣々に談合した末共同一致で事に從ふといふ事に定めた。で、二人はナスターシャの所へ出掛けた。トーツキーはいきなり萬事につけて己れ一身を責めた。そして今自分は結婚したいと思つてゐるのであるが、その運命は一つに彼女の手一つにかゝつてゐるといふやうな事を打明けた。同時にエパンチーン將軍も、トーツキーの運命と同じく自分の娘の運命が一つにナスターシャの手一つにかゝつてゐるだから自分もナスターシャには一目置いてゐるといふ旨を告白した。これを聞いたナスターシャは「ではわたしに一體どうしろといふのですか」と云ひ出したが、それに對してもトーツキーは同じく明つぴろげに次の事を白狀した。卽ちナスターシャが誰かに嫁入せぬうちはどうしても安心出來ない。さてその嫁入であるが、これには今尊敬すべき家族と共に暮してゐる青年ガーニヤが以前から全身の熱情を傾けてナスターシャを愛してゐて、彼女の愛を得るといふ單なる希望の爲めだけでも自分の命を半分を拋出しても惜しくはないとさへ云つてゐるし、トーツキーはまた、自分はナスターシャの將來の運命を安全にしたいといふ希望から彼女に七萬五千ルーブリの金を提供したいと述べ、尙附加へてこれは決してナスターシャの心を買ふ爲めでなく自分の良心の苛責を少しでも輕くしたいといふ願ひからであると云つた。

これに對してナスターシャの答へは此二人の「親友」を驚ろかした。といふのは、ナスターシ

ヤは以前の彼女の傲慢な態度とは全く違ふところの頗る物の分つた從順な口調で次の事を云つたからである。卽ち自分はもう以前から物の見方を改めた。だからトーツキーもいつまでもビクビクしてゐる必要はない。それに自分はエパンチーン將軍の三人の娘さん達の事も常から聞いて奥床しい人だと思つてゐる。それ故今は自分はその人達の爲めに何かの役に立つといふ事は、さう思ふだけでも自分の幸せであり、且つ誇りであると。その上に自分も何か新らしい目的を自覺したので、もし愛といふものに望みがないならば、せめて家庭の人として復活したいと考へゐるとも彼女は云つた。そして七萬五千ルーブリの金については何もトーツキー自身そんなに羞しがる必要はない、自分も今は金の價値を知つてゐるから無論有難く受納すると云ふ。唯、ガーニヤとの結婚に附いては彼女も殆ど返答の仕樣がなかつた。ガーニヤがナスターシャを愛してゐる事は事實らしくもある。それに彼の母、ニーナ、アレクサンドロヴナ、イヂルギナは立派な敬ふべき人である事、また妹のヴルヴーラが人並勝れた精力家だといふ事も聞いてゐるので、ナスターシャは衷心から近くなりたいとも思つてゐるのだが、唯向の方で喜んで迎へてくれるかどうかゞ疑問であつた。兎に角彼女は未だもつと〳〵考へねばならぬから、あまり返事を急き立てゝ呉れぬやうにと賴んだ。そして何はともあれガヴリーラにも又其家族にも、ナスターシャを何かに利用しようといふ隱れたる目算がないといふ事を見極める迄は、決して彼と結婚はせぬと答へ

た。

かくして愈々交渉が初まつた。二人の「親友」の魂膽が總てその上に懸つてゐるといふ肝心の點、卽ちナスターシヤの心をガーニヤの方へ靡かせ得るや否やといふ段については、どうかすると二人も稍その成功を信ずる事が出來るやうに思はれてきた。その間にナスターシヤはガーニヤと直談判をした。そして彼女は男の愛を認め且つ許したが、しかしどんな事のためにも自分の自由を制限されるのが嫌だと念を押して、結婚の間際まで否といふ權利を保持する事を約し、ガーニヤにも同じ權利を許した。

しかし、こゝに間もなく、ガーニヤの家族一同が此結婚に對して、又ナスターシヤに對して快からぬ感情を抱いてゐる爲めに、家の中で始終紛擾の起るといふ事などが、すつかり細大漏らさずナスターシヤに知れて了つたのである。その事がまたガーニヤの耳にも入つたのである。で、彼は今にもナスターシヤからその事を云ひ出されるかと毎日待受けてゐたが、彼女は自分の方からそれを口に出さうとはしなかつた。

ところがこゝにもう一つの風評が起つたのである。これはトーツキーをまた非常な恐怖にまで導くのであつた。といふのは、ナスターシヤはガーニヤの結婚が只金を得んが爲めの策略で、而もガーニヤは腹黑で慾つ張りで、絢爛持の淡しがりで、おまけに馬鹿に自尊心が強いといふ事など

知り拔いてゐるといふのである。ガーニヤはガーニヤでまた初めのうちは實際夢中になつてナスターシヤに惚れてゐたが、例の二人の「親友」がナスターシヤを正妻に賣りつける手段で以つてガーニヤを買收しようとかゝつた時、今度は彼がナスターシヤを惡魔のやうに憎み初めた。で彼の心中には戀と憎みが怪しく絡み合つてゐた。彼は煩悶の末遂に此の「穢しい女」と結婚する承諾は與へたが、心の中ではその代りあいつを「とつちめて」やるぞと誓つた。かういふ紛擾をナスターシヤは實は悉く承知してゐるので何かしら祕密な準備をしてゐるかの容子である。トーツキーの不安は益々高まつた。

しかし、更にこゝにより大きい驚きが、このナスターシヤの身邊に怪しい風雲を卷いて起つたのである！　エパンチーン將軍のやうな人から敬はれる年配になつて、立派な分別もあり世の中の甘いも酸いも嚙み分けてゐながら、自分からナスターシヤの色香に迷ひ、しかもそれが一時の出來心ではなく、眞の愛情に近いといふに至つては、殆ど信ずる事が出來ない位である。けれども人間といふものは餘り迷ひ込んで了ふと、殊にそれが年取つてからであると、すつかり眼がくらんで決して有り得ない所に希望を認めたがるものだ。將軍はナスターシヤの誕生祝ひに莫大な價の立派な眞珠を調へて、ナスターシヤが慾のない女だといふ事は百も承知してゐるくせに、その結果を豫想して樂みにしてゐるのである！　それがまた將軍夫人の耳に入つて、二三日前にも現

に將軍は夫人から當てつけがましい言葉を聞かされたので、その日も朝食に行く事は將軍自身氣が進まなかつたのである。そこへ好い都合にミシュキン公爵がひよつくり將軍家を訪ねてきたので將軍は

「まるで神様が寄越して下すつたやうなものだ！」

と心の中で考へた。

それからミシュキン公爵は奥の將軍夫人と三人の娘の居る所へ這入つていつた。それは將軍が前以つて夫人達に公爵を試驗してごらんと云つたからであつた。そこで公爵は夫人や娘達の問ひに答へ乍ら、瑞西に於ける彼の生活に附いて述べた。それは四人を感心させた。夫人は娘達に向つて云つた。

「此人の仰有る事は仲々立派だね。」

娘達はまた云つた。

「此人は白痴みたやうな振りをしてゐるけれど、ひよつとしたら大變な惡黨かも知れなくつてよ。」

公爵はやがて娘達から、自分等の顏についての感想を聞かせてほしいといふ難問を受取らねばならなかつた。しかし公爵にはそれは少しも難問ではなかつた。といふのは彼は生來自分の感じた事だけを正直に云ふ他何等の氣廻はしをする性質ではなかつたから。公爵は答へた。

「僕は喜んで答へませう。アヂエライーダさん、あなたの顏は幸福さうな顏です。お三人の中で一番思ひやりの深い顏です。それにあなたは大變御縹緻がよろしうございます。あなたはざつくばらんに愉快さうに他人に近寄つておいでになりますが、同時に相手の胸の奥までも見透ほして了ふといふ力を持つておいでです。あなたはお心も亦實にお美しい方に相違ありません。アレクサンドラさん、あなたのお顏も亦美しくて優しい顏でございます。あなたはお心も亦實に御美しい方に相違ございません。しかし餘り快活とは申されません。丁度あの聖母に似た一種の陰があなたのお顏に顯れてをります。これがあなたがたの顏の印象です。よく當つたでせう。ところで奥さん、おなたのお顏については、僕單に思はれるといふ許りでなく固くかう信じてゐます。あなたはお年こそ召してゐられますが、ありとあらゆる點に於いていゝ所も惡い所もひつくるめて全くの赤ん坊です。かう申したからつて腹などお立てはなさいませんね。あなたは子供に對する僕の見解はもう御存じなんですから。」

公爵は瑞西にゐた時の話をした時にかの愛すべき子供等に對する美しい考へを述べたのであつた。公爵はこれだけ云つて口を噤んで了つた。すぐに夫人が追及した。

「あなたは何故アグラーヤの事ばつかり何とも仰有らないのです。アグラーヤも待つてゐますしわたしも待つてゐるんですよ。」

「どうでせう一寸目に立つ方でせう。」

「えー目に立ちますとも。アグラーヤさんあなたは非常な美人です。あなたはかうして眺めてゐるのが恐ろしい程美しい方です。」

「只それだけですか、變つたところはありませんか。」と夫人は益々追及した。公爵は困つた。

「美を批評するのは六ケ敷しい事です。僕にはまだ準備がありません。美は謎ですからねえ。」

「それはつまりあなたがアグラーヤに謎をお懸けになつた事になりますわ。」とアヂエライーダが云つた。「アグラーヤ解いて御覽なさい。ですが美人でせう、ね公爵、美人でせう。」

「非常な美人です！」と公爵は吸ひ寄せられるやうにアグラーヤを見ながら熱心な口調で云つた。

「大方殆ナスターシヤ、フイリツポヴナと同じです。尤も顏の質は全然別ですが……。」

一同は此言葉に愕然として顏を見合せた。

「えゝ誰ですつて？」と夫人は狼狽てゝ云つた。「まあナスターシヤ、フイリツポヴナですつて、あなたは何處でナスターシヤを御覽になりました。一體どのナスターシヤですの？」

「さつきガヴリーラさんが將軍のお目に掛けるつて、寫眞を持つて見えたのです。」

「何ですつて、主人の所へ寫眞を持つてきたのですつて？　わたしはそれが見たい。ねえ公爵、あなた濟みませんが一寸書齋迄行つてガヴリーラから寫眞を借りてきて下さいな。」

公爵は立つて書齋へ這入つていつた。ガヴリーラは書類の整理に夢中になつてゐた。で、彼は公爵から、奥の人達が寫眞の事を嗅ぎつけた理由を説明された時、恐ろしく狼狽した。

「へーえ、何んだつてまたあなたはそんなつまらない事をお喋りするんです！」と彼は忌々し氣に叫んだ。「何にもあなたにはお分りにならない癖に……白痴」と、最後の一句を口の中で呟いた。

「御免なさい。全く僕何の氣なしに云つた事なんですから。話の拍子についうつかり出て了つたのです。實はアグラーヤさんがナスターシヤさんと同じ位美しいつて云つたんです。」

「何んでもかでもナスターシヤだ！」とガーニヤはぷり〳〵して云つたが、やがて突然彼は顏を優しくして公爵に云ひ掛けた。

「わたしは一つあなたに大變なお願ひがあるんです……。」

ガーニヤは公爵に小さく疊んだ紙片を渡して、是非アグラーヤに話さねばならぬ事があるから書いた手紙だといつて、それをアグラーヤに渡して呉れるやうに頼んだ。但しアグラーヤ一人丈にであつて他の何人にも見られないやうにして呉れと頼んだ。

「僕もこんな事はあまり氣持よくありませんから。」と公爵は答へたが、ガーニャは
「お察し下さい。僕もいよ〳〵せつぱつまればこそこんな事もお願ひするのです。これはわたしにとつて非常に重大な事なんです。非常に重大な……。」
「それぢや大抵渡して上げませうよ。」
「ですが誰にも見附らないやうにですよ。」とガーニャは念を押した。
「僕は誰にも見せやしません。」と公爵は云つた。
「此の書附には封がしてありませんが……」とすつかり狼狽てたガーニャはびく〳〵して言葉を切つた。
「おー僕は決して讀みませんよ。」
そして公爵はナスターシヤの寫眞も一緒も持つて書齋を出ていつた。ガーニャは一人切りになると兩手で頭を抱へた。
「あの女の一言で、おれは全く事によつたら破談にして了ふかも知れない！」
彼は興奮と期待の心から室を徘徊し初めた。
公爵は物思ひに沈みつゝ歩を運んだ。依頼の仕方も不愉快なら、ガーニャがアグラーヤに手紙を送るといふ事も不愉快であつた。けれどもやがて彼はまた立止まつて窓の明りに近寄り、手に

してゐたナスターシヤの寫眞を見詰め初めた。
彼は先刻自分が心を打たれた、此顔の中に隱れてゐる或る謎のやうなものを解き度いやうな氣がした。美しいが爲めのみでなく、未だ何かしら或他の物の爲めに、世の常ならぬものに見える此顔は、今一層の力を以つて彼に迫つた。それは量り知り難いプライドと輕蔑、憎惡に近い感情が此顔の中にあつた。がまた公爵は、同時に何んとなく他人の心を信じ易いやうな驚くばかりの醇撲な或物があるやうにも感じたのである。この二つ對照してゐる姿は、見る人の胸になんとなく憐憫の情をそゝるやうに思はれた。そしてこの眩しいばかりの美しさが、見るに堪へないやうな氣持をさへ與へる。公爵はやゝ一分間ばかり眺めてゐたが、やがて祕かに周圍を見廻はし、急し氣に寫眞を唇の所へ持つていつて接吻した。一分の後客間へ這入つていつた彼の顔は、すつかり落付いてゐた。客間の入口で彼は出て來ようとするアグラーヤと出會つた。
「ガヴリーラさんがこれをあなたに渡して呉れといふ事でした。」と公爵は云ひつゝ手紙を渡した。アグラーヤは烏渡驚いた風をしたが、それは公爵がこんな手紙を持つてきた事に附いてゞあつて、暫くすると彼女は輕蔑したやうにニヤリと笑つた。
將軍夫人は公爵のもつてきた、ナスターシヤの寫眞を見てゐたが、やがて口を切つた。
「さう、美人だね。美人過る位だ。で、公爵あなたはかういふ風な美人がお好きなんですか。」

「えゝ、さういふ風の……」と公爵は幾分苦し相に答へた。
「ではつまり、必ずこんな風のをですか。」
「え！　必ずこんな風の……。」
「どういふ譯で？」
「此顏の中には……此顏には、實に多くの苦悶があります……。」と、公爵は我にもあらずかうきつぱりと答へた。
「まあ、何といふ力でしよう。」と、此時姉の肩越しに見てゐたアヂェライーダは寫眞を見ながらいきなり叫んだ。
「何處に？　どんな力が？」と將軍夫人は鋭く訊き返へした。
「かういふ美は力ですわ。」とアヂェライーダは熱心に云ひ加へた。「こんな美があつたら、全世界をひつくり返へす事が出來るわ。」
「ねえ公爵。」と將軍夫人が突然公爵に話し掛けた。「今うちでは結婚談が始まりかゝつてゐるんですが。わたしその結婚が氣に入らないんです。」
「お母さん、何だつてあなたそんな事を。」と、アレクサンドラは、この突然の母の言葉に吃驚して叫んだ。

「何だえお前。一體お前までが、この結婚が氣に入つたといふのですか……」將軍夫人は何故か不思議に氣負立つてきた。と、そこへガーニヤが這入つてきた。
「あゝまた一人結婚同盟の方がお見えになつた。御機嫌よう！」と夫人はガーニヤに坐れとも云はずにかう云ひ掛けた。「あなたは今結婚しようとしていらつしやるんでせう。」
「結婚を？　何故？　どんな結婚？」とガーニヤは仰天して叫んだ。
「ぢあ奥さんをお貰ひになるんでせう。かういふ方がお好みですか。」
「いゝえ、いゝえ。」とガヴリーラは嘘をついて了つた。そして顏を眞赤にした。
「いゝえですつて。あなたはいゝえといひましたね。結構わたし覺えてゐませうよ。今日水曜日の朝、あなたは『いゝえ』と云ひましたね。」
そして將軍夫人は出ていつた。ガーニヤは暫く茫然としてゐたが、やがて毒々しい顏附をして卓子から寫眞をとり公爵に云つた。
「公爵、わたしは直ぐに歸宅しますが、もし私共と一緒に住はうといふ意志をお變へにならなかつたら、わたしがお伴をしませう。さうしないとあなたは所も御存じないんですから。」
「公爵、鳥渡お待ち下さいな。」アグラーヤはいきなり椅子から立上り乍ら云つた。「あなたは大變能筆家でいらつしやるさうですが、まだわたしのアルバムに何も書いて下さらないのですね。さ

あどうぞすぐ御一筆下さい。」アグラーヤはペンとアルバムを取りに行つた。

「あれはあなたが皆喋舌つたんですな、わたしが結婚するなんて！」とガーニヤは歯ぎしり乍ら公爵に喰つて掛つた。

「いゝえ、それはあなたの思ひ違ひです。僕はあなたが結婚するといふ事さへ知らなかつたのです。」

「嘘おつきなさい。あなたは先刻將軍とわたしが今晩ナスターシヤの所で一切が解決されるといふ話をしてたのを聞いてゐたのです。」

併し此時、アグラーヤはペンとアルバムを持つてきた。

「さ公爵書いて下さい。」

公爵はペンを直したり頁を選つたりし初めた。ガーニヤはその際にアグラーヤの所へ近寄つていつた。

「一言、たつた一言、聞かせて下さればそれでわたしは救はれます！」

公爵は急に振顧つた。と、そこにガーニヤの恐ろしく絶望した顔があつた。アグラーヤの落着き拂つた顔色はガーニヤに激しい侮辱を感じさせたのであつた。

「一體どう書けばいゝのでせう。」と公爵はアグラーヤに訊ねた。

「わたしが今申します。よどざんすか。書いて下さい、『掛引の相談には乘りませぬ。』そして月日を書いて下さいな。」

公爵はアルバムを返した。

「まあお立派な筆蹟ですこと。わたしあなたに記念として何か差上げたいんですから。」

公爵がアグラーヤについて他の室に這入つた時、アグラーヤは立止まつて

「これを讀んで下さい。」と云ひ乍ら、ガーニヤの手紙を差出した。それには次のやうな事が書いてあつた。

「今晩はわたしの運命が決せられる日でございます。どういふわけかあなたには御存じの筈です。わたしは今晩生涯取返しのつかぬ決答を與へねばなりません。どうぞわたしに總てを破れと仰有つて下さい。さうすればわたしは今日にも一切を破つて了ひます。これ丈けの事があなたにとつて何程の勞でございませう。たゞそれだけの事です。どうぞこの滅亡の淵より己れを救はんとして無謀なる努力を敢てした此難船者の大膽をお怒りなきやうお願ひ申し上げます。云々。」

「此男が」と公爵が讀み終つた時、アグラーヤは口を切つた、「若し自分の獨り考へで、わたしの言葉なぞ當てにせずに、いえ、そんな事はわたしの耳に入れずに總てを破棄して了つたら、その時はわたしもあの人に對するわたしの感情を改めたかも知れません。あの人はそれを知つてゐる

のです。えゝ確かに知つてゐますとも、所があの人の腹が穢いぢやありませんか。知つてゐ乍ら思ひ切れないのです。だから何か擔保が欲しいのです。あの人は信用で實行する事が出來ないのです。十萬ルーブリの代りにわたしから希望を取つておきたいのです。馬鹿らしい掛引ぢやありませんか。此手紙を持つていつてあの人に返して下さいな。此家を出たらすぐ。」

「返事は何といひませう。」

「何もいりません。これが一番いゝ返事ですわ。」

ガーニヤとミシュキン公爵とが連れ立つて戸外に出ると、ガーニヤは公爵に飛び掛らんばかりにして問ひかけた。

「返事は？　返事は？」

公爵は默つて手紙を返へした。

「えつ！　こりや私の手紙！」とガーニヤは叫んだ。「此奴渡す事もして呉れなかつたのか。おゝ此事に氣が附かなかつたのはわたしの手ぬかりだつた。ちえ。こん畜生！　ね、公爵、ど、どうしてあなたは渡して呉れなかつたのです。こん畜生！」

「反對、反對ですよ、ガーニヤさん。これはアグラーヤさんが戻して寄越したのですよ。」

「何時です。何時です。」

「僕がアルバムを書いて了つた時です。そら他の室へアグラーヤさんがわたしを呼んだでせう。あの時です、あの人はわたしに先づこれを讀んでみろと云ひました。それからあなたの手に歸して呉れと命令しました。」

「よ、よんで見ろ？」とガーニヤは吃驚して叫び出した。「よんで見ろつて！　で君、讀みましたか。」

「えゝ讀みました、たつた今。」

「あの人が自分であなたに讀ましたんですかい。」

「えゝ自分で。僕はあの人の許がなければ決して讀みやしなかつたです。」

ガーニヤは暫く苦しい沈默に落ちてゐたがやがて不意に怒鳴り出した。

「そんな事があつて堪るもんですか。嘘です。あなたが勝手に讀んだのです。」

「僕は本當の事を云つてるんです。僕を信じて下さい。」と公爵は別段此理不盡に怒るやうなところもなく平氣に答へた。「僕は君の事を思うてお氣の毒で堪りません。」

「ちよつ。情けない人だ。しかしその時一寸位何か云つたでせう。」

「そりや無論。」

「聞かして下さい。それを、聞かして。」

「アグラーヤさんはかう云ひました。若し此人がこんな掛引みたいな事を云はずに、自分の一存で事をやつたのなら、若し前以つて私から擔保を取らうなどしないで、自分一人で一切を破棄したのなら、その時は自分もあなたの親友になつたかも知れないつて、それから、返事はいらないから、この手紙を返してくれ、それが一番いゝ返事だと云ひました。」

「あゝ成程さうですか。」と、ガーニヤは今や量り知る事の出來ない毒念の擒(トリコ)になつて叫んだ。「そんなら畜生、わたしの手紙など窓から捨てゝ了へばいゝのに！　ふん、掛引の相談にはのりませぬか！　まあ見てゐませう。わたしにはまだ澤山、方法はいくらだつてあるんだから……。」

ガーニヤの顏は歪み蒼ざめ、口からは泡を吹いた。そして拳を固め威嚇するやうな身振りをするのであつた。彼は暫くさうして歩いてゐたが、やがて

「一體どうした譯で」と出し抜けに公爵に向つて云ひ出した。「あなたのやうな白痴が始めて近附きになつてから僅か二時間位でそんなに信用されるやうになつたんです。いつたい！」

今迄の苦しみには未だ嫉妬が不足してゐた。それが今や急に彼の心臓をつき刺したのである。その時道は四角へ來てゐた。公爵は突然こゝでお別れをしようかと云ひ出した。

「僕はこゝに二十五ルーブリ持つてゐますから何處か旅館へゆけるでせう。あなたとはこゝでお別れした方が好かありませんでせうか。」

「御免下さい。公爵。」とガーニヤは突然可笑しい位慇懃になつて叫ぶのであつた。「後生ですから御許しなすつて下さい。わたしがどんな不幸に陷つてゐるかあなたは御存じでせう。どうかお許し下さい。」

「おー、僕そんな仰山な詫言などして頂かなくもいゝのです。ぢや、あなたのお家へ參りませう、僕喜んで……。」

（こん畜生、洗ひざらひおれの祕密を探り出しておいて、いきなり逃げようとしやがつた。これには何か譯がある。よし今に見ろ。何も彼も決着して了ふから。何もかも今日中にだ！）とガーニヤは心で叫んだ。

そして二人はガーニヤの家へ來た。公爵はこゝを自分の下宿にするのである。

（四）嵐

ガヴリーラの家は極めて清らかな明るい廣い階段を上つていつた三階にある。眞中に一筋の廊下が通つてゐて、その兩側に三つづゝ部屋が並んでゐる。その一方の側の一番端にはフェルディシチエンコといふ男が間借りをしてゐるし、他の一方の端の狹い部屋には、家庭の父たる退職將軍イヴルギンが居て幅の廣い長椅子の上で寢起してゐる。ミシュキン公爵はその眞中の間を借りて

賄付で世話をして貰ふ事にした。ガヴリーラは出世前の希望とプライドに充ちた青年の常として、このやうに家で下宿をする事を好まぬし、それに父將軍のだらしのない生活に嫌悪をも感じてゐるので、彼は家にあつては常に不愉快であつた。彼の家では父將軍も、母ニーナ夫人も、妹ヴーリヤも、ガーニヤとナスターシヤとの結婚の噂を聞いて、不快と怒りを感じてゐるのであつた。

ミシユキン公爵がこの家の自分に割當てられた部屋に入ると、すぐ一人の老人が這入つてきた。それはイデルギン退職將軍であつた。彼が這入つてくると同時に、強いヴォツカ酒の匂が部屋に廣がる。彼は常に酒氣をきらした事がない。

「あの男だ！」「あの男だ！」と低いながらに重味のある聲が公爵に云ひかけた。「まるで生寫しだ。實は先刻から聞いてゐると、家の者がしきりに此わしにとつて懷しい名を繰返へし〳〵話してゐるぢやありませんか。それでふと永劫去つて歸らぬ昔を思ひ出しました。あなたはミシユキン公爵ですな！」

「え〻さうです。」と公爵は呆氣にとられたやうな顏をして此新來の人を眺めた。

「あ〻やつぱりさうだ。わしはあんたのお父さんを永遠の世界へ祝福してあげましたよ。」

將軍は恰も悲しい追憶に誘はれるかのやうな顏をして言葉を切つた。それからその追憶の絲を手繰るやうな顏付で又喋舌り出した。

「あんたのお母さんが未だ許嫁○時分、わしは烈しくお母に思ひ込んだんですよ。それに氣がついて公爵は烈火のやうに怒られたです。ところがある朝早く、六時頃にやつてきてわしを起こされるぢやありませんか。わしは吃驚して着替をしたが、兩方共に沈默です。わしは皆覺つて了うた。すると公爵はポケツトからピストルを二挺取出して、手巾の下から射ち合はう、證人はなしだ、とかう云ひました。それから彈丸を込め手巾を擴げてピストルを互の胸に押當て乍ら、互に顏を眺め合うたです。不意に二人共眼からは霰のやうな涙が迸り、手はぶる〳〵震へるぢやありませんか。二人共です。二人共一時にですよ。で、直ぐに自然の人情として二人は抱き合つて、兩方から寛大な戰を始めたのです。公爵は『君の者だ』と叫ぶ。わしも『君の者だ』と叫ぶ。一言にして盡せば……一言にして盡せば……あんた家へ寄宿なさる……寄宿？」

「え！　多分暫くの間。」と公爵は何となく吃り氣味で答へた。

「わしは御覽の通り、ある悲劇的な災難があつて以來隨分苦勞しました。それも無理非道にです。樣々な事情によつてわしも下宿を初めましたが、實に情ない零落ぢやありませんか。わしはこれでも總督に位なれる筈なんでしたよ。……併しあんたが見えたのは我々一同の喜びですよ。ところで此家に一つ悲劇がありましてね！」

公爵は一方ならぬ好奇心を持つて對手の言葉を待つた。

一實は今、結婚談が始まつてるが、それが頗る珍なんでね。まやかし者の女と、事によつたら侍從にもなれようといふ若い男との結婚ですよ。わしの妻や娘のゐるうちへあんな女を引摺り込まうとする。なんの、わしが息をしてゐる間、あんな女に誰が這入らせるものか！　わしは玄關の闘に臥てやるから、這入り度けりやわしを跨いでゆくがいゝ。」

この人が出ていつてから、ニイナ夫人（ガーニヤの母）が這入つてきて、それについて公爵は客室へ這入つていつたが、丁度そこへ妹のアルヴーラが來て、無言のまゝ母の手にナスターシヤの寫眞を渡した。ニイナ夫人はブル〳〵と身を震はせた。

「今日此人が自分から贈物として兄さんへ寄越したのですつて！」とアーリヤが言つた。

「そして此夜一切の事が決まつて了ふさうです。」

「今夜？」と夫人は絶望したやうな聲で「どうも仕方がない！　希望といふものもすつかり無くなりました。ナスターシヤは此寫眞で自分の意嚮を知らせたんです。……あれが自分でお前に見せたのかえ。」

「プチーツインさんがすつかりわたしに知らせて呉れたのです。寫眞は兄さんの卓子の傍の床に轉つてゐましたの。それを拾つてきたんです。」

この時ガーニヤとプチーツインが這入つてきた。プチーツインはガーニヤとは並々ならぬ親友

で、商賣こそ金貸業をやつてはゐるが、質素で洒落れた服裝をした人好きのする男である。

「今日だね、ガーニヤ？」に不意にニーナ夫人がガーニヤに云つた。

「何です……今日つて？」とガーニヤは吃驚して叫んだが、すぐ公爵の方を向いて「あゝ分つた。又あなたは此處へ來てまで……まあほんとに何んて情けない病氣なんだらう。默つて堪へてゐる事が出來ないんですか。」

「これは誰でもない。僕が惡いんだよ。」とプチーツインが遮つた。彼はアルヴーラに對しては平生から戀心を抱いてゐるので、アーリヤにはいらぬ事まで喋舌つて了ふのであつた。ニーナ夫人は心配相にガーニヤを顧みた。

「ガーニヤ心配しないでお呉れ。わたしは自分の爲めには何も恐れはしないんだよ。それはお前にも分るだらう。だが、今日すつかり片がつくさうだが、一體なんの片がつくの。」

「今晩、あの女が自分の家の夜會で承知不承知の決答をするつて約束したんです。」とガーニヤが答へた。

「わたしはかれこれ三週間といふもの此話を避けてはゐましたが、併し今はもう何もかも決着したのだから、只つた一つ訊かして貰ひ度ひと思ひます。どうしてあの女はお前に承諾した上、おまけに寫眞まで贈る事が出來たのかしら。だつてお前あの女を愛してはゐないんでせう。それと

もお前、あんな……あんな……。」

「ふ！　男を知つた女をとでも仰有るんですか。」

「わたしはそんな風に云はうと思つたのぢやありません。だけど本當にそれ程迄夢中になつて了へるものかねえ。」

恐ろしい苛立がこの問の中に響いてゐた。ガーニャは暫く考へて立つてゐたが、やがて冷笑の色を隱さうともせずに云ひ出した。

「お母さん！　またあなたは引つ込まれて我慢し切れなくなりましたね。我々の話はいつもこんな風に始つて次第に熱してゆくんです。あなたはわたしがナスターシャさんを欺ましてゐるやうにでもお考へなんですか。いやわたしは大いに嬉しく思つてるんですよ。ヴーリヤの事に至つては、どうともあれの勝手です。それで澤山だ。いやもうこれで澤山だ。」

「わたしはもう自分でさう云つたぢやなくつて？　若しあの女が此家へ這入るなら、わたしは何處へでも出てゆきます。わたしだつて云つた丈けの事は實行するわ。ふん！」とヴルヴーラは憤慨して云つた。

「强情！　お前が結婚をしないのも强情だからだ！　おい何が『ふん』だ。大方俺には唾でも引つ掛けたいのだらう。ね、ヴルヴーラさん。結構いま直ぐにも其御計畫を實行なすつたらいゝで

せう。あなたには本當に飽き〳〵する位でさあ。何です！　公爵、到頭あなたはわたし達を打棄てゝ行かうと仰有るんですか。」公爵が座を立つたのを見て、ガーニャはかう叫んだ。

憤激が或程度まで達すると、人は殆どその憤激が面白くなつて、儘よどうともなれ、といふ自暴氣味から、次第に募り行く快感を覺え乍ら、何等の抑制もなく忿懣の情に沒頭して行くものである。ガーニャの聲にはさういふ調子があつた。公爵はそれに答へようとして戸口の所で振返つたが、暴慢な相手の表情によつて、今や嵐が立起らうとしてゐる有樣を知つたので、そのまゝ彼は室を出ていつた。幾分かの後、彼はその客室から洩れる聲によつて、自分がゐなくなると同時に、會話は一層騷々しく、一層露骨になつた事を知つた。

公爵は廊下を横切つて自分の部屋へ歸るつもりで客間から玄關へ出た。出入口の階段へ導くドーアの側を通り拔けようとして、彼は誰か扉の外で一生懸命にベルを鳴さうとしてゐるのに氣が附いた。大方ベルの何處かゞ毀れてゐたのであらう。只ちよつと慄へるばかりで少しも音がしなかつた。公爵は閂を外して扉を開いた。と――愕然としてたぢ〳〵となつた。そして全身をわなわなと慄はせるのであつた。彼の眼の前にナスターシャ、フイリツポヴナが立つてゐる。彼は寫眞によつて直ぐに見分けがついた。彼女が公爵に氣附いた時、その兩眼は一時に爆發する忌々しさに燃え立つ樣であつた。彼女は肩で公爵を突き飛ばし乍ら、つか〳〵と控室へ通つた。そして

毛皮外套をかなぐり棄てつゝ腹立たし氣に怒鳴つた。

「若しベルを直すのが億劫だつたら、切めて人が扉を叩く時には控室にでも坐つてゐればいゝ。おや今度は外套を落つことしたよ。間抜け！」

外套は實際床の上にあつた。ナスターシャは公爵が脱がせるのを待切れずに自分で脱いだ。そして碌々見もせずに後向きに彼の手へ抛つたのを公爵は受ける隙がなかつたのである。

「お前みたいな奴はおん出して了はなくつちや、さあお取次ぎ。」

公爵は何か云ひたいのであるが、すつかり魔誤ついて了つた。で外套を床から拾ひ上げると、それを手にして客間へ赴いた。

「まあ今度は外套を持つて歩き出したよ！　外套を何故持つて歩くんだえ。は、は、は！　ほんとにお前は氣狂ちやないかえ。」

公爵は引返へした。そして恰も彫像の如くに彼女を見詰めた。ナスターシャが大きな聲で笑ひ出した時に、彼も共に微笑したが、舌を動かすことはどうしても出來なかつた。

「ほんとになんて馬鹿だらう！」とナスターシャは忌々し氣に足踏みし乍ら怒鳴つた。「あら、お前何處へ行くんだえ。一體誰がきたつて取次ぐ積りなんだらう。」

「ナスターシヤ、フイリツポヴナ。」と公爵は呟くやうにやつと答へた。

「お前どうしてあたしを知つてるの？」と彼女は早口に尋ねた。「わたしお前を見た事なんかありやしない。いゝや、お出で、お取次ぎ。おや、あれはどうしたつて驕ぎなの？」

「喧嘩してるんです。」と答へて公爵は客間へ赴いた。

公爵が這入つたのは隨分きはどい瞬間であつた。ニーナ夫人はどうしてもヴーリヤの肩を持たずには居られなかつた。ヴーリヤも聽してはゐなかつた。またそんな娘ではない。兄に對する惡口罵言は聞くに堪へない程無作法になつていつた。そこへ公爵が這入つてきたのであつた。

「ナスターシヤ、フイリツポヴナがお見えになりました。」

一座は急にひつそりとした。人々は公爵の言を解さない如く、寧ろ解する事を欲しないかの如くに、彼の方を見やつた。ガーニヤは驚きのあまり身體が麻痺したやうに思はれた。

ナスターシヤの來訪は殊に此場合一同にとつて、實に厄介な、そして思ひも掛けぬ出來事であつた。少くともナスターシヤが初めてやつてきたといふ事一つだけでも、さう思ふ丈けの根據があつた。是迄といふものは彼女はいやに高く止まつて、ガーニヤと話する時にも、彼の肉親の人と近附きになりたいなどゝいふ希望も仄めかした事はなかつた。彼女の訪問は今の場合――寫眞を男に贈つた後、又自分の誕生日、即ち彼の運命を決するといふ約束をした日に當つて、彼女の訪問は殆ど決定それ自身を語つてゐるのではなからうか。ガーニヤがこの思ひも掛けなかつた彼

女の訪問に驚いたのは無理もない。

公爵を見詰める人々の疑惑は、さう長く續く必要はなかつた。といふのはその時、ナスターシャ自身もう客間の戸口に姿を現はしてゐたのだから。そして部屋の中へ這入り乍ら又しても公爵を輕く突き飛ばした。

「まあ、やつとの事で這入れた……あなた何だつてベルを結付けてお置きなさるの。」とつさに駈け寄つたガーニャに手を差し出し乍らナスターシャは愉快さうにかう云つた。「何だつてまたあなたそんな面喰つた顏をしてらつしやるの。紹介して頂戴な、どうぞ。」

ガーニャは全く動顚し切つて最初にヴーリヤを紹介した。すると二人の女は最初に互に手を差し出す前に、先づ奇妙な視線を交換した。ナスターンヤは、とは云へ、につこり微笑つて愉快さうな樣子をしてみせた。併しヴルヴーラは假面を被らうとさへしないで、陰鬱な眼附きでぢつと相手を眺めるのであつた。

ガーニャは膽を冷やした。彼は威嚇するやうな眼附でヴーリヤを睨めた。で、彼女は兄の心をくむ心から、一歩讓らうと決心したらしく、ナスターシャに向つて微笑んだ。まだなんといつても家庭内では彼等は互に愛を失つてはゐなかつたから。しかし此場合幾分場を取繕つたのはニイナ夫人であつた。ガーニャは妹のあとから母を引合はせ、母からさきにナスターシャの方へ進ませたのである。けれどもニイナ夫人がやつと、自分の「非常」なる「歡び」に就いて話し出すか出さないうちに、ナスターシャは終ひまで聞かうとはしないで、くるりとガーニャの方へ向いた。

「あなたの書齋は何處？　そして……そして下宿は？　だつてあなた下宿人を置いてらつしやるんでせう。」

ガーニャは恐ろしく赤くなつて、何やら吃り〳〵答へようとした。併しナスターシャはすぐにかう附け加へた。

「一體何處に下宿人をお置きになるの？　あなたの所には書齋もないぢやありませんか。ですが儲かりますか。」不意に彼女はニイナ夫人に向つてかう云つた。

「隨分面倒でございます。」と夫人はおづ〳〵として答へ初めた。「それは申す迄もなく利益もありませんでは……ですけれどわたくし共はほんの……。」

併しナスターシャはまた聞いてはゐなかつた。

「まああなたの顏は何んてえんでせう。おゝ本當に！」

此笑ひが幾瞬間か續いた。と、ガーニャの顏は眞に恐ろしく歪んだ。彼は物凄い程靑ざめてきた。そして唇は激しく痙攣的にひん曲つた。此時こゝに一人の傍觀者があつた。彼は最初ナスタ

ーシャを見た瞬間から麻痺したやうになつて戸口に立つてゐたが、彼は急にガーニャの物凄い顔形に氣が附いた。と、彼は仰天したやうになつて、いきなり前へ進み出した。

「水をお飲みなさい。」と彼はガーニャに囁いた。「そしてそんな顔附をしてはいけません。」

この傍觀者は卽ち、ミシュキン公爵であつた。公爵はこれだけの事を何等の考慮も、何等の目算もなしに、唯ほんの衝動的に云つたものらしかつた。けれども此言葉の齎した働きは異常なものであつた。ガーニャの怒りは一時に悉く公爵に向けて奔注したやうに思はれた。彼はいきなり對手の肩を摑んで無言の儘さも憎らし氣に、ぢつと睨めつけた。一同は固唾を呑んで控へてゐた。ニイナ夫人は危く叫聲を上げようとした程であつた。プチーツインは氣遣はし氣に一歩前に踏み出した。丁度戸口にその時現れた、ガーニャの弟のコーリヤと、同宿人フェルディシチェンコは吃驚して立止まつた。只ヴーリヤのみは依然として額越しに注意深く出來事を觀察してゐた。

けれどもガーニャは直ぐに——此動作を始めると同時に氣が附いて、神經的な高笑ひを發した。彼はすつかり我に返つたのである。

「何を仰有るんです、公爵、お醫者樣でゞもあるんですか。」彼は出來る丈け快活に且つ磊落に云つた。「吃驚したぢやありませんか。ナスターシャさん、御紹介します。この方は實に珍らしい方なんです。僕もまだ今朝始めてお近附きになつたんですが。」

ナスターシャは不審さうに公爵を眺めた。

「公爵ですつて？　此の人が公爵ですの？　まあどうでせう。わたし先刻控室で此方を下男だと思つて此處へ取次ぎに寄越したんですよ。はゝゝゝ。」

「大丈夫です、大丈夫です。」つか〳〵と傍へ寄つてきたフェルディシチェンコは、ナスターシャが笑ひ出したのが嬉しくなつて口を入れた。「大丈夫です。そんな事はありません。」

「ほんとにあんた叱りつけない許りでしたね、公爵、御免下さい。だが何公爵？……ミシュキン？」

「わたし共へ下宿してゐなさる方です。」とガーニャは繰り返へした。明らかに人々は公爵をば何か珍しい、しかも此ばつの悪い場面から一同を救ひ出して呉れるやうな者として取扱つた。そしてナスターシャの方へ押付けぬばかりであつた。公爵は後方で誰やらが——多分フェルディシチェンコであらう——小聲で「白痴」とナスターシャに說明してゐるのをはつきりと聞いた。

「でもどうして先刻わたしだといふ事がわかつたの？」とナスターシャは公爵に向つて尋ねた。

「寫眞とそれから……。」

「それから外に何に？」

「それから外に理由といふのは、僕、エパンチーン家の人達やラゴージンからお噂を聞いてゐた

ので、必ずそんな風の人だと想像してゐましたから……それに僕はあなたを何處かで見たやうな氣がします。」

「何處で？　何處で？」

「僕はなんだかあなたの眼を何處かで見たやうな氣がするんです。勿論そんな事があらう筈がありません。僕は第一、一度も此處へ來た事がなかつたんですもの、若しかしたら夢にでも。」

ナスターシヤは好奇心に驅られて對手を眺めてゐたが、もう笑はうとはしなかつた。丁度此の瞬間別な新しい太い聲が公爵とナスターシヤを取卷く人々の陰から聞えた。その聲が人々をさつと右と左に引分けたやうであつた。ナスターシヤの前には家庭の父たるイヂルギン將軍が立つてゐた。彼は燕尾服をつけ鼻下の髭は美しく染めてゐた。これはもうガーニヤに取つては我慢出來ない事であつた。自尊心と虚榮心が、殆猜疑と神經過敏に近い程な彼は、此二箇月といふもの自分を幾分たりとも高尚で上品に見せかけるやうな足場をばかり探してゐた。彼は何よりも父とナスターシヤとの會見を恐れてゐた。だらしのない父と高慢なナスターシヤとの會見は、唯想像するだけでもガーニヤの心膽を冷からしめるのである。それによつて彼はナスターシヤの激しい冷辱を受ける事と確信してゐたから。ところがもう將軍は此處へ皆の目の前へ出てきたではないか。而もナスターシヤがガーニヤと其家族の者に嘲笑を浴びせる機會を探してゐる、その瞬間に現れ

たのだ。おまけに物々しく燕尾服などを用意して。彼はナスターシヤの來訪が此目的の他に何物をも意味しないと信じ切つてゐた。ところへ將軍は早速「不幸なる老兵で、又かやうな美しい方を仲間の一人に加へ得るといふ希望によつて、無限の幸福を感じつゝある家庭の親でございます。」とやり初めたものである。そして彼はそれを云ひ終らないうちに、丁度晝食で足の定らない將軍はべたりと椅子の上へ尻餅をついたのである。

「承りますれば家の子息が……」と彼は續けた。

「えゝ、お宅の子息！　それにあなたも、お父さまも大變いゝ方でございますわ！　何故あなたわたくしの所へ少しも被來らないのです。何ですか、あなた御自分でお隱れなさるんですか、それとも御子息があなたを隱くすんですか。あなたならもう誰にも迷惑を掛けずに御自分で被來られさうなものぢやございませんか。」とナスターシヤが應じた。

「十九世紀の子供とその親達！」と將軍は又しても何やら云ひ出しさうにした。

「ナスターシヤさん、一寸の間どうぞアルダーリオンに御免を蒙らして下さいませんか、何かあちらで用事があるさうですから……」と大きな聲をしてニイナ夫人が云つた。

「お母さん、あちらへ被來らなくて？」とこれも聲高にヴーリヤが問掛けた。

「いゝえヴーリヤ、わたしはしまひまで居ります。」

この時將軍は、例の最も得意な氣持になつて傍で聞いてゐるものが無遠慮に笑ふのもかまはず滔々として辯じ初めたのである。

コーリヤは公爵の裾を引いた。「ねえ、せめてあなたでもどうかしてお父さんを連れてつて下さいな。あれを打つ棄いておいてはいけません！」この哀れな少年は眼に不平の涙を輝かしてゐた。しかし將軍の饒舌は益々續いた。丁度この瞬間並外れに高いベルの音が玄關から響き渡つた。まるでベルが毀れて了ひさうな綱の引きやうであつた。並々ならぬ來訪といふ事はすぐに感じられた。コーリヤは扉を開けに駈け出した。

玄關が俄かに騷々しく雜沓し始めた。客間から聞いてゐると幾人からの人が外から這入つてきて尙入り切つて了はぬといふ風であつた。幾人かの聲が一時に物を云つたり怒鳴つたりしてゐる。階段の上でも何か叫んだり怒鳴つたりしてゐる。兎に角此來訪は非常に奇怪なものに相違なかつた。人々は顏を見合せた。ガーニヤは廣間の方へ飛び出したが、もうそこには幾人かの人が這入つて來た。

「あゝこのユダ奴！」と、或聲が怒鳴つた。公爵は耳を聳てた。それは彼にとつて確か聞き覺えのあるもののやうに思はれた。「御機嫌よう。ガンカの畜生！」

「此奴だ。此奴に違ひない！」と今一つの聲が合槌を打つた。公爵は最早疑ふ餘地がなかつた。

一つの聲はラゴージンで、他はレーベヂエフであつた。ガーニヤは全で感覺を失つたもの〻樣に闕の上に突立つて十人か十二人の人々が這入つてくるのも止めようとはしなかつた。

「御機嫌よう、ガンカの畜生！　何かね、パルフェン、ラゴージン とは思ひ も掛けなかつたかい？」

その瞬間彼はふとナスターシヤに氣附いた。と唇が紫色に變る程蒼ざめてきた。

「してみると矢張り本當なんだな？」とラゴージンは呟いた。「駄目だ！　さあ！　もうかうなつては貴樣が俺の相手だ！」彼は凄じい形相でガーニヤを睨み乍ら云つた。「さあ！　糞！」ラゴージンは更にナスターシヤに向つて叫んだ。

「ナスターシヤさん！　お前さん、一體此男と夫婦になる積りなのか。」

ナスターシヤは始終嘲笑ふやうな高壓的な眼附でぢろ〳〵男を見廻してゐたが、やがて云つた。

「決してそんな事はありやしない。どういふ譯で、そんな事を訊かうと思附いたの？」

「無い？　そんな事はない？」と、感極つて卒倒しない許りにラゴージンは叫んだ。「あゝそんな事はないんだつてよ！　あいつら俺に……あゝ……ねえナスターシヤさん！　あいつら俺に、お前さんがガンカと——此奴と約束しなすつたつてぬかしやがるんですよ！　本當にそんな事がありつていゝもんですか！　おれは此奴に手を引かせる爲めに百ルーブリで此奴を買つてやる。千ル

ーブリ呉れてやらうか、いや三千ルーブリ遣る。おいガンカの畜生！　なあ、いつそ三千ルーブリ取つた方がいゝだらう！」

「とつとと出てゆけ、どろつき！　酔つ拂ひ！」

とガーニヤは蒼くなつたり赤くなつたりして叫んだ。と同時に俄かに幾人かの聲が爆發するやうに叫んだ。

「巧い、腰辨！」とラゴージンは應じた。「巧いぞ！　へゞれけ！　なんの糞！　構ふ事はねえ、ナスターシヤさん！」彼の眼附は半分狂人じみてゐた。「こゝに一萬八千ルーブリある！」そして彼は白い袋に包んだ金の束をナスターシヤの前に投出した。

「一萬八千ルーブリ、わたしに？　到頭百姓の本性が現れたわねー」と傲慢と慣々しさを以つてナスターシヤは云ひ乍ら、部屋を出てゆかうとした。ガーニヤはそれらを心臓の鼓動の止るやうな苦腦を覺え乍らぢつと眺めてゐた。

「ぢや四萬ルーブリだ。四萬ルーブリだ。一萬八千は取消しだ！」とラゴージンは叫んだ。「晩の七時迄に作る。四萬ルーブリ！　すつかり一時に卓子の上に揃へて見せる！」

しかしナスターシヤは、ことさらにそれをば長くつゝて置かうとするかの樣に、笑ひ乍ら眺めてゐた。

「えーそんなら十萬ルーブリだ。今日中に揃へてお目に掛ける！」

「お前は酔つ拂つてるんだ。交番へつき出されるぞ！」と、一群の中に交つてゐたブチーツインが叫んだ。

「酔つた勢力で出鱈目を云つてるんだ。」とナスターシヤは調戯ふやうに云つた。

「いんや出鱈目ぢやない。出來る夕方までに出來る……ブチーツイン、助けてくれ、高利貸野郎利息はいくらでも取るがいゝや。十萬ルーブリ丈晩迄に作つてくれ！」

ところでわが老イヂルギン退職將軍が出てきたのであつた。

「併しこれは一體どうした事なのぢや！」

「此奴また何處から飛び出したんだ。」とラゴージンは笑ひ出した。「おい爺さん行かう。一杯飲ようぜ！」

「あゝもう滅茶々々だ！」と、コーリヤは恥しいやらロ惜しいやらで本當に泣き出し乍ら叫んだ。

「ほんとに此恥知らずの女を此處から引き摺り出す人が誰もゐないんですか！」と忿怒の情に全身打ち戰かせつゝヴーリヤが俄かに叫び出した。

「恥知らずの女といふのはわたしの事ですか、」とナスターシヤが平氣な面構へで應じた。「わたしは又皆さんを晩餐會へ招待に來たりなんかして、何んて馬鹿だつたんでせう。ねえガヴリーラさ

ん、あなたのお妹さんはあんな風にわたしを扱ひなさるんですよ。」

思ひも掛けなかつた妹の言葉に、ガーニャは夢中になつて妹に飛び掛り、怒りにまかせてむつとその手を掴んだ。

「貴様何をして呉れた。」

「何をしましたつて？　一體あの女が來て、あなたのお母さんを侮辱し、あなたの家を汚した事に對して、あの女にお詫びでもしなくちやならないんですの？」ヴーリヤは勝誇つたやうな調子で挑戰的に兄の顏を眺め乍ら、叫んだ。

幾瞬間か、二人は顏と顏を突き合はせるやうにして立つてゐた。ガーニャはいつまでも妹の手を掴んで離さうとはしなかつた。ヴーリヤは力一杯自分の手を引つ張つた。しかし力が足りなかつた。と不意に我れを忘れて彼女は兄の顏に唾を吐き掛けた。

「おや〳〵」とナスターシヤが面白さうに叫んだ。「大變なお孃樣だ。お目出度う。プチーツインさん！」プチーツインはヴーリヤに心を寄せてゐるのであつた。

ガーニャは目の中が暗くなつた。彼は前後を忘れて有りつ丈けの力を籠めて妹目掛けて手を振り上げた。拳は必ずヴーリヤの顏に當るに相違ないと思はれた。と、不意に、今一つの手が、あはや打下されんとするガーニャの手を支へたのであつた。

二人の間にはミシユキン公爵が立つてゐた。

「お止しなさい！　澤山ですよ！」と彼は壓しつけるやうに云つたが、その身體は恐ろしい內心の動亂にわな〳〵と慄へてゐた。

「おゝ貴樣はどこまでもおれの邪魔をしようといふんだな。」怒りに興奮されたガーニャは、かう叫び乍ら力限り公爵の顏を毆りつけたのである。

「あつ！」とコーリヤは思はず手を鳴らした。「大變！」

驚愕の聲が四方から起つた。公爵の顏は一度にさつと蒼ざめた。不思議な詰問するやうな眼眸で、彼はひたとガーニャの眼に見入つた。その唇は慄へつゝ何やら云ひ出さうと焦慮つたが、たゞ取つてつけたやうな奇妙な微笑が怪しく顏を歪めるのみであつた。

「えゝ僕ならどんなにされてもかまひません。けれどヴーリヤさんばかりは、決して手出しはさせませんよ！」と彼は漸く小さな聲で云ひ出した。けれども公爵は終に堪ね兼ねてか、やがて兩手で顏を蔽ひ乍ら片隅へ退いた。そして途切れ〳〵な聲で云ひ足した。

「だけど、おゝ、君はどんなに自分のした事を後悔なさるでせう！」

ガーニャは實際冷灰に歸した人のやうに茫然としてゐた。コーリヤは駈け寄つて公爵に抱き付いて接吻した。と、一同の者が皆こぞつて、アルダリオン將軍までが、公爵の所へ寄つてきた。

「何でもありません。何でもありませんー」と公爵は取つてつけたやうな以前の微笑を相不變浮べ乍らかう呟いた。

「さうとも後悔しなくつてさ！」とラゴージンが怒鳴つた。「ガンカ、手前よくも羞しくもなく、こんな羊つ子をいぢめやがつたな！　公爵、お前はいゝ子だ。あんな奴等打つ棄つておきな。嗤でもしつ掛けてといて俺と一緒に行かうぢやねえか。ラゴージンがどの位お前に惚れ込んでるかお前に分るだらう。」

ナスターシヤも同じくガーニヤの振舞と公爵の答へに心を打たれた。先程の故意とらしい空笑ひとは少しも調和しない、何時も蒼白い彼女の顏が、今や明らかにある新しい感情に搔き擾されたやうであつた。けれども彼女は矢張りそれをば表に現はしたくないと見えて嘲りの調子が依然として顏の上に浮んでゐた。「ほんとだ！わたし何處かで此人の顏を見た事がある！」又不意に先刻の疑問を思ひ浮べたやうに、彼女は思ひも寄らぬ眞面目な聲でかう云つた。

「あなたも又それで少しも恥しくないんですか！　あなたは元々からそんな方なんですか。いゝえ、そんな筈は有りません！」いきなり公爵はナスターシヤに向つて、深い心から譴責するやうな調子でかう叫んだ。ナスターシヤは面喰つてにたりと笑つた。併しその笑ひの中に何物かを隱してゞもゐるやうに幾分へどもどしてゐた。そして一寸ガーニヤを尻目にかけ、その儘ぷいと客

間を去つた。けれどもまだ控室まで行かぬ中に、彼女は俄かに引返へしてニイナ夫人に近寄り、その手をとつて自分の唇に押し當てた。

「わたしはね、全くの所、こんな女ではありません。」と早口に熱した口調で囁いたが、不意に身體をぴりつと震はして顏を眞赤にすると、いきなり身を翻へして客間を出ていつた。

ガーニヤは途方に暮れて物思はし氣に部屋へ引つ返した。苦しい謎——先程よりもまだ〳〵苦しい謎が彼の心を壓するのであつた。公爵の事も頭をかすめた。丁度その時、ラゴージンの一隊が我勝ちに戸口の方へゆき乍らガーニヤを突飛ばした。物思ひに耽つた彼はそれさへ判然とは知らなかつた。と或聲が彼の耳をかすめた。

「負けたな、ガンカ！」

それは、ラゴージンの言葉であつた。ガーニヤは茫然としてその後を見送り乍ら、自分の心に激しい困亂を感じてゐた。

公爵は客間を去つて自分の部屋に閉ぢ籠つた。そこへすぐにコーリヤが慰めにきた。哀れな少年はもう彼を離れる事が出來ぬといふ風であつた。

「あなたは出てお了ひなすつて宜かつたですよ。あすこの騷ぎは未だ〳〵もつと酷くなる所だつたんですから。うちゞやもう毎日かうなんです。それもこれも皆ナスターシヤのお陰なんですか

らねえ。」

「お家では種々な澤山の病ひが漸々嵩じて酷くなつたんですねえ。コーリヤさん。」

「えー病が嵩じたんです。……あなたあのナスターシヤさんは美人ですか、何うお思ひですか。僕今まで一度もあの人を見た事なかつたんですよ。それで隨分苦心しました。今日見たら實に眩が眩む程でした。若し兄さんが愛の爲めに結婚するといふんなら、僕何もかも許してやるんだけど。ほんとに何だつて兄さん金なんか欲しがるんだらう。僕それが何より辛いんです。」

「さうですね。僕も君の兄さんあんまり好きでありませんねえ。」

「お前なんか此處に用事はありません。」と這入つてきたヴーリヤは一番に弟に喰つて掛つた。「お父さんの所へお出でなさい。嘸おうるさいでせうね公爵。だけど何故あの女はあなたの云ふ事を諾いたんでせう……。」

「誰れが？　言ふ事を諾くつて？」

「ナスターシヤよ。あなたがあの女に、よくまあ恥しくない事だと仰有つたら、不意にあの人がすつかり別の人になりましたもの。あなたはあの人に感化力を持つてらつしやるんですわ。」

戸が開いた。全く思ひ掛けないガーニヤが這入つてきた。彼はヴーリヤを見てもびくともしなかつた。一寸の間、閾の上に突つ立つてゐたが、俄かに決然たる態度で公爵に近寄つた。

「公爵、わたしは實に陋劣でした。許して下さい。お願ひですから。」といきなり强い情を籠めてかう云つた。彼の顏面筋肉の一つ〳〵が烈しい苦惱を表してゐた。公爵はびつくりして見詰めた儘、すぐには返事をしなかつた。「ね、許して下さい、ね、許して下さい。」と苛立し氣にガーニヤは繰り返した。「ね、若しお望みでしたらわたしは今直ぐにでもあなたの手に接吻します！」

公爵は深く〳〵心を打たれた樣で、無言に兩手を擴げてガーニヤを抱きしめた。二人は共に眞心を籠めて接吻したのである。

「僕はどうしてもあなたがこんな人だとは思はなかつたんですよ。」と公爵はやつと息をつき乍ら到頭云ひ出した。「僕思つてました、あなたはとても……。」

「謝罪なんかする事の出來ない男だつて？　わたしは、又先刻何から考へ附いたんでせう、あなたが白痴だなんて！　あなたは他の人に決して氣の附かない樣な事を、氣附く事の出來る人です。」

「あなたは此處にもう一人謝罪しなければならぬ人があります。」とヴーリヤを指しつゝ公爵が云つた。

「いゝえ、それは皆わたしの敵です。いや全くですよ、公爵。いろんな手段も取つて見たんですが、此家では眞心から人を許しません！」と思はずガーニヤは熱して叫んだ。

「いゝえ、わたし許します。」とヴーリヤが不意に云つた。
「ぢや今夜ナスターシヤさんの所へゆくかい？」
「行けなら行きますわ。だけど兄さん自分でよく考へて御覽なさいよ。今となつてわたしがあの人の所へ行けるかどうか？」
「それはさうと一つお訊ねしたい事がある。」とガーニヤは急に公爵を顧みた。「あなたどうお考へです。つまりそのあなたの御意見が伺ひ度いのです。一體此の『騷ぎ』は七萬五千ルーブリの價値がありますか。ありませんか。」
「僕の考へでは、ありませんねえ。」
「なる程、そんな事だと思つてました。そしてどうですか。結婚もそんなに恥づべき事ですか。」
「實に恥づべき事です。」
「併しどうあつても僕は結婚します。今は堅く決心がつきましたから、左樣御承知願ひます。」
「しかしねえ、僕はあなたの過度の自信に對して驚かざるを得ません。」
「何に對して？　どんな自信です？」
「つまりナスターシヤさんが必ずあなたと結婚するもの、一切の事はもう既に片が附いたものとあなたは決めてらつしやるでせう。又第二には假りにあの人が結婚を承諾したとしても例の七萬

五千ルーブリの金を、眞直ぐにあなたのポケットに入るものと、すつかり信じ切つていらつしやるから。」
「そ、そこにはつまり成算があるんです。あなたは未だ御存じない事が多いですから……いやしかしこんな事はどうでもよろしい、あなたはまた、隨分あのナスターシヤさんがお氣に召したやうに見えましたねえ。違ひますか、え？」
「えゝ大變氣に入りました。」
「惚れ込みましたね。」
「い、いゝえ。」
「でも眞赤になつてらつしやるところを見ると……いや何でもありません。何でもありません。」
そしてガーニヤは室を出ていつた。

（五）　夜會の夜の混亂

ナスターシヤ、フイリッポヴナの第二十五回の誕生日を祝ふ夜會は、その同じ日の夜彼女の住居で催された。人々はこれを夜會と呼んで差支へないであらうか。贅澤と驕慢とに慣れてゐたナスターシヤの夜會としては、これは又じめ〳〵とした索漠たるものであつた事は不思議である。客

としてはエパンチーン將軍、トーツキー、ガーニヤ等を除いては、どくナスターシヤに近しい、くすんだ灰色の階級の人達ばかりであつた。實際、常からナスターシヤの家に出入して、彼女と近しく交はつてゐた人達といへば、皆かういふくすんだ灰色の階級の人達が多かつた。見窄らしいよぼ〳〵の教師や、えたいの知れぬ臆病相な青年や、女優上りの四十位のガサ〳〵女、さういふ人達がナスターシヤの友達である事は實際不思議である。しかしナスターシヤ自身、彼女の家庭の友達としては彼等を好いてゐた事も事實であつた。

ミ　ムキン公爵はその晩、只一人ナスターシヤの家を訪ねていつた。

「十中の九までは」と彼は考へてゐた。「通してはくれないだらう。そしてなにか俺の事を惡く思ふだらう。或は通して呉れたにしても、面と向つて俺を嘲笑するに違ひない。」しかしこれはまだ彼にとつてはさまで驚くに當らない事であつた。

「だといつて、若し中へ通された場合にはどうしたら宜からう。そして俺は一體何用であの人を訪ねようと云ふのだ。」

この問に對しては、どうしても得心のゆくやうな答を發見する事は出來なかつた。よしなんとかしてナスターシヤに

「あの男と結婚なさいますな、それは我と我身を亡すやうなものです。あの男はあなたを愛するのではなく、あなたの金を愛してるのです。これはあの男自分でも云ひましたし、アグラーヤさんも申されました。僕はそれをお傳へに來たのです。」と云ふ事が出來たにしても、それは總ゆる點で正當であり得る事だらうか。その他に今一つ、考へるも恐ろしい程重大な問題が公爵の心にあつた。彼は考へが唯その事に觸れるだけでも、それ丈けで赤くなつて慄へた。公爵は自分に對してその問題を敢へて問ふだけの勇氣もなかつた。しかし結局、かゝる不安や疑惑にも拘らず、彼は矢張り奥へ這入つていつて、ナスターシヤに面會を乞はねばならなかつた。

この公爵の訪問前の總ゆる心配にも拘らず、彼は極めて易々とナスターシヤの部屋に請じ入れられた。

集つた人々の中で、エパンチーン將軍の心中は誰よりも不安に騷いでゐた。もう朝のうちに贈つた眞珠が餘りにそつけないお愛想と、何んとなく奇妙なお世辭笑ひを以つて受納されたからである。このエパンチーン將軍とトーツキーとは、間違ひもなく今夜のナスターシヤのガーニヤに對する反答を得ようとして心で苛立つてゐるのであつた。

夜會は極めて低調子な會話を以つて、人々の心が一緒に朗らかに觸れ合ふ機會を見出し得ずして進んでいつた。たゞフエルデイシチエンコ一人が自ら道化を氣どつて座を賑かにしようとしてゐたが、それはかへつて一座の人々の心に索漠たる感じを味はすばかりであつた。そして最後に

やはりフエルデイシチエンコの提議によつて、ベチジョーといふ遊戯をやり初めたが、それも一向一座を面白がらせはしなかつた。

「トーツキーさん、」とナスターシヤが突然呼び掛けた。「あなたの仰有る通りでした。ベチジョーは全く退屈なばかりですわ。早く切り上げて了ひませう。わたしは以前お約束した事を自分でお話しますわ。それから皆でカルタでもして遊びませう。」

一同は甚だしく緊張した。

「公爵」と全く不意にナスターシヤはかう呼び掛けた。「此處においでの將軍とトーツキーさんはわたしの古いお友達ですが、しきりに結婚しろ結婚しろとお勸めなさるんですの。ねえ公爵、なんとお考へなさいます。わたし結婚したものでせうか、どうでせう。わたしあなたの仰有る通りに實行しますわ。」

トーツキーは眞蒼になり、將軍は棒立ちになつた。一同は眼をそば立て、首を前へ突き出した。ガーニヤは固くなつて座つてゐた。

「た……たれと？」今にも消えさうな聲で公爵は尋ねた。

「ガヴリーラ、アルダリオーノヰツチ、イヴルギン。」依然として鋭く強くはつきりとナスターシヤはかう答へた。

沈默の幾秒かゞすぎた。恰も恐ろしい重荷が其胸を壓してゐるかの如く、公爵は何か云ひ出さうと努めたけれど出來なかつた。

「い、いけません……結婚しちやいけません。」と辛じて囁くと、彼は苦し氣に息を吐いた。

「ぢや、さうしませう！　ガヴリーラさん！」と彼女は勝誇つたやうな聲で嚴かに呼び掛けた。「あなた公爵の仰有つたのをお聞きになつて？　さう、ぢやあれがわたしの返事です。これで此のお話もきつぱりとお終ひにしたいもんですわね！」

「ナスターシヤさん！」慄へる聲でトーツキーが云ひ出した。

「ナスターシヤさん！」さとすやうな、けれども不安げな聲で將軍が呼び掛けた。一同は心配してざわ〳〵動き始めた。

「まあ皆さん、一體どうなすつたのです。」と全るで吃驚した樣に客の顏に見入り乍ら彼女は語を次いだ。「なにをそんなに吃驚なさいますの。皆さん何て顏附をしてらつしやるんでせう。」

「併し覺えておいでゞすか……ナスターシヤさん。」と吃り〳〵トーツキーが呟いた。

「あなたは非常に好意のある約束をして下すつたぢやありませんか。それに幾分は氣の毒だ位に思つて下すつても宜い筈です。……わたしは困つてゐます。そして勿論當惑してゐます。併し……まあ結局今、こんな場合に、その上……お客樣の前で此の事件を此の潔白と誠意とを要すべき

眞面目な事件を、こんなペチジョーで決めて了ふなんて……此の事件の結果如何で以つて……」

「分りませんね、トーツキーさん。あなたは本當にすつかり狼狽へてお了ひなすつたのね。第一『お客樣の前で』とは何です。わたし達は美しい親密なお友達同志ぢやありませんか。そしてなぜペチジョーなどゝ仰有るの。なぜ『眞面目』でないと仰有るの。あなたわたしが公爵に云つた事をお聞きになつて？『わたしあなたの仰有る通りにします』と云つたんですよ。あの人がイエスと云つたら私も承諾したでせう。けれどもあの人はノーと云つたからわたしもお斷りしたんです。これが眞面目でないと仰有るんですか。わたしの生涯は一筋の髮の毛の上に懸つてゐたんぢやありませんか。これより以上眞面目な話がありますか。」

「併し公爵々々つて、何故公爵がそんなに有難いんですか。一體公爵が何です！」癪に觸る公爵の横暴に對する不平を堪へ兼ねて將軍はかう呟いた。

「公爵はわたしが生れて初めて、本當に敬服するに足りる人として信用した、たつた一人の人です。あの方は一ト目見ただけでわたしを信じて下さいました。それでわたしもあの方を信ずるのです。」

「わたしは只ナスターシヤさんのわたしに對する優しいお振舞を篤くお禮申しさへすればいゝのです。」唇を歪めて蒼い顏をしたガーニヤが到頭かう云ひ出した。「それは勿論さうあるべき筈で

す。併し公爵は……公爵は此の事件に於いて……」

「七萬五千ルーブリを狙つてゐたとでも仰有るんですか。」と不意にナスターシヤが遮つた。「あなたはさう云はうとしてらしたんでせう。ごまかさなくつたつていゝぢやありませんか。あなたはきつとさう云はうとしてらしたんです。トーツキーさん、わたし申し忘れてゐました。あの七萬五千ルーブリはあなたお持ちなさい。わたしは無料であなたを自由な體にして上げますから、さう思つて下さいな。もう澤山だ。わたしだつて息を吐かなくちや堪りませんからねえ！　九年と三箇月ですもの。明日からはすつかり新規播直しですが、今日は誕生日の主人公ですから、思ふ存分の事をしますよ。一生にたつた一度！　將軍あなたも今日の眞珠を持つて歸へつて、奥さんに上げて頂戴。これがそれです。明日からはわたしも此家を出てゆきますから、もう夜會といふものも有りませんよ。皆さん！」

かく云ひ終つたナスターシヤは、もう出て行きさうに立上つた。

「ナスターシヤさん！　ナスターシヤさん！」といふ聲が四方から起つた。

一同は胸を躍らせつゝ席を立つて彼女を取圍んだ。一同は不安の念を抱きつゝ、この途切れ途切れの、熱に浮かされたやうな興奮した言葉を聞いた。一同は何かしら困亂した或物を感じたけれども、誰もその意味を摑む事が出來なかつた。誰も何が何やら譯が分らなかつた。ところが、

此瞬間であつた。不意にけたゝましく、烈しくベルを打つ音が響き渡つた。それは今日ガーニヤの家で聞いたと寸分違はぬ響であつた。

「あ！　あー　これで大團圓だ！　到頭來た！　丁度十一時半だ！」とナスターシャが叫んだ。

「皆さんどうぞお坐り下さい。これで大團圓ですから！」

かう云つて彼女は自分から席に着いた。怪しい微笑がその唇の上にをのゝいた。彼女は病的な期待のうちに言葉もなく坐つた儘戸口の方を眺めてゐた。

「ラゴージンが十萬ルーブリ持つてきたのだ、違ひない。」とプチーツインが獨り言のやうに呟いた。

小間使が這入つてきた。恐ろしくおびえてゐる。

「ナスターシャさま、あそこに何だか存じませんが、十人ばかりの男がどや〳〵と這入りまして、此方へ來ようとしてゐるのでございます。みんな揃つて醉つ拂つてをります。ラゴージンとかであなたさまがよく御存じだと申すのでございます。」

前と同じ樣にラゴージンが眞先になつて這入つてきた。そのあとから幾人かの毛のもぢや〳〵した荒男共が、幾分たぢ〳〵とし乍ら續いてきた。ナスターシャの前迄來ると、ラゴージンはその手に持つてゐた、新聞紙包みの小荷物を卓の上に置いて、それからは宣言を待つ罪人のやうな

姿で兩手を垂れて佇んでゐた。彼の服裝は只濃綠に赤の交つた眞新しい絹の襟卷と、甲蟲を形どつた大きなダイヤのピンと、右手の穢しい指にはめた素晴らしいダイヤの指環を除く外、すつかり今朝と同じであつた。

「これは一體何なの」物珍らし氣にぢつとラゴージンを見詰めて「一物」を指さし乍らナスターシャが訊ねた。

「十萬ルーブリ！」と此方は殆ど嗤く樣に答へた。

「それでも矢つ張り約束を違へなかつたわね。感心だ事！　お掛けなさいよ。どうぞ。ほらそこへ、此椅子へ。わたし後程あなたになんとか云ひますよ。誰御一緒の方は？　みんな先刻と同じ連中？　ぢや這入つて坐らしたらいゝわ。」

ラゴージンは示された椅子に坐つたが、それは長く續かなかつた。彼は立上つて、やがておづおづと周圍を見廻した。しかし、そこにゐる人達は別段ラゴージンを驚ろかせはしなかつたらしい。ガーニヤを見附けると彼は毒々しく微笑して「なあんだ」と呟いた。エパンチーン將軍やトーツキーも同じであつた。ところが最後に、彼がナスターシャの傍にゐる公爵を認めた時には、彼は一方ならず驚いて長い間目を放す事が出來なかつた。まるで此の邂逅を何と解釋していゝのか判らぬといつた風であつた。

「皆さん！」とナスターシャは何だか熱に浮かされたやうな、戰を挑むやうな焦燥しげな樣子で一同に向つて叫んだ。「これが十萬ルーブリです。ほら此の汚らしい包の中に這入つてるのです。今日此人が狂人のやうになつて、晩までにわたしの所へ十萬ルーブリ持つて來ると云つたので、わたし心待ちにしてたのです。つまりわたしを競り落したんです。一萬八千ルーブリから始めてそれから急に四萬ルーブリに競り上げ、そして到頭この十萬ルーブリといふ事になりました。でも矢つ張り違ひなしに持つてきましたよ。まあ、此人は何て蒼い顏をしてるんでせう！　實は此事は今朝ガーニヤさんの所で起つたのです。わたしがあの人のお母さんの所へ、つまりわたしの未來の家庭へ訪問に行きますと、妹さんがわたしの目の前で『誰も此恥知らずの女を此處から追ひ出す人はないんですか！』と叫ぶぢやありませんか。そしておまけに、ガーニヤさんの……自分の兄さんの顏へ唾を引つ掛けるんですよ。仲々しつかりした娘さんですわねえ……。」

「ナスターシャさん！」と將軍はなじる樣に云つた。

「何ですの將軍？　無作法だとでも仰有るんですか。いえもう氣取るのは澤山です。わたしがフランス芝居の棧敷に、まるで傍へもより附けない程、德操の高い貴婦人顏をして坐つてゐたり、五年の間わたしを追ひ廻す人達から、野育ちの娘のやうに逃げ廻つて、わたしは清淨無垢な女ですと云つた風な傲慢な顏をして其人達を見下ろしたりしてゐたのは、みんなわたしに魔が差した

からなんです。所がこの五年の清淨無垢が過ぎた今日といふ今日、此人がやつてきて、あなた方の眼の前で卓の上に十萬ルーブリの金を載せました。もう屹度戸外にはトロイカ橇が立つてわたしを待つてゐるんでせう。あゝ十萬ルーブリに値をつけてくれたガーネチカさん、一體あなたはわたしを自分の家に入れる考だつたんですの？　わたしを？　ラゴージンの思ひ女を？　公爵が先刻なんと云ひました。」

「僕はあなたがラゴージンの思ひものだとは云はなかつたです。あなたはラゴージン夫人ぢやありません！」と公爵は慄へ聲で云ひ足した。かくて夜會はラゴージンの侵入によつて益々奇怪な發展を示してきた。

「ほんとにあんたのやうな方は饑ゑ死にでもした方がいゝんだわ。併し噂によると、あんたは大分いゝ月給を取つてるさうですね。それにかてゝ加へて、その厚かましさが足りないで、自分の憎んでゐる女を家へ入れようといふんですか！　えゝ、この男はわたしを憎んでゐます。それはわたしよく知つてをります。しかも此男は金の慾の爲めにわたしを自分の家へ入れようとするのです。えゝ、こんな男は金の慾の爲めなら人殺しもきつとやりますわ、御覽なさい、今時の人はみんな金の慾に渴いて、まるで馬鹿みたいになつて了つてるぢやありませんか。わたしも恥知らずですけれど、あんたはもつと惡いんです！」

ナスターシャの情は激して、彼女はガーニャに對してかう叫び立てた。

「それはあなたの云ふ事ですか。あなたの云ふ事ですか。ナスターシャさん！」と將軍は眞心からの悲しみに打たれて兩手をパチリと鳴らした。「あなたのやうな優美な、あなたのやうな纖細な思想を持つていらつしやる方が……おゝ、何んといふ口でせう。何んといふ言葉でせう！」

「わたし今醉つてるんですの、將軍。」と俄かにナスターシャが笑ひ出した。「わたし少し遊びたいんですの！　今日はわたしの日です。わたしの休日です。わたしは長い間それを待兼ねてゐました。皆さん、この紳士を御覽なさい。ほら此處に坐つてわたし達を嗤つてゐます！」

「わたしは笑つちやゐませんよ。わたしは今非常に注意して聞いてるんです。」と、トーツキーは物々しく答へた。

「一體わたしは何故五年間この人を苛めてきたのでせう。この人はわたしに、教育も授けて呉れたわ。お金も隨分どつさり呉れましたわ。おまけにわたしが田舍にゐる時から、いろ〳〵の良人を探して呉れましたの。此處ではガーネチャをね！　わたしだつて疾くの昔に結婚位出來たんだけれど、今はもう厭なの。まあ何んの爲めに、わたしは此五年間の月日をこんなひねくれた心持で過してきたんでせう。所でねえ、本當にするともしないとも勝手だけれど、四年ばかし前わたしは時々、いつそトーツキーさんの所へお嫁入しようかしらと考へたわ。ほんとに無理矢理にも

さうしてやりたかつた。ところがあの人も自分の方からその事を隨分頼み初めたの。それは勿論あの人の虚言なのよ。さういつて逃げを打たうとしたんですよ。憎いぢやありませんか。わたしはあの人の爲めにいろ〳〵御恩を受けてはゐますが、ほんとの一番大事なものは取られて了つたのね。わたしはもうどんな事をしてもあの人と結婚はしまいと決心したわ。そして全五年間、わたしはあゝしてすまして暮してきたんです。あゝもう嫌やだ。もう往來でのたれ死した方がましだ。わたしにはその方が本當なんだ。それともラゴージンに隨いてゆくか。でなければ明日にも洗濯屋に雇はれるか。何故つていふと、だつてわたしのものは何一つないぢやないの。行くとなれば何も彼もあの人に叩き返してやるわ！　さうして一文なしになつたわたしを誰が貰ひ手がありませう。まあ此ガーニャに訊いてごらんなさい。引き取つて呉れるかどうか。フエルデイシチエンコだつて引取つて呉れやしません。」

それは永い間、虐げられてきた人間の、遂ひにその虐げに堪へられなくなつた爲めの爆發の叫びである。ナスターシャの眼は殘忍と涙の光の爲めにギラ〳〵と燃えてゐた。

「フエルデイシエンコは若しかしたら引き取つてくれないかも知れません、ナスターシャさん。」とフエルデイシエンコが遮つた。「僕は露き出しの人間ですからね。その代り公爵が引き取つて呉れます。あなたはさうしてぢつと坐つて、泣いたりわめいたりばつかりしていらつしやるが、

まあ一寸公爵を御覽なさい！」

ナスターシャは好奇の眼を向けて公爵の方を眺めた。

「本當？」と彼女は尋ねた。

「本當です！」と公爵は呟いた。

「このまゝ一文なしで引き取つて？」

「引き取ります。ナスターシャさん！」

「そら又飛んでもない事が起つた。」と將軍が呟いた。「萬更思ひ掛けない事でもなかつた！」

公爵は猶も自分を眺め續けてゐるナスターシャを、悲し氣な刺し通すやうないかつい眼で眺めた。

「まあ」と客の一人の女が叫んだ。「公爵、あなたはラゴージンの思ひ女を引き取らうといふ程惚れ込んぢまつて、自分の——公爵といふ名の手前どうしようと仰有るの？」

「僕は、純潔なナスターシャさんを引き取るので、ラゴージンの思ひ女としてのナスターシャを引き取るのぢやありません。」と公爵は云つた。

「ぢや、わたしが純潔なの？」とナスターシャは不思議な惹かれるやうな眼をして云つた。

「えゝ。」

「なんの、そんな事はほら……小説のお話ですよ！　それはね公爵、坊つちやん、昔の寢言よ、今ぢや世間が利口になつてきたから、そんな事は一切お取上げになりませんよ！　それにまだ御自分に乳母さんが要る癖に、結婚なんかしてどうするの？」

公爵は立上つて、臆病さうな震へ聲ではあるが、深い信念を持つた人のやうな顏附をして口を切つた。

「僕は何にも知りません。ナスターシャさん、僕は何にも見ません。仰有る通りです。併し僕は……僕は考へます。此結婚によつて僕があなたに對してでなく、あなたが僕に對して榮譽を與へて下さるのです。僕は何の價値もない男です。所があなたは艱難辛苦しました。そしてその地獄の中から清い人間として出てきました。これ丈けで澤山です。それをあなたは何だつて恥しがつてラゴージンと一緒に行かうなどゝお考へになるんでせう。それは唯熱のせゐです。あなたはトーツキーさんに一萬七千留を突き返して、こゝに有るものをすつかり棄てゝ行くと仰有やいました。こゝでさういふ事の出來る人は誰もゐません。僕は……ナスターシャさん……あなたを愛します。僕はあなたの爲めなら死にませう。ナスターシャさん、僕は一言だつてあなたの蔭口は人に利かせませんよ。若し僕等が貧乏したら、僕自分で稼ぎます……。」

此最後の言葉と共に、人々はくす〳〵と笑ひ出した。將軍まで大分苦し相に家鴨の樣な聲を立

てた。トーツキーも微笑せずにはゐられなかつたが、辛つと押し堪へた。

「けれども僕達は貧乏しないで、却つて大金持になるかもしれません。ナスターシヤさん。」と例の震へ聲で公爵は續けた。「けれども僕も確かな事は分りません。そして今日一杯何一つ知る事が出來ないで了つたのが殘念です。併し僕は瑞西でサラーズキンとかいふモスコーの人から手紙を受取りました。それで見ると、何だか僕が大變大きな遺産を受取れる樣子なんです。これがその手紙です。」

公爵は實際ポケットから手紙を取出した。

「あの男夢でも見てるんぢやないか。」と將軍は呟いた。「まるで本當の癲狂院だ。」

一寸の間一種の沈默がきた。

「公爵、あなた今サラーズキンから手紙が來たと仰有つた樣ですね。」とその時横に立つてゐたプチーツインが訊ねた。「この男は仲間中では隨分有名な男です。種々な事件の周旋をして歩く有名な男ですから、若し實際此人が知らせて來たのでしたら、全然信用していゝです。いゝ鹽梅にわたしが手蹟を知つてゐますから、若しわたしに一ト目見さして下されば、何かあなたにお役立てする事が出來るかも知れません。」

公爵は無言のまゝ震へる手で手紙を差出した。

「一體何事です。何事です。」とエパンチーン將軍はふと氣が附いて、失心したものゝやうに人々を眺め乍ら云つた。「ほんとにですつて？　遺産ですつて？」

一同は手紙を讀んでゐるプチーツインに視線を注いだ。人々の好奇心は更に新しく異常なる衝動を與へられた。

「間違ひありません。」手紙を讀んで公爵に渡し乍ら、到頭プチーツインはかう云ひ切つた。「あなたは伯母さんの確かな遺言によつて、少しも骨折らずに莫大な遺産を讓り受ける事が出來ますよ。」

人々は又しても開いた口が塞らなかつた。プチーツインの説明によると、それは公爵の今迄嘗て知らなかつた伯母が五箇月前に死し、その伯母は貧しい商人の娘であつたが、その父の實兄が人に知れない富裕な商人だつたのであつた。ところが、その商人が死んで相續人として伯母を定めたので、その伯母がまた死に臨んで相續人を公爵と定め、かくてサラーズキンに頼んで公爵の行方を搜した結果なのである。

プチーツインは更に公爵に向つて附加へた。

「此事件は全々爭ふ餘地のない程正確なものに相違ありません。サラーズキンが此事を法律上確實なものと保證してゐる以上、あなたのポケットに現金が這入つた氣でいらつしてもいゝです。

お目出度う。事によつたら百五十萬或はそれ以上！」

「よう〳〵、一門で一番最後のミシユキン公爵！」とフェルデイシチエンコが泣くやうな聲を出した。（ロシア語では、最後の者といふのは同時に最も下等な者といふ意味もあるので、兩方をかけて面白く云つたのである。）

「ウラー」と他の者が叫んだ。

「わたしは先刻この人に二十五ルーブリ貸したんですよ、可哀さうに、ハ、、！　まるで幻燈だ。」

驚きのあまり、ぼうとなつて了つて將軍は云つた。「いや、おめでたい。おめでたい！」

人は暫くナスターシャの事を、此夜會の主人なるナスターシャの事を忘れたやうであつた。併しすぐ今しがた公爵が彼女に申込をしたばかりであつた事が思ひ出された。そして事件は前より二倍も三倍も氣狂じみた突飛な性質を帶びてきたのである。ナスターシャは、依然として腰かけたまゝ何となく奇妙な吃驚したやうな顏付をして人々を見廻した。やがて彼女はふいと公爵の方へ向いて、眉を可怕らしく顰め乍らぢいつと彼を眺めた。併しこれは只の一瞬間であつた。彼女はすぐに、につこりと笑つた。しかし自分でも何故笑つたのか意識はないらしかつた。

「ぢやいよ〳〵公爵夫人だ。」と彼女はやがて嘲笑ふ樣に獨言した。そしてから〳〵といきなり純ひ出したのである。「思ひ掛けない大團圓だつた事、……わたしこんな風にならうとは思ひもよら

なかつた。どうなすつたの皆さん、ぼんやり突つ立つてー　後生ですから坐つて下さい。そして公爵夫人にお祝ひを云つて頂戴なー　誰かシャンパンを云つて頂戴、カーチヤ。パーシヤ。」俄かに彼女は戸口に立つてゐる小間使を見附けた。「此方へおいで。わたしはお嫁入するのよ。聞いたかえ。公爵の所へ。あの人には百五十萬の財産があるつて。あの人はミシユキンといふ公爵でね、わたしを引取つて下さるとさ。」

「さうしたがいゝわ、もういゝ加減見切り時よ。此運を逃しちやいけない事よ。」此出來事に深く心を攪亂された客の一人の女が叫んだ。

「さあわたしの傍へ坐つて頂戴、公爵。」とナスターシャは語を次いだ。「えゝさう。あゝお酒がきました。皆さん祝つて下さい。」

「ウラーー！」と皆の者は聲を合して叫んだ。

公爵は此騷ぎに困つたやうな顏付をして佇んでゐた。

「公爵、坊つちやん、しつかりし給へ。」

將軍は公爵の傍へ行つてそつと袖を引いた。ナスターシャは氣が付いて、から〳〵と笑ひ出した。

「いゝえ將軍、わたしはもう公爵夫人ですよ。分りましたか。公爵はわたしに恥なんかかゝせは

しません。トーツキーさん。あなたこそわたしを視つて頂戴。わたしはもうどこへ行つてもあなたの奥さんと並んで腰を掛けられるんですよ。如何です、かういふ良人を持つたのは得ぢやありませんか。百五十萬。その上に公爵。その上に白痴ださうですからね。此上なしだわ。今から本統の生活が初まるんです。遅れたわねえ、ラゴージンさん！　その包をお藏ひなさい。わたしは公爵へお嫁入りして、お前さんよりかもつと金持になるんだから！」

ラゴージンは事の何たるやを知つた。何とも云ひやうのない苦悶はその顏に印せられた。彼は兩手をはたと拍つて、胸の底からの呻きを漏らした。

「どきやがれ！」と彼は公爵に叫んだ。あたりでどつと笑ひの聲がくづれた。ラゴージンは更に續けた。「おれだつて引取る、今引取る、今直ぐに！　何もかもやつちまふ！」

笑聲は一層高まつた。

「あれを聞いて、公爵？」とナスターシヤは心一杯はりきるやうな姿で叫んだ。「あゝして土百姓があんたの許嫁を競つてゐますよ。」

「あの人は醉つてるんです。」と公爵が云つた。「あの人は大變あなたを愛してるんです。」

「あんたは後で恥しくなくならなくつて？　あんたの許嫁が餘つ程ラゴージンと駈落しようとしたんですよ。」

「それはあなたが熱に浮かされていらしつたからです。今でもあなたは熱に浮かされてゐます。まるで魔されていらつしやるやうです。」

「けど後になつて、お前の女房はトーツキーの妾だつたと云はれた時、あんた恥しくは思はなくつて？」

「いゝえ、恥しいとは思ひません。あなたの意志でトーツキーさんの所にゐたのぢやないのですから。」

「決して責めない？」

「責めません！」

「けれどねえ、一生涯の請合はねえ……」

「ナスターシヤさん！」と公爵は靜かに、恰かも憫むが如くに呼び掛けた。「あなたが先刻ラゴージンと一緒に行かうとなすつたのは、あなたの病的な發作が決めさせた事です。あなたは今も矢張り發作に襲はれてゐます。だから早く寢床へいらした方がいゝのです。あなたは明日にも洗濯女にお成んなさるかも知れない。けれどラゴージンと一緒になんか決しておなりにはならないんです。あなたには誇りがあります。けど事に依つたらあなたは不幸の餘り、實際自分が惡いと思つてらつしやるかも知れません。あなたには餘程親切に介抱する人がなくてはなりません。ナ

スターシャさん！　僕がそれをします。僕は今朝あなたの寫眞を見て、まるで馴染みの顏に出會つたやうな氣がしました。僕は、すぐにその時、あなたが僕を呼んでいらつしやる樣に感じました。」

「有難うよ、公爵、今迄誰もわたしにさう云つて呉れる者は無かつたわ。」とナスターシャが云ひ出した。「わたしはいつも賣り買ひされるばかりで、未だ誰一人身分のある人から結婚の世話をして貰つた事はありません。あなたお聞きなすつて、トーツキーさん。今公爵の云つた事をあなたは何とお思ひなさる……ラゴージンさん、お前さん行くのを暫く見合はせておいで、尤もお前さんには行つちまふなんて事は出來さうもないがね。どうかしたら、わたしお前さんと一緒に出掛るかも知れないよ。お前さん一體どこへ連れていくつもりなの？」

「エカチェリンゴフでがす。」とラゴージンの弟子の一人が得々として云つた。が、ラゴージン自身は恰も自分の耳を信ずる事が出來ぬやうに、只ぶる〳〵と身震ひして、眼を一杯に睜き乍ら眺めてゐた。彼は恰かも恐ろしい打擊を頭に受けたもの〻如く、まるつきり感覺を失つて了つてゐた。

「まあどうしたのあなた？　どうしたのあなた？　本當に發作でも起つたのぢやありませんか。あなたは氣でも違つたんですの？」と客の一人の女は仰天してナスターシャに叫んだ。

「まああなたは今迄眞面目にとつてたの？」聲高に笑ひ乍らナスターシャは長椅子から飛び上つた。「こんな坊つちやんの一生を臺なしにするなんて？　それはトーツキーさんには恰好な仕事ですよ。あの人は赤ん坊が大好きなんだから！　ラゴージン、さあ出掛ませう。その包をお片附けなさい！　なあに、お前さんがわたしと夫婦になりたいと考へたつてかまはないけど、お金だけは兎に角お寄越しなさい。まだお前さんとは夫婦にやならないかもしれないけどね。お前さんは自分が夫婦になりたいと思つたら、すぐにお金の束もお前さんの手に戻ると考へてたの？　さうはゆきませんよ。わたしは恥知らずですからね！　トーツキーの妾だつたんだからね……公爵今あんたに必要なのはアグラーヤ、エパンチーナさんです。ナスターシャ、フイリツポヴナではありません。あんたは少しも恐れないけれど、わたしはあんたの一生を癈れ者にして、あとであんたに責められるのがつらいの！　あんたは、わたしがあんたに名譽を與へるといふけれど、それが嘘か本當かはトーツキーさんがよく知つてゐます。ガーネチカさん、あんたはアグラーヤさんを見損つたのね。あんたそれを知つて〻？　あんたが懸引なんかしなかつたら、あの人はきつとあんたと一緒になつたのにねえ。あんた達はみんなさういふ風な人なんですよ。不眞面目な女でも眞面目な女でも、女と知合になるのには、いつでも算盤勘定がいるんです！　その癖、屹度迷つて了ふんだけれど、おや！　將軍の顏付つたらどうでせう、口をぽかんと開けて……。」

「もうこりやソドムだ、ソドム！」と將軍は兩肩をつき上げるやうにして繰り返へした。
「トーツキーさん。」とナスターシヤは續けた。「さあ本當にわたしは百萬ルーブリを窓の外に投げ出しましたよ。公爵と結婚するのを！　いやガーネチカと結婚するのを！　あなたの七萬五千ルーブリと結婚するのを、わたしが幸福だと思ふなんて、あなたはよくもそんな事が考へられたもんですわね。七萬五千ルーブリはどうぞ引つ込めて頂戴！　十萬迄とは思ひ切れなかつたと見えるわねえ。ラゴージンの方が大分餘計氣前を見せたんだわ！　やれ〳〵少し散歩がしたくなつた。どうせわたしは街頭の女ですからねえ。十年牢屋に坐つてゐたが、今こそわたしの仕合はせが廻つてきたんです。お前さんどうしたの、ラゴージン支度をおしよ、さあ出掛けるんだよ！」
「出掛よう！」嬉しさの餘り殆ど夢中になつて、ラゴージンは叫えるやうに云つた。「やい手前達……みんな……酒だ！　ウフッ！」
「酒を用意してお置き、わたしも飲む。そして樂隊はあるの？」
「あるとも！　あるとも！　寄つちやいけねえ！」ふと客の一人がナスターシヤの方へ近寄るのを見ると、彼は夢中になつて叫んだ。「おれのもんだ！　みんなおれのもんだ！　女王樣だ！萬歲！」
彼は狂喜のあまり息をはずませてゐた。そしてナスターシヤの周圍をグル〳〵廻り乍ら、誰に

でも彼れにでも「寄つちやいけねえ！」と怒鳴つた。
「何をお前さんは怒鳴つてるんだえ！」と、ナスターシヤはそのラゴージンに哄笑を浴びせ掛けた。「わたしはまだ此家の主人なんだからね、もし爲ようと思つたらお前さんを突き出すことも出來るんですよ。あゝわたしはまだお前さんからお金を受取らなかつた。あすこにある！　あれを取つて頂戴。包ごとすつかり！　おゝ此中に十萬ルーブリ入つてゐるんだねえ？　ウフッ！　何んて嫌やなこつたらう。おや公爵、まああんたは何んだつて泣いてるの。悲しいとでも云ふの？下らない、お笑ひなさいよ、わたしのやうに（と語り續けるナスターシヤ自身の雙頰にも、大きな二滴の涙が輝いてゐた！）時をお信じなさい——何でもなくなつて了ふわ！　後になつてからよか、今考へ直して置く方がいゝのよ……まあ何だつてみんな泣き出すんだらうねえ——あらカーチヤ迄が泣いてるよ！　カーチヤ、いゝ子、何が悲しいんだえ。わたしはお前とパーシヤに澤山いろんな物を殘して置いたよ、ちやんと差圖してあるからね。だが今はこれでお別れよ。お前のやうな正直な子に〳〵こんなあばずれ女の世話をよくさせたわねえ。……公爵〳〵かうなる方がいいのよ、全くいゝの。實をいへば、わたしだつてあんたのやうな人の事を空想しなかつたわけぢやないの、それはあんたの云ふ通りだわ！　わたしがまだあの男に育はれて田舍に五年の間、ほんとの一人ぼつちで暮してゐた時分、わたしはよくあんたのやうな人の事を空想したわ。考へて

考へて考へ抜き、空想して空想して空想し抜く事があるでせう。するとわたし、正直で人のいゝ親切な、そして矢つ張り少々のろまな人を想像するの。そんな人がやつてきて『ナスターシヤさん、あなたには罪はない、僕はあなたを尊敬します』といひさうな氣がしてならなかつた。よくさうした空想に苦しめられて、氣が狂ひさうになる事もあつたわ……ところへ此男がやつてきて（とトーツキーを指して）一年に二タ月づゝ逗留つて行つて、汚らはしい、恥しい、腹の立つ、淫蕩な事をして歸つてゆくんです――わたしは何遍か池へ身を投げようと思つたけれど、未練なために思ひ切れなかつたの。さあもう、ラゴージン、用意は出來た？」

「出來た！　出來た！」

「三頭立橇（トロイカ）が待つてゐます。鈴をつけて待つてゐます。」

ナスターシヤは金包を手に取つた。

「ガーニヤさん、わたしいゝ事を考へ附いたわ。わたしあんたに御褒美を上げようと思ふの、何んぼ何んでもみんな失くして了つちゃ可哀さうだものね。いやわたしはもう一度、お名殘にもう一度、あんたの根性が見たくなつた。あんたは全る三月の間わたしを苛めたんだもの、今度はわたしの番です。この包を御覽なさい。この中に十萬ルーブリ入つてるんですよ。今わたしみなさんの前でこれを暖爐の火ん中へ抛り込みます。皆が證人です。此包全體に火が廻ると直ぐ、暖爐

の中へ手をお突つ込みなさい。但し手袋なしで。そして此包みを火の中から引出しなさい！　巧くいつたらあんたのものです。十萬ルーブリがすつかりあんたのものになるんですよ。些つとばかり指を燒傷もしませうが――何しろ十萬ルーブリですからね。若し取り出さなかつたらそれつ切り燃えて了つてよ。他の人は誰にも許しません。退いて頂戴！　みんなどいて！　わたしのお金だから。わたしが一ト晩でラゴージンから取つたお金だ。さうだらう？　ラゴージン。」

「お前さんのだ。女王さん。お前さんのだ。」

「ちやみんな退いて頂戴、わたしの仕度い事は何んでもする！　邪魔をする事はなりません。さあフェルディシチエンコさん、火を直して頂戴な！」

「ナスターシヤさん、手が動きません。」と度膽を抜かれたフェルディシチエンコは答へた。

「エーツ」とナスターシヤは叫んで爐火箸をとり、燃え出し初めた火の中に金包を投げ込んだのである！

「氣が狂つた！　氣が狂つた！」といふ叫びが四邊から起つた。

「あの……あの……あの女を縛らなくてもいゝだらうか。」と將軍が呟いた。「でなければ癲狂院へ……だつて氣が狂つたんぢやないか、だつて氣が狂つたんぢやないか、氣が？」

「奥さん、女王、萬能の女神さま。」その時、ラゴージンの手下の中から一人の男がナスターシヤ

の前へ這ひ出してきて泣くやうな聲で云ひ初めた。「十萬ルーブリ、十萬ルーブリ！　わたしが此目で見たのです。わたしの目の前で包んだのです！　奥さん。お慈悲深い、萬能の奥さん！　わたしに吩附けて下さいまし。すつかり暖爐の中へ潜り込みます。此の胡麻鹽頭をすつかり火の中へ突つ込みます。足無しの女房に子供が十三人――みんな孤兒でございます。前週に父親を埋葬したばかりでございます。餓ゑ死にさうでございます。ナスターシヤさま！」そして彼は暖爐へ這ひ込まうとした。

「お退き！」とナスターシヤは叫んで彼を突き飛ばした。「みんな後へ引いて下さい！　ガーニヤ何をあんたぼんやり立つてゐるの。恥かしがる事はありません、お突つ込みなさい。あんたの福德ですよ！」

けれども此一日此の一晩、あまりに多過ぎる程多くの事を堪へ忍んだガーニヤは、この拷問の前に只茫然として立つより他なかつた。群集は二人を前にして兩方に引き分れたので、彼はナスターシヤに顏と顏とを突き合はさねばならなかつた。ナスターシヤはその手巾のやうに白い顏に狂氣じみた微笑を動かした。ガーニヤは燃えるやうな眼を今や燒けつゝある金包の上に注いだ。併しその瞬間彼の心の上に何かしら或新しい物が上つてくるやうに思はれた。そして彼はこの拷問を忍受しようと誓つたかの如くその場を動かうとしなかつた。

「え、燒けつちまふぢやないの、後で人に笑はれますよ。」ナスターシヤは彼に向つて叫んだ。その時金包を取卷いた焰の舌は漸く光を增したやうであつた。人々は「アツ」と叫んだ。

「これが本當の女王だ！」とラゴージンは誰彼の區別なく摑へてかう繰返へした。「これがおれ達の遣り口だ！」と彼は我れを忘れて叫ぶのであつた。「やい蛆蟲めら、手前つちにこれ丈けの藝當が出來るかい？　うん？」

公爵は愁はし氣に默つて眺めて居た。

「こ、こん畜生！　燒ける、みんな燒ける！」

「燒ける、燒ける！」一同は皆暖爐の方へ身を乘り出し乍ら、異口同音に叫んだ。

「ガーニヤ、もう一遍云ひます。氣取るのはお止しなさい。」

「やれ〳〵。」フェルディシチェンコは全く夢中になつてガーニヤに飛び掛りその袖をうんと引つぱつた。「やれつてば、力み屋さん！　燒けつちまふぢやないか！　おゝ馬鹿野郎！」

ガーニヤは力限りフェルディシチェンコを突き飛ばした。と、よろ〳〵と蹌めいて、どうとばかりに床に倒れたのであつた。

「や、氣絕だ！」といふ聲が周圍に起つた。

「カーチヤ、バーチヤ。あの人に水を、そしてアルコールを！」とナスターシヤは聲高に命じて

をいて、爐火箸を取り金包を取出した。殆ど包紙の全部は燒け爛れてゐたが、中味には少しも損傷のない事がわかつた。金は新聞紙で三重にくるんであつた。人々は漸く自由に吐息を吐いた。

「僅か千ルーブリはどうかしたら傷んでるかも知れないが、その他はみんな無事だ！」と先刻自分に取らせて呉れと頼んだ胡麻鹽頭の男が叫んだ。彼はレーベチェフである。

「みんなあの人のものです！　此の包はすつかりあの人のものです！　よこさんすか皆さん」とナスターシャは包をガーニヤの傍へ置き乍ら宣告した。「取りにゆかなかつた。堪らへおほせた。してみるとまだ、自尊心が金の慾より多いのかしら！　なにかまひません、今に息を吹き返へします。若し氣絶しなかつたら大方わたしに斬つて掛つたらうに！　ほらもう氣がつき掛つた。包はあの人のですよ。えゝどんな事があらうと！　それからラゴージン、さあ出掛けませう！　左樣なら、公爵、生れて初めて人間を見ました！　左樣なら、トーツキーさん」

ラゴージンの與黨はラゴージンとナスターシャに續いて動亂と叫聲を立て乍ら幾つかの部屋を通つて出口の方へどや〳〵と駈け出した。カーチヤもパーシヤも下女のマルフアも臺所から馳せ附けた。ナスターシャは彼等一同を交る〴〵接吻した。

「まあ奥樣、全くあなたはわたし共を捨てゝ了ふお積りでございますか、そしてどこへお出でなさいますの？　而も御誕生日といふお目出度い日に！」と散々泣いた娘達は彼女の手を接吻し乍

ら訊ねた。

「往來へ行きます。カーチヤお前も聞いたらう、往來がわたしの居るべき場所なんです。でなければ洗濯女にでも雇はれます！　もうトーツキーさんとのお附合は澤山。わたしを恨まないで頂戴！」

公爵は驀進に車寄せに向つて突進した。そこで一同は四臺の鈴のついた三頭立橇に分乘してゐた。將軍はまだ階段の上で公爵に追付く事が出來た。

「ねえ公爵、しつかりし給へ。」と彼は公爵の手を握つてから云つた。「打つ棄つて了ふさ！　あんな女ぢやないか。わたしは君の父親として云ふのだ！」

公爵はちらとその顏を見たが、一言も云はずに、取られた手を振切つて下へ駈け下つた。

たつた今三頭立橇が辷り出した後の車寄せへ出て來た將軍は、公爵が初めて行當つた客橇を捕へて

「エカチエリンゴフへ、あの三頭立橇の跡を追ふんだ！」と叫んでゐる姿を暗の中に見分けた。

やがて灰色の駿馬をつけた將軍の馬車が走り出して、彼を新しい希望と目論見と今朝程ナスターシヤに送つた眞珠と（將軍はそれでも此眞珠をとつてくる事を忘れなかつた）共に我家の方へ

運んでいつた。その様々な目論見の間に二度ばかりナスターシャの魅するやうな姿が眼の前を掠めて通つたのである。

「いやわたしだつて出來る丈けの事をした以上は何も出來ません。が、あの女には仲々立派な品格が、目醒ましい特質があります。またあの女がわたしに浴びせ掛けた非難に對する最もいゝ辯明はあの女自身が示してくれます。といふのは、誰だつてどうかした拍子には理性の判斷も何も失ふ程、あの女の擒になりますよ。實際そんな女なんですね。その證據に御覽なさい、あの百姓のラゴージンが、十萬ルーブリといふ金を持つてきたぢやありませんか！　よしんば假りに今晩起つた事が悉く蜉蝣のやうな、ロマンチックな、不躾けなものであるとしても、その代り色彩的です。その代り警拔です。ね、さうぢやありませんか。あーあ、あれ丈けの氣象と、あれ丈けの美貌とがあつたら、どんな事をでも出來たものをねえ！　あれ程骨を折つたのも教育を施したのも——すつかり水の泡になつて了つた。磨かれざるダイヤモンド——わたしは幾度あの女の事をかう思つたか分りませんよ……。」

トーツキーはプチーツインに向つて、かう云ひ乍ら深い溜息をついた。かくて、ミシュキン公爵のペテルブルグ到着の第一日は、この事件多き夜を以つて終つたのであつた。

第二編　靈の彷徨

（一）その後の狀況

我等の此物語第一編の終結として、ナスターシヤ、フイリツポヴナの夜會に於ける奇怪なる出來事があつて後、二日經つてミシュキン公爵は例の思ひ掛けない遺産相續の爲めモスコーへ向けて出發した。そしてこの出發以後六ケ月の間といふものは彼は再びペテルブルグに現れなかつたので、彼に就いて多くの報知を辭す事は出來ぬ。たゞ次のやうな事のみは可なり確實な事として云ひ傳へられた。といふのは、公爵の遺産といふのは實は初めに觸れ廻した程莫大なものではなかつたといふ事、及び、彼は、故人の債權者達がてんでお話にならぬ樣な怪し氣な證文を持つてやつてきたのに對しても、友人達の樣々の忠告に拘らず皆相當な目鼻をつけてやつたといふ事などである。その他の噂に付いてはあるうすのろの公爵が思ひがけなく莫大な遺産を引きついで、巴里のある踊子と結婚したとか、いや遺産をうけたのは何處かの將軍で、フランスの踊子と結婚したのはロシアの或物持ちの商人で、結婚の席上で、つまらない見得の爲めに七十萬ルーブリの金を火で燒いたなどゝいふものであつた。これらは全るで見當違ひな噂ではあつたが、只一つ、

公爵がモスコーでナスターシヤと暫く同棲してゐた事は事實である。しかし吾人はそれに就いて述べる折はもつと他にあるだらう。

ガーニヤに就いて云へば、彼はいろ〳〵の交際社會から姿をかくし、何か患つて憂鬱病にさへかゝつてゐた。一寸云つておくが、エパンチーン將軍家では彼の事に就いて、まるでそんな人間はエパンチーン家のみといはず世の中にゐなかつたか何ぞの樣に口に上すことがなくなつた。けれども此家の人一同は實は彼に就いて一つの興味ある出來事を聞き知つてゐた。といふのは外でもない、ガーニヤにとつてのるかそるかといふあの夜のうち、ナスターシヤの夜會で忌はしい出來事が起つた後、ガーニヤは家へ歸つてから床に就かないで熱病やみか何ぞのやうに苛々として公爵の歸宅を待つてゐた。エカチエリンゴフへ橇を走らせた公爵は朝の五時過ぎにそこから歸つてきた。その時ガーニヤは彼の部屋へ這入つてきてその卓の上に半燒けの紙包を置いた。それは彼が氣絶して倒れた時ナスターシヤが贈物にした十萬ルーブリの金である。彼は此の贈物を機會の有り次第ナスターシヤに返して呉れとうるさい程公爵に賴んだ。ガーニヤが公爵のところへ這入つた時、彼は仇敵に對するやうな自暴自棄の心持を抱いてゐた。けれど二人の間に何か言葉が交はされてから、ガーニヤは公爵の室に二時間も坐り込んでその間絶えず烈しく慟哭した。別れる時には二人共もう友人同志のやうな間柄になつてゐたとかいふ事である。

ナスターシヤ、フイリツポヴナ、パラシユコフに就いては益々奇怪な風說が行はれた。彼女はラゴージンと共に去つた後、再びラゴージンのもとから姿をかくし、やがてモスコーへ行つたが、そこで又ラゴージンに探し出されその後又何處かに逃れて又ラゴージンに探し出され、かくして到頭彼女は彼と結婚しようといふ確固たる約束を與へたといふのである。所が此處に奇々怪々たる事は、それから僅か二週間たゝぬうちにナスターシヤは又三度目に殆ど結婚の間際になつて逃げ出したといふのである。そして此度は何處か地方へ姿をかくした。

ガーニヤの妹ヴルヴーラはガーニヤの友人で高利貸を業としてゐる紳士プチーツインの所へ嫁した。これについては、ガーニヤが職を投げ打つて家族を養ふ事をしなくなつたのみか却つて他人の助力や看護を必要とするやうな狀態になつたからだといふ噂がある。ヴルヴーラは俄かにエパンチーン家の人々と親密にするやうになつた。そして程もなくリザヱータ夫人の驚くべき親愛を受けるやうになつた。

トーツキーとエパンチーン家の長女との婚談は全然瓦解して了つた。そして正式な申込は到頭しないですんだ。「今こそわたしは兩手でのび〳〵と十字を切り度い程嬉しい」とリザヱータ夫人は云つた。將軍も自分が惡かつたと思ひ、きまり惡がつてゐたが、それでも長い間むつつりと膨れてゐた。彼はトーツキーが惜しくて堪らなかつた。「あれ程の財產、あれ程の賢い人間は……」と

考へたのである。トーツキーは或上流佛蘭西婦人にたらし込まれて近々結婚式を擧げるさうだつた。それを聞いた將軍は「ふんフランス女とどろんをきめるさうだ」と嘯いてゐた。

エパンチーン家では夏になつたら外國へ出掛けようといふ話が冬の中に次第々々と固つてゐた。尤もそれはリザヱータ夫人と令孃達丈けで、將軍には無論さうした「下らぬ物見遊山」に時を費す餘裕がなかつた。此決定は令孃達の恐ろしく執拗な主張によつて成立つたのである。自分達を外國へやつて呉れないのは親達が絶えず婿選みに腐心してゐるからだと、かう令孃は信じて疑はなかつた。或は親達の方でも婿選みは外國でも出來る。一夏の旅行位少しも事を破らぬのみか、寧ろ却つて「助け」になるかも知れぬ、と考へ直したのかも知れない。

でエパンチーン家では夏始めに出發する積りでその準備をしてゐた。すると思ひも掛けずある事情が生じて一切の事がすつかり根本的に變更して了つた。といふのはモスコーからペテルブルグへ一人のSといふ公爵がやつてきて將軍の家とも近附きになり、三人の姉妹中のアヂエライーダが大變强い印象を彼に與へたらしく、春の近づく頃彼は自分の希望を打明け、結婚式は春と決つたのであつた。

とはいへ旅行は、去り行くアヂエライーダを思ふ憂愁を紛らす爲めに、リザヱータ夫人と二人の令孃とのちよいとした遊山といつた風の體裁で夏の中頃か終りにか實行する事になりさうであつた。所へまたしても新しく或物が突然頭を擡げたのである。春も終りに近い頃、S公爵はエパンチーン家へ遠い親戚の一人、エウゲーニイ、パアブロヰッチなる人を紹介した。未だ若い二十八歳位の侍從武官で、名門の生れの繪のやうに美しい、才智に富んだ、光り輝くばかりの「素晴らしい學問のある」何だか聞いた事もない程の財產を持つた、而も「新しい男」である。只一つの缺點ともいふべき世評は、彼は今迄に幾人となく不幸なるハートを征服したといふ事である。アグラーヤを見てから彼はエパンチーン家を度々訪ねるやうになつた。そして、エパンチーン家では彼を非常に丁寧に扱つた。察するところ、彼の財產といひ、名望といひ、美しさといひ、アグラーヤの夫君にするには、もつてこいの人物であるといふ考へが、將軍及夫人の間に起つたのかもしらぬ。尤も本人のアグラーヤには又變つた意見があるかも知れぬけれど。

此事は、我等の物語の主人公が再び舞臺へ現れる殆直ぐ前に起つたのであつた。一見した所ペテルブルグでは此時分、不幸なるミシユキン公爵の事はもうすつかり忘れ盡してゐるらしかつた。若し彼が今以前の知人の所へ姿を現はしたなら、まるで天から降つたやうに思はれたであらう。

或日、ガーニヤの弟コーリヤは、アグラーヤに一通の紙片を渡してをいて、後をも見ずに出ていつた。此コーリヤ、イヂルギンはやはり以前の生活をつゞけ、中學校に通ひ、親友イツポリトを訪ねて日を送つてゐた。イヂルギンの家では下宿人は忽ち姿を消してしまひ、イヂルギン將軍

はふとした事から債務者監獄へ入れられてゐた。將軍は全く寢耳に水であつた。彼は知音の友たる大佐夫人に渡した額面二千ルーブリの證文によつて告發されたのである。一時逃れに借金證文や手形などに署名するのが彼の習慣であつたが、彼はそんなものに効力があり得ようとは夢にも思つてゐなかつた。だから彼は監獄の一室で新しい友人と並んで坐り乍ら慨嘆してよくかう叫ぶのであつた。「これからは他人に對して高潔なる信頼を示すのは、い〻加減にしなくちやならん！」

コーリヤが持つてきた手紙はアグラーヤの手で開かれた。

『嘗てあなたはわたしを信頼して下さいました。併し多分あなたはもうすつかり忘れてお了ひになつたかも知れません。どうしてわたしがあなたに手紙を差上げるなど〻いふ事になつたのかわたしは存じません。けれどもあなたに、是非共あなたにわたしの存在を想ひ出して頂きたいといふ抑へ難い希望がわたしの心に湧き起つたのです。幾度わたしはあなた方お三方がわたしにとつて必要であると思つたか知れません。けれどもわたしはお三方のうちであなた許りを見ました。あなたはわたしにとつて必要なんです。わたしは自分の事について書く事もありません、話す事もありません。それに又さうしたいとも思ひません。只あなたが幸福でいらつしやる事を切に望みます。幸福でいらつしやいますか？　たゞこれ丈の事が申し上げたかつたのです。』

あなたの兄なるミシュキン

此の短い、可成り無意味な手紙を讀んで、アグラーヤは不意に眞赤になつて考へ込んだ。彼女のこの思想の流れを傳へるのは吾人にとつて困難な事である。やがて彼女は「誰かに見せようかしら」と考へたが、何だか羞しいやうな氣がした。で、到頭奇妙な嘲るやうな微笑を含んで手紙を自分の卓の上に抛り出した。併し翌日になると彼女は再びそれをば引出して、固い背皮に裝幀された厚い本の間へ挾んだ。

けれども彼女が今一度此手紙を讀み直した時にふとかういふ事が頭に浮んだ。一體あの小僧つ子が、本當に公爵の通信員に――恐らく此土地に於ける唯一つの通信員に――擇まれたのだらうか？　思ひきり馬鹿にしたやうな顏付をしながら、彼女はコーリヤを捕へて此事を詰問した。コーリヤは公爵からの手紙を出して見せた。

『可愛いコーリヤさん、お願ひですからこの中に同封した封書をアグラーヤ、イヴノーヴナに渡して下さい。御健在を。』

君を愛する公爵レフ、ミシュキン

「何んぼ何んでもこんな小僧つ子を信用するなんて滑稽だわ。」とアグラーヤは忌々しげにかう呟

いて彼の傍を通り抜けて行つて了つた。コーリヤは恐ろしく腹を立てた。

(二) 情慾の鬼

六月初旬の事であつた。ペテルブルグには珍らしくもう一週間ばかり美しい日和が續いてゐた。エパンチーン家ではハーブロフスクに贅澤な別莊を持つてゐたが、リザヱータ夫人が俄かに騷ぎ出して、二日足らず紛擾した擧句そこへ引つ越して行つた。

エパンチーン家の人々が越して行つた二日目か三日目にモスコー發の一番列車でミシュキン公爵がペテルブルグへやつてきた。誰も彼を停車場に出迎へる者は無かつたのに、公爵が車を出る時、誰れかの怪しい燃えるやうな二つの目が、群集の中で不意にぎよろりと閃いたやうに思はれた。公爵が注意して凝視めた時には、そこにはもう何物もなかつた。勿論只ちらりと一閃したのみであつたが、その目が恐ろしく不快な印象を止めた。それでなくてさへ公爵は、沈み込んで悒ぎ勝ちで何やら心配らしい樣子をして居たのであつた。

公爵がペテルブルグに着いた日の午前十時過ぎ、彼は急にふと或一軒の家が訪問したくて堪らなかつた。彼はその日、停車場に着くとすぐレーベチェフの家を訪ねたのであつた。そこで彼はラゴージンの噂を聞き、ナスターシャが結婚の間際に彼を振捨てた事を聞いたのである。

「本當です。本當です。丁度式の間際になつてゞがす。此方は今一分二分と數へて待つてゐるのに、あの女は眞直ぐにわたしの所をさしてペテルブルグへやつてきました。『助けて頂戴、隱まつて頂戴、そして公爵にも云はないで頂戴。』とかうなんです。公爵、あの方はラゴージンよりももつとあなたを恐れてゐなさりますよ。」とレーベチェフは說明した。

公爵は初めエパンチーン家を訪問しようと思つてゐた。しかし、レーベチェフの家を出るや否や、急に或一軒の家が訪問したくなつた。それはラゴージンの家である。

全體がどす黑い綠色に塗られて一切裝飾といふものゝない、大きなそして暗鬱な感じのする一軒の三階建の家がサドーヴヤ街とガローホヴヤ街との四辻近くにあつた。公爵は遠くからそれを見た時に既に一種の陰暗な感じを受けた。近寄つてみると公爵の推察通り門には「名譽市民ラゴージン先祖代々の家」とした表札が下つてゐた。

波立つ胸を押靜めつゝ公爵は硝子戸を開けた。戸は騷々しい音を立てて彼の後ろでぱたりと閉つた。彼は正面の階段を二階へ指して登り始めた。暗い石の階段は粗雜な組立てゞ、其兩側の壁は赤いペンキで塗つてある。ラゴージンが母と弟と共に此陰氣な家の二階全體を棲家としてゐる事は彼も聞いてゐた。彼は小さな檻のやうな室を幾つか通り抜けた。何遍も二段か三段の階段を上つたり下りたりして漸くとある室の戸を叩いた。戸を開いたのは主人公のパルフェンであつた。

公爵の姿が目に入ると、彼は眞蒼になつて棒のやうにそこへ突つ立つた。暫くの間吃驚したやうに視線をぢつと一所に据ゑ、口を歪め何かしら極度の疑惑に陷つたかのやうな薄笑ひを浮べ乍ら石彫の像の如くに突つ立つた。その様子は全るで公爵が自分を訪問しようなどとは全然あり得べからざる奇蹟的の事のやうに思はれたらしかつた。公爵も何かこんな風の事を豫期してはゐたが、それでも餘りの事に面喰つた程である。

「パルフェン、僕何んだか悪い所へ來合はせた様だね、何なら今度にしてもいゝよ。」と公爵は到頭もぢ〳〵し乍ら云つた。

「いやいゝんだ。いゝ折なんだ。」とパルフェンはやつと我れに返つて云つた。「さあどうぞ。這入んな！」

彼等はお互に打解けた口を利き合つた。モスコーでは一緒に落合つて暫く話し込むやうな機會がしよつちうあつた。そして稀には互の胸の中に忘れる事の出來ない程の感銘を殘した瞬間も時時あつた。併し今はもう三ヶ月以上も打絶えて會はずに居た。

ラゴージンの顏からは激しい神經の痙攣と蒼白い色とが何時迄も去らなかつた。彼の並々ならぬ惑亂の狀態は未だ依然として續いてゐた。彼が公爵を肘椅子に導き卓に對して座につかせた時公爵はふと何心なく後方を見返つたが、警へようもなく奇怪な重苦しい視線に射すくめられて立

止まつた。何かしら或物が彼の胸を突き刺した様に思はれたが、それと同時にまた或一つの別のものを思ひ出した。それは先刻停車場で會つた二つのぎよろりとした目の光であつた。けれども その時ラゴージンは公爵に向つて云つた。

「何だつてお前さう穴の明く程人の顏を見るんだ。まあ腰を掛けなよ。」

「パルフェン」と公爵は云つた。「君隱さずに打明けて呉れ給へ。君は僕が今日ペテルブルグへ來るつて事を前から知つてたんかい。」

「お前がやつてくるだらうつて事は俺も前から考へてゐたよ。見な、當つたぢやないか。」とラゴージンは毒々しく笑ひ乍ら附足した。「併しお前が今日來るなんて事は、どうして俺が知るものか！」

この答の中に含まれた鋭い突發的な、そのくせ妙に苛々した疑問の調子は尙一層公爵を驚ろかせた。

「確かに今日と知つてたにしたからつて何もそんなにぷり〳〵怒る事はないぢやないか。」と公爵はもぢ〳〵し乍ら云つた。

「ぢやお前はなんだつてあんな事を訊いたんだ。」

「先刻汽車から降りた時に見た二つの目が、今君が僕を後ろから見てゐた眼附にそつくりその儘

なんだもの。」

「へえ、誰の眼だつたんだらう。」

「尤も人込みの中だから只そんな氣がしたばかりかも知れないよ。僕は此頃よくそんな事があるんだ。ねえパルフェン、僕は何だかまた五年前よく發作の起つた時と同じやうな氣持になつてゆくやうだよ。」

「ふん、さうかなあ、ぢやそんな氣がしたゞけかも知れないぜ。おれは知らんよ。」とパルフェンは呟いた。

公爵は此家は恐ろしく沈鬱だと思つた。この家では何もかもみんな薄暗い隅の方へ身をひそめてゐるやうなところがあると感じた。そしてパルフェンに云つた。

「結婚の式も此處で擧る積りなんかね。」

「こ、こゝだ。」思ひも寄らぬ此問ひにぴりゝと身を震はせてラゴージンは答へた。

「もうすぐなの？」

「それアお前だつて知つてるんぢやないか。おれの考へで決るこつちやあるまいし。」ラゴージンは目を光らせ、公爵に飛び掛るやうな口調でさう答へた。公爵は云つた。

「パルフェン、僕は君の敵ぢやないんだから、何事も君の邪魔をしようといふ氣は少しもないんだよ。これは以前にも一度、殆ど之と同じやうな場合に云つた事だが、もう一度繰返して斷言しておく。モスコーで君の結婚が運んでた時にも、僕は邪魔なぞしなかつた。これは君も知つてるだらう。最初あの女は結婚の間際になつて僕の所へ投じてきて助けてくれと云つた。僕はあの女の云つた通りをその儘繰返してるんだからその積りで聞いてゐてくれ給へ。その後又僕の所からも逃げ出していつた。それを君が探し出して又結婚の運びを附けたんだね。所で話で聞いてみると、あの女は又々君の所から逃げ出して此處へ來たさうぢやないか。これは全くなんだね？　實はレーベチェフが知らしてくれたんでそれで出掛けて來たのさ。僕はあの女を說いて健康回復の爲めに外國へでも行かせようと思つたんだ。あの女は精神も身體も、殊に腦がひどく錯亂してゐるから僕の考へでは餘程深切に介抱してやる人が必要なんだよ。僕は自分であの人を外國へ連れてゆかうなんて氣は少しもない。事僕からは少しも口を入れなくて事を運びたいと思つてゐる。全く僕は君に本當の事を云つてるんだよ。若しその後君の結婚談がうまく折合つたといふのが本當なんなら僕は決してあの女の前へ出やしない。君の所へもこれつきりやつてきもすまい。僕は君に對していつも明けつぴろげなんだから、君を騙したりなんぞしやしない事は君も知つてくれてるだらう。此事件に就いて考へてゐることを君に隱し立てなどしやしない。だから僕はいつも云ふぢやないか。君と一緒になるのは取りも直さずあの女の身の破滅だつて、君の方から云つて

も矢張り身の破滅だ。——若し君達二人が別れ話になつたら僕は大いに滿足する。併し君方の話に邪魔を入れようだの毀してやらうなどゝいふそんな卑屈な事は決してしない。だから安心して僕を疑るのは止してくれ給へ。それに君だつて知つてるぢやないか。一體僕が本當に君の競爭者になつた事があるかね。あの女が僕の所へ逃げ出して來た時だつてさ。おや君は笑つたね。知つてるよ何を笑つたか。それに僕達はあの時別々な町へ別れて暮したことも君は確實に知つてる筈だ。以前も云つた事だが、僕はあの女を『戀で愛してるのぢやなくて、憐憫で愛し』てるんだよ。僕は此定義がぴたりと合つてゐると思ふ。君はあの時この僕の言葉がよく分つたと云つたらう、ねえ分つたんだらう。あー何んて憎らしさうな眼附をして僕を睨めるんだらう。僕は君を安心させに來たんだよ。君も僕にとつて大切な人だからね。僕は君が大好きなんだよ。パルフェン。がもう出掛けよう。そしてもうこれからは決してやつて來ないよ。失敬。」

公爵は立上つた。

「もつと一緒にゐてくんな。」とラゴージンは席を立たずに、右手に頬杖をついたまゝ小さな聲で云つた。「もう長くお前に會はなかつたもんなあ。」

公爵は腰を下した。又二人とも暫く默つてゐた。

「俺はな、お前が目の前からゐなくなるとすぐお前が憎くて堪らなくなるんだ。お前に分れてから三ケ月俺はのべつにお前の事で腹を立てた。ところが今十五分も一緒にゐないうちに腹の蟲が納つて了つた。そして元々通りお前が可愛くなつちまつた。もつとゐてくんな。」

「僕が君の前にゐると、君は僕を信じてくれるが、僕がゐなくなるとすぐ信じるのを止して疑り出すんだね。君はお父さん似なんだね。」と親し氣にほゝ笑みつゝ自分の感情を隱すやうにして公爵は云つた。

「俺はお前と話してるとお前の聲を信じたくなるんだ。それあ俺だつてお前と俺を同じ樣に見る譯に行かねえつて事は萬々承知してるんだけれど……」

「何だつてそんな事を云ふんだい。又癇癪が起つてきたね。」と公爵はラゴージンの容子に驚ろかされてから云つた。

「何お前、誰も我々の考へなんか聞いてゐやしないんだから、何んと云つたつて構やしねえ。一切我々關係なしで先方が決めつちまふんだからね。そこで二人があの女に惚れるんだつて全るでやり口が別だらう。つまり何事につけても違ひがあるんだ。」ラゴージンは一寸言葉を切つて更に低い聲で語り續けた。「例へばお前は可愛相だから好きだと云ふが、俺にやそんなものはこれつきりもない。それにあの女は俺を憎み切つてらあ。俺は毎晩あの女の夢を見る。いつもあの女が他人に向いて俺の事を笑つてるやうな氣がするんだ。又實際さうなんだからな。おれと結婚の約束

をし乍ら俺の事なんざあ、すつかり忘れて了つてるんだからなあ。俺はもうどうもあの女の所へ思ひ切つて行く元氣がなくなつちまつたんだ。『何用でいらしたの』なんて訊かれると思ふとな。全くあの女にあ隨分赤恥をかゝされたものなあ……。」

「恥をかゝされたつて君はまあ何を……。」

「知らんふりなんかしてるぜ。だつてあれは式の間際になつてお前と一緒に逃げ出したつて事はたつた今お前が云つた許りぢやねえか。」

「併し君自身だつて本當にはしないだらう。」

「だがあの女はモスコーで士官のゼムチュージニコフと一緒になつて俺に恥をかゝせたぢやねえか。いや分つてる。恥をかゝせたんだ。而も自分の方から結婚式の日を決めたすぐ後でよ。」

「そんな事があるもんかね！」と公爵は叫んだ。

「いや確に分つてる。」とラゴージンは信じ切つたやうに云つた。「何かね、そんな女ぢやないとでも云ふのかい。さうだらう、お前と一緒にゐる時にはあれもそんな女ぢやなからうて。所が俺に對しては『そんな女』なんだ。だつて本當にさうなんだからなあ。あれは俺を人間の屑のやうに思つてる。ケルレル、あの拳闘の先生の一件だつて只俺を馬鹿にしたいばかりに拵へた事なんだ。俺はちやんと知つてる。まあモスコーであの女が俺にどんな事を仕向けたか、お前はまだよく知

らないんだらう。それに金、金をどれ丈け注ぎ込んだか――。」

「それだのに、君は又どうして結婚しようといふのだ。」先きでどんな事になるやらと公爵は恐怖に襲はれてかう尋ねた。ラゴージンは重々しく物凄い目を公爵に向けたが何とも答へなかつた。暫くしてラゴージンは言葉を續けた。それによるとナスターシャはレーベチェフの所へ向けて逃げ出してきて今ペテルブルグ市ペテルブルスカスにゐるといふのである。しかしラゴージンは毎日彼女に會ひにゆくのにいつも氣後れがして困るといふのである。

「俺はもう今日で五日といふもの、あれの所へ行きあしない。いつも追ひ立てられやあしないかと思つてびく〳〵してるんだ。あれはいつもさういふ、わたしはまだ今の處自分の心の主人だから、若しその氣にさへなれば何時だつてお前さんを追つ拂つてわたしは一人で外國へ行きますつてよ。(『この外國へ行くつてのはあれがおれに向つてさう云つたんだよ』と彼は何だか一種特別な眼附で公爵を見詰め乍ら註をでも入れるやうに云つた) さうかと思へば又笑つてばかり居る事がある。何故か知らないがあの女は俺を見ると可笑しくて堪らないらしいんだ。かと思ふと又顔を顰めて眉を八の字にして一と言も口を利かねえ。これが俺にや恐ろしいんだ。そして何時結婚してくれるかつてことに就いちや曖にも出さねえ。ほんとに女の所へ出掛けてゆくのを恐れる花婿が何處の世界にあるんだ。かうして坐つてゐても我慢し切れなくなると、そつとこつそりあれ

の家の前を行つたり來たりするか、でなけりや何處か隅の方に隠れてる。ふつと氣が付いてみると、大方夜明け頃まで門の傍で見張りしてる事があるんだ。その時ちらと目に這入つた物があるんで上の方を振向いてみると、どうだらう、あの女が窓から覗いてるぢやねえか、そして『若しわたしがお前さんを騙してるつて事が分つたら、一體わたしをどうする積り?』つて訊くから、俺は『そりや自分で分つてるだらう』つて云つてやつた。」

「分つてるつて何を?」

「何んで俺がそんな事知るもんか。」とラゴージンが毒々しく笑つた。「俺はあの頃モスコーで散々探りを入れてみたが、どうも男らしい者をあげる事が出來なかつた。一度あの女を押へて訊いた事があるんだ。『お前は今に俺と結婚して堅氣な家へ這入らうといふのに、今のお前の仕打は何だ。本當に仕様のない奴だ!』つて。」

「君そんな事をあの人に云つたのかい?」

「云つたよ。」

「で?」

「ところがあれの云ふに『わたし今お前さんをボーイにだつて使ひたくない、ましてお前さんの女房になるなんて。』そこで俺は『生意氣な事を云ふな、俺は此處から出て行きあしねえ。成り行く果は分つてるんだ。』『わたしは今すぐケルレルを呼んでお前さんを門の外へ抛り出させるから』とぬかしやあがる。その時俺はあいつに飛び掛つて紫膨れになる程ぶんなぐつてやつた!」

「そんな事があつていゝものか!」と公爵が叫んだ。

「ところがあつたのさ。」と靜かな調子ではあるが眼を光らせ乍らラゴージンが云つた。

「それから丁度二日一晩寢もせねば食べも飲みもせずに、部屋から一歩も出ずにあの女の前に膝をついて『若し俺を許してくれなきあ死んで了ふ、出てなんか行くものか。無理にでも引摺り出させようとすりや、身を投げつちまふ。俺はお前がゐなくちや生きてる甲斐がない。てな事を云つたんだ。あれはその日一日は全るで狂人のやうだつた。泣いてゐるかと思ふと。小刀で俺を殺さうとしたり、惡口をついたりするんだ。それからケルレル、ゼムチュージニコフなんて連中を呼んで、俺の方に指差し乍ら面の皮をひん剝くやうな事を云ふぢやねえか。『皆さんこれから一緒にそろつて芝居へ行きませう。此人は外へ出たくないつて云ふから此處へ打つ捨つて置きませう。わたしや此人の爲めに縛られるわけはないんだから。パルフェンさん、わたしは居なくつてもお茶は出させますよ。今日は屹度お腹が空いたでせう。』ところで芝居からはあの女一人で歸つてきた。『お前さん、お茶を飲んで?』『誰が呑むもんか。』『それは豪いと賞めて上げたいが、お前さんにはちつとも似合はなくつてよ。』そして一人部屋の戸を閉めて寢たもんだ。翌朝出て來て笑ひ

午ら『お前さん、まあ氣でも違つたの。だつてそんなにしてたら饑ゑ死んぢまふぢやないの？』で俺は『勘辨してくんな』といふと『勘辨するのは厭、もうお前さんの女房にやならないつて云つたぢやないか。だが一體お前さんは此肘椅子に坐つたまんま夜つぴてまんじりともしなかつたの？』『あゝ寢なかつた！』『何て賢こい人だらう。お茶を飲んで御飯を食べるのは嫌？』『嫌だつていつたぢやないか――ね、勘辨しておくれよ。』それから又あの女は怒つたり叫んだりしたが、やがて突然『ベルフェン、わたしはお前さんと一緒になります。併し何もお前さんが恐いといふわけでぢやない。只どうしてみたつてわたしなんぞどうせ傷物だもの、どこへ行つたつていゝ事なんてある筈がありやしない。さ、お坐んなさい。今御飯を上げるわ。お前さんと一緒になるからにや、わたしはお前さんの貞節な女房ですよ。もう疑つたり心配しなくつてもいゝわ。』とかういふんだ。さういふ譯で即座に式の日を決めたんだ。ところがほんの一週間程の間に又俺んところから逃げ出して、此地に居るレーベチェフの所へやつてきたんだ。そして此地まで追つてきた俺に云ふぢやねえか。『わたしはどうしてもお前さんが嫌やだといふのぢやありません。たゞわたしはまだ自由の身體だから、若しお前さんがわたしを望みなら、わたしの滿足する迄待つて貰はなくちやなりません。』これが現在の俺の妾なんだ。なあ、公爵、お前は一體これを何と考へる。」

「君は自分で何と考へてるの？」と沈んだ眼附でラゴージンの顏を眺めつゝ公爵は問ひ返した。

「俺が一體何を考へると云ふんだ。」とラゴージンは叫んだが、ふと淋しさに襲はれて口を噤んだ。公爵は再び立上つて出て行きさうにした。

「僕は何と云つても君の邪魔はしないよ。」と彼は自分の心の中に祕めた考へをもう一度肯定するやうに小さな聲で云つた。

「おい公爵、たつた一つお前に云ひたい事がある。」と不意にその時、ラゴージンは眼をぎら〳〵させて元氣付いて叫んだ。「何だつてお前はさう俺に讓らう〳〵とするんだ。分らねえなあ。それとももうすつかり戀が冷めつちまつたと云ふか？　だつて以前はあれの事で鬱してばかりゐたぢやねえか。俺はちやんと知つてるよ。それに今度も何だつて氣狂ひのやうにこのペテルブルグへ駈けつけたんだ。憐憫とやらの爲めかね？」

「君は僕が君を騙ましてると思ふのかい？」

「いゝや、俺はお前を信じてゐる。だが何が何だか一切譯が分らん。まあ何よりも一番確かな事は、お前の『憐憫』とやらの方が俺の戀よりも强いつて事だ。」

何かしら毒々しい、そして今にも外へ溢れ出しさうな或物がラゴージンの顏に燃え立つてゐた。

「だけど君の戀は憎みと少しも區別が附かないんだものね。」と公爵はほゝ笑んだ。「若しその戀が

失くなつたら、もつと〳〵恐ろしい事が起るに相違ない。君、パルフェン、僕はかう云ひ切つて置く。」

「ぢや何かね、俺が斬り附けでもするつてんかね？」

公爵は慄へ上つた。

「君は現在の戀の爲めに、現在受けてゐる苦しみの爲めに、あの女を非常に憎み出すに相違ない。あの女がまたしても君と結婚しようといふ氣になつたのが、僕何よりも不思議で堪らない。昨日始めて聞いた時には殆ど信ずる事が出來なかつた。そして實に重苦しい氣持になつた。一體ほんたう云つてあの女は今君から何を望んでゐるのだらう。金か？　そんな馬鹿げた事はない。なら良人か？　そんなら君のほかにいくらでも見附かりさうなものだ。どんな男でもあの女にとつては君よりいゝに違ひない。何故つて君はもう直ぐに殺して了ふからさ。多分あの女も今はもう立派にそれを覺つて了つてるんだらう。勿論世間には變つた女もあつて、こんな風の戀を求めてゐるさうだが……。」

「おやお前は又俺の親父の畫を見て、にやりと笑つたやうだな。」とラゴージンが尋ねた。實際公爵はラゴージンの親父の畫が壁に懸つてゐるのを先刻からぢつと眺めてゐた。そして今ラゴージン自身の事を思ふとその間に實に似通つた所を見出したので笑ひたくなつた。

「何を僕が笑つたかつて。僕は只かう思つたのさ。若し此の事件が、此の君の戀が起らなかつたら、屹度君は此親父さんと寸分違はぬ人になつてたらうつて思つたからさ。」

「たんと冷やかすがいゝ。だがあの女もつい近頃あの畫を見た時にそつくりその儘の事を云つたつけ。不思議だなあ、お前達二人は何から何迄同じやうな……。」

「ぢやあの女は君の所へ來た事があるのか。」と好奇心にかられつゝ公爵は訊ねた。

「有る。此畫を長い間眺めて親父の事もいろ〳〵尋ねたよ。それからお終ひにはにや〳〵笑ひ乍らかう云つたんだ。『お前さんも丁度これと同じ人に成るべきだつたのよ、パルフェンさん。お前さんは強い慾情を持つてゐるから、若しお前さんに智慧といふものがなかつたら、シベリヤへ懲役にでもやられないかねないわ。けれどもお前さんには大きな智慧といふものがあるからよかつたのよ。』それから『若しお前さんが今のやうな惡戯を止めたらお前さんのやうな教育のない人は、屹度お金を貯めに掛るだらうねえ。』そして終ひには少し俺に本を讀めと勸めたよ。『わたしお前さんに最初どんな本を讀んだらいゝか目錄のやうなものを拵へて上げてよ。欲しくつて、いや？』おれは吃驚してしまつた。あれがこんな口の利き方をしたのは全く初めてだつたからなあ。俺はその時始めて人心地がついてほつと安心したよ。」

「それは本當に結構だ、パルフェン」と公爵は眞心を込めてかう云つた。「實に結構だ。事によつ

たら神様が君達二人の間を丸く納めて下さるのかも知れないよ。」

「そんな事は金輪際ありやしねえや。」とラゴージンは悲し氣に、また恐ろしい權幕で叫んだ。

「ねえパルフェン、若し君がそんなにあの女を愛してるなら、どうかしてあの女に尊敬されるやうになりたいとは思はないかえ。あの女は君の愛情を見拔いてるのは勿論だが、君にいろ〳〵な長所のある事も立派に見拔いてゐる。それはさうに違ひない。君の今云つた事は立派にそれを證明してゐる。それでなければ全く君と結婚するなんか、水の中、白刃の下に飛込むと同じだからねえ。誰が意識し乍らたゞ白刃の下に飛込むもんかね。」

にがい嘲笑が、それを聞いてゐるラゴージンの顏に表れた。

「何だつて君はそんな重苦しい顏をするの」と公爵はラゴージンの顏から重苦しい心持を感じたので云つた。

「水の中！　白刃の下！」とこつちはやつとの事で答へた。「べつ！　あの女が俺の所へ來ようつてのは、つまりその白刃が俺の後に待伏せしてるからなんだ。公爵、お前は本當に今迄の內情を些つとも氣がつかなかつたのかい？」

「僕は君の云ふ事が分らない。」

「仕方がねえなあ。」とラゴージンは思ひ切り毒々しい顏で答へた。「ちや本當に何もかも分らないのかなあ。へゝゝよくお前の事を人があれだつて云ふが……あの女は他の男に惚れてるんだよ。分つたか？　俺が今あの女に惚れてゐると同じ位に、あの女がその男に惚れてるんだよ。此男といふのはお前誰か知つてるかい？　お前なんだよ。おい、知らなかつたのかい？　おい。」

「僕？」

「お前さ。あれはあの誕生日の日からお前に惚れつちまつたんだ。しかしあれはお前と夫婦になる譯にいかねえと思つてゐる。何故といつてみな、さうすればあれはお前の顏に泥を塗つてお前の一生を臺無にしちやうぢやねえか。『わたしがどんな身分の女かつて云ふ事は分り切つてるぢやありませんか』つてあれはしよつちゆう云つてるよ。そこでお前の顏に泥を塗つたり一生を臺無にする事は出來ねえが、俺ならかまはねえ、とまあこんな風にあいつは考へてゐるんだよ。こんな事もお前矢つ張り知つておく方がいゝぜ。」

公爵は暫く默つてゐた。ラゴージンはその公爵に挑みかゝるやうにして云つた。

「公爵、なにを默つてるんだ。お前は今腹の中でかう考へてゐるんだらう。（あゝかうなつてはもはやどんな事があつてもこの男と一緒にすることは出來ん。どうしてあの女にそんな事をさせてたまるもんか）つて、おいさうだらう。そんな事はちやんと分つてらあ。」

「僕はそんな事の爲めに來たのぢやないよ。パルフェン。そんな事は考へてもゐなかつた。」

「そりやさうだらう。併したつた今確かにさうなつたのさ。へゝゝ。だがもう澤山だ。一體お前何んだつてさうおつ魂消てるんだ。一體お前はちつともそれに氣が附かねえでゐたんかい？」

「それはみんな君の嫉妬だよ、パルフエン。それはみんな病氣のせゐだよ。それはみんな君がひどく誇張して考へてゐるんだよ。」と公爵は恐ろしくわく〳〵して答へた。「君どうしたの？」

「止しなよ。」とラゴージンが云つて、素早く公爵の手から小刀を取戻した。それは公爵が先刻から何氣なく卓の上にあつたのを弄んでゐたのである。

「僕はさつきペテルブルグに這入る時から何だか蟲が知らせるやうな氣がしてゐた。」と公爵は語を次いだ。「僕は此土地であつた事をすつかり忘れて了ひたい。胸の中から削り取つて了ひたい。ぢや失敬。まあ君はどうしたんだい！」

氣の落付かぬ調子でこんな事を云ひ乍ら公爵は又しても例の小刀を取り上げようとした。彼はそれがそこにあることを何か危險と感じてゐたのである。するとラゴージンは又それを彼の手から、搖ぎ取つて卓の上へ抛り出した。それはよくある平凡な形をした小刀で、刀身は長さ三寸五分許りで幅もそれに相當してゐる。ラゴージンは、自分が公爵から二度迄も此小刀を取上げたのを注意深く見てゐる公爵を感じ毒々しい怒の色を現してそれをひつ掴み、本の間へ挾んでポンと他の卓へ抛り出した。

「君はあれで頁で切るのかね。」

公爵はなんとなくぼんやりして、未だ深い物思ひに沈みながら訊ねた。

「うん、頁を……。」

「でもこれは庭作りの小刀ぢやないか。」

「うん、庭作りのだ。だが庭作りの小刀で頁を切つちや惡いつて法があるかい？」

「それはあれは、眞新しいぜ。」

「新しけりやどうたと云ふんだ。一體俺に今新しい小刀を買ふ金がねえとでもいふのか。」とラゴージンは何故か恐しく激昂して苛々し乍ら叫んだ。

公爵はびくりとしてぢつとラゴージンを見詰めた。やがて不意にすつかり我れに歸つたかの如く笑ひ出した。

「一體まあ二人ともどうしたんだらうねえ。勘辨して呉れ給へ。僕は頭が重くなると今のやうな事を云つたり爲たりするんだよ。それにあの病氣が……僕はだん〳〵あんな風にぼんやりして、馬鹿らしい事を云ふやうになつたよ。全く僕あんな事を訊かうなんて氣はなかつたんだよ。何を云つたか覺えてゐない位なんだもの。ぢやさやうなら……。」

「そつちぢやないよ。」とラゴージンが云つた。

「忘れちやつた。」

「こつちだ。こつちだ。おれが一緒についていつてやらう。」

(三) 聖なる煌き

ミシユキン公爵とラゴージンとは、先刻公爵が通つてきたと同じ室々を抜けて行つた。ラゴージンが少し先きに立ち、公爵がその後に續いた。やがて二人は廣いホールに這入つた。此處は四方の壁に幾つかの繪が懸つてゐたが、皆大僧正の肖像でなければ風景畫で、それらは何を畫いたのか分らぬ位に古びてゐた。次の間に通ずるドアーの上に奇妙な形をした繪が一枚掛つてゐた。長さは三尺近くもあるのに高さはせい〳〵七寸位しかない。それにはたづた今十字架から下ろされたばかりのキリストの像が畫いてあつた。公爵はちらと見上げて何やら思ひ出したかのやうであつたが、別に立止らうともせずにそのまゝドアーを潜つて向うへ行かうとした。彼は何んとなく氣分が重いので早く此家を出て了ひたかつた。所がラゴージンは不意に繪の前に立止まつた。

「ほら、こゝにある繪はみんな一ルーブリか二ルーブリで親爺が競賣で買つてきたものなんだ。親爺は畫が大好きだつた。此繪を或る鑑定家に見て貰つたら皆ガラクタだと云つたが、たつた一枚このドアーの上に懸つてゐる繪さ、こいつも矢つ張り二ルーブリで買つたもんだが、こいつばかりはガラクタでないと云つたさうだ。未だ親爺が生きてゐる時分から此繪を三百五十ルーブリで讓つて呉れといふ者もあつたが、或商人は更に四百ルーブリまで競り上げたもんだ。所がつい先週だつた。弟のセミヨーンに五百ルーブリ出すから讓つてくれと申込んだものだ。けども俺は要るからつて賣らせなかつた。」

「あゝこれはハンス、ホルバインのコッピイだね。」とやうやく繪を見分ける事の出來た公爵は云つた。「僕はそんなに豪い鑑定家ぢやないけど、立派なコッピイらしいね。この繪は一度外國で見たけれど、今だに忘れられないよ。だが……君は何んだつて……。」

ラゴージンは不意に繪を打つちやらかして以前の道を先へ進んでいつた。勿論不意に彼の樣子に現れた、怪しく苛立し氣な氣風や、その落付かぬ素振りは、幾分かこの突飛な行動の原因を說明してはゐるけれど、それにしてもラゴージンが自分で初めた會話をぷつつりと切つて了つて、そ知らぬ顏で前へ進んでゆくのが公爵には何んとなく變に思はれた。

「ねえ公爵、俺は前からお前に訊きたい事があつたんだ。お前は神樣を信ずるかどうだい?」と二三歩歩き出した時、不意にラゴージンが口を切つた。

「君は本當に變な事を訊く人だねえ。それに君の眼附つたらないぜ!」我ともなしに公爵はかう注意した。

「俺はあの繪を見てるのが大好きだ。」暫く默つてゐた後にラゴージンは又しても自分の質問を忘れて了つたかのやうに呟いた。

「あの繪を！」思ひ掛けなく心に浮んだ或考へに動かされて公爵は不意にかう叫んだ。「あの繪、いやあの繪を見てゐると、中には信仰を失くする人さへ有るかも知れないよ。」

「全く失くして了ふよ。」と思ひもよらずラゴージンが合槌を打つた。二人は出口の直ぐ傍まで來てゐた。

「何だつて？」と公爵はいきなり立止つた。「まあ君はどうしたんだらう。僕鳥渡冗談に云つた事を君はもう眞面目になつてさ！　だが僕が神樣を信ずるかなんて、どういふ積りで訊いたの？」

「なあに何でもない。一寸その俺は前から訊いてみたいと思つてたんだ。だつてお前、今時の奴等大抵信じてないぢやないか。所がどうだらう本當だらうか。ある男が醉つ拂つて俺に云つた事がある。此のロシアには外のどの國よりも神樣を信じねえ人間が多いつて。その男の云ふのによると、ロシアではさうするのが他の國よりもやさしい、その譯はロシアが一番進歩してるからだとかういふんだ。」

ラゴージンは怪しい薄笑ひを洩らした。云ふ丈けの事を云つて了ふと、彼は俄かに戸を開けて公爵の出てゆくのを待つやうに把手を握つてゐた。公爵は吃驚したがその儘外へ出た。ラゴージンはそれに續いて階段の上の小廣い所に出て後ろ手に戸を閉めた。兩人は顏と顏を突合はして立つてゐたがまるで茫然としてゐた。

「失敬」と公爵は手を差し伸べつゝ云つた。

「失敬」とラゴージンは云つて固く、とはいへ機會的にその手を握つた。

公爵は一段下りてから又振返つた。

「あの信仰の話だがねえ。」と彼は笑ひを含み乍ら云ひ出した。「かういふ事があるんだよ。先週二日ばかりの間に四人ばかり變な人に出會したよ。朝のうちは或る汽車の中Sでといふ人と近附になつて四時間ばかり話したが、この人の名前は僕も前から知つてゐたが、大變な學者なんだよ。その人が僕なんかにも同じやうな學問のある人に對するやうに話して呉れるので僕は大變嬉しかつた。しかし此人の特徴は全く無神論者なんだ。僕なんかにはどうも考へ方が分らないんだがねえ。云つて呉れる事は尤もらしいんだけれど、僕にはどうもその人の云ふ事が分らないし、また僕の云ふ事もその人には分らないらしいんだよ。それからその夕方或旅館に着いたが、そこではその前夜殺人があつたといふ噂でいつぱいだつた。それは二人の百姓が、分別盛りの男で酒の氣は少しもなく、お互にずつと前から全くの知合の仲なんだがねえ、一緒にお茶を飲んで同じ部屋で床に這入らうとした相だ。所が一人の方が黃色い南京玉の紐のついた銀の時計を持つてゐた、今一

人の男は對手が以前そんなものを持つてる事を知らなかつたらしいんだが事件の起る二日ばかり前に此奴が目に止まつたものと見える。此男は決して泥棒ぢやない。それ所か寧ろ正直な位だし暮らしに困る方でも決してない。しかし此男はもうすつかり此時計が氣に入つちまつて迷ひ込んだんだねえ、とう〳〵我慢が出來なくなつちまつた。そつと小刀を取り出して對手の男が後ろ向いた時にぢつと狙ひを定めたんだ。そして空を見上げて十字を切つて、心で『神よ、イエス・キリストの爲めに許し給へ』とかう一言云つて只一打ちに、自分の友達を羊か何かのやうに殺して了つて時計を取つちまつたさうだよ。」

ラゴージンは笑ひ崩れた。彼はまるで何かの發作に襲はれたやうに大きな聲で笑つた。

「いや俺はそんなやり口が好きだ！ 本當に何より面白い！」と彼は息の窒る程痙攣的に怒鳴つた。「一人の方は神を信じないつて云ふかと思ふと、しかも學者でなあ、一人の方は人を殺すのにもお祈りを上げる程信心が深いんだ。いや實際お前、こんな話は到底も思ひ附かうたつて出來やしねえぜ。はゝゝ」

「翌朝僕は少し町を散歩しようと思つて外へ出た。」と公爵はラゴージンの笑ひの止むのを待つて語を續けた。「ふと見ると木を鋪いた人道の上をまるでぼろ〳〵の裝をした一人の兵隊がふら〳〵と歩いてくるぢやないか。それがいきなり僕の所へやつてきて『旦那様、銀の十字架を買つておくんなさい。たつた二十カペイカでお讓りしますよ。銀ですぜ！』といふんだ。見るとその男の手の中に只つた今胸からはずした許りらしい十字架がのつてゐる。けれども一目見ただけで錫だといふ事はすぐ分る。けれども僕は早速二十カペイカ玉を一つ出してその兵隊に與れてやり、十字架は即座に自分の胸に掛けた。すると兵隊は間抜けな旦那を騙してやつて至極滿足の態で自分の十字架を賣り飛ばした金で一杯やりに出掛けていつた。僕はその時ロシアに來て樣々な印象を受けて胸が一杯だつた。以前はこのロシアの國がまるで口をきかぬスフインクスのやうな氣がして少しも分らなかつた。そこで僕はこの時考へた。このキリストを賣つた男は未だ少しく待たねばならぬ、なんとなれば醉拂つた弱々しい心の中にはどんなものが含まれてゐるか神樣がよく御存じだ。この男の此行爲でロシアを判斷する事は出來ない、さうは僕考へた。するとそれから一時間程經つて僕は乳呑子を抱へた或若い女房に會つた。その子は生れてまだ六週間位にしかならない。若い女房はその時子供が始めて笑つたのを見附けたらしいんだ。女房は道の眞中に立つて十字を切つた。『姐ぇさん、君一體どうしたの』つて訊くとその女房の云ふには『いえまああなた始めて赤ん坊の笑顔を見た時の嬉しさは、罪人が眞心込めてお禱するのを天上で御覽遊ばす神樣の嬉しさと、全く同じなんでございますよ。』

「ねえパルフエン、この思想の中にはキリスト教の全本質が一語にして盡されてゐる。而もこれ

を云つたのは無教育な一婦人なんだからねえ。全く母親といふものは……それに若しかしたらこの女があの兵隊の女房かも知れやしない。ねえパルフェン、君先刻僕に尋ねたがこれが僕の返答だ。宗教的感情の本質といふものは、如何なる論證如何なる無神論の尺度にも當嵌るものぢやない。こんなものゝ中には何か見當違ひがある。それは永久に無神論などが辷つて外れて掴む事が出來ない、また永久に人々が見當違ひな解釋を下すやうな或物なんだ。併しそれよりも大切なのは、此或物がロシア人の心情に一番多く見られるといふ事なんだ。これが僕の持論だよ。これこそ僕が我がロシアの中から持つてゆく事の出來る最も價値ある信念の一つだ。パルフェン、爲すべき事は隨分あるよ。このロシアにゐて爲すべき事は隨分あるよ、僕の云ふ事を信用して呉れ。一時僕とモスコーでよく落合つて話し込んだ頃の事を思ひ出して呉れ給へ。僕は今日あんな工合に君に會はうとは思はなかつた。併しまあ仕樣ないさ……左樣なら、失敬するよ。無事でゐて呉れ給へ。」

彼は踵を廻らして階段を下りて行つた。

「レフ、ニコラーエヴッチ」と暫くすると上からラゴージンが聲を掛けた。「お前が兵隊から買つた十字架は今そこにあるかい？」

「あー今掛けてる。」

公爵は再び立止まつた。

「ちよいと見せてくんな。」

再び奇怪なる場面が現れた。公爵は烏渡考へて上へ昇り、首に掛けたまゝはづさずに十字架を示した。

「俺に呉れねえか。」

「何だつて？　君は若しや……。」

公爵は此十字架に別れたくなかつた。

「俺が掛けたいんだ。それから俺のをはづすからお前掛けなよ。」

「取り換つこをしようてなのかい。そんならさうし給へ。僕は嬉しいよ、ぢやパルフェン、これで兄弟の誓が出來たんだよ。」

公爵は自分の錫の十字架をはづし、ラゴージンはその黄金の十字架をはづした。

「行かう」と、十字架の交換が終るとラゴージンが公爵を誘つた。彼は公爵を自分の母親の所へつれていつた。

「お母さん、」とラゴージンはその手を接吻し乍ら云つた。「此の人は俺の大仲よしで、公爵のレフニコラーエヴッチ、ミシュキンといふ人なんだ。モスコーでは一時俺の爲めに親身の兄弟のやう

に盡して呉れたんだ。俺はこの人と十字架の取つ換へつこをしたよ。ねえお母さん、此人に祝福をして呉んな、親身の親子と同じにな。いや一寸待つて、俺が巧くお母つさんの指を組合はしてやるから。」

灰色の重苦しいラゴージンの心にも、今は一道の明らかな明るい光が差したのである。彼は優しく母親の手を組み合はせてやらうとしかけた。しかし母親はそれよりもさきに自分で右手を擧げ指を三本組合はせて嚴かに公爵に十字を切つた。

「ぢや出掛よう、公爵。」とラゴージンは云つた。「俺がお前を連れてきたのは唯これだけの用なんだよ。」

二人が再び階段の所へ出た時に彼は云ひ足した。

「實はお袋は人の云ふ事は聞こえねえんだよ。それだのにお前を祝福したところを見ると、お袋が自分で望んでしたんだよ。……ぢや左樣なら、俺もお前ももう別れていゝ時分だ。」

ラゴージンは自分の部屋へ歸るべき扉を開けた。

「でもお別れに君を一度抱かしてくれたつていゝぢやないか。をかしな人だねえ！」

パルフェンは兩手を上げたかと思ふとすぐ又下して了つた。彼はなんとなく決し兼ねたやうで公爵を見まいとするかのやうであつた。彼は公爵を抱擁したくなかつたのである。

「心配することあねえ。俺はお前の十字架を貰つた以上、決して『時計』の爲めにお前を殺したりなんかしねえ。」ラゴージンは不意に一種奇妙な笑ひ聲を立てた。

と、俄かに彼の顏は一變した。恐ろしい程顏色が蒼褪めて唇は慄へ、兩方の眼はぎら〳〵燃え出した。彼は兩手を上げて强く公爵を抱きしめ、息を切らし乍ら

「あの女はお前取るがいゝ。あれはお前のもんだ。俺はお前に讓つた。……ラゴージンを忘れないで呉んな。」

彼はやがて公爵を突き離して、後をも見ずに自分の部屋へ這入つていつた。

ミシュキン公爵はラゴージンの家を出てひとりぶら〳〵歩き乍ら、つい『夏の園』のとある木蔭のベンチまで來た。彼は不思議に頭が重くて堪らないのであつた。どうやら自分にはまたあの五年前の癲癇がやつてくるのではないかと思はれるやうな心理狀態であつた。彼は何故にこの自分の頭の重苦しさと精神の鬱陶しさがくるのか分らなかつた。しかし彼はこの公園にくるまで五時間餘りといふものは、さうした鬱陶しさに惱み乍ら街を歩いたのであつた。とある街店で彼は六十カペイカの札のついた小刀を見た。それが彼の目に亡靈の如くついて彼を惱ました。

公園はがらんとしてゐた。空氣は息苦しくて、微かに雷雨のくるのを知らせるやうな或物があ

つた。殆一種の誘惑とも云ふべき烈しい抑へ難い慾望がその時俄かに彼を動かした。彼は公園のベンチから立上つて直ぐにペテルブルグスカヤに向けて歩き出した。ナスターシャの姿が彼の目に浮び上つた。そして一體彼女は人に情慾を起こさせるやうな顔をしてゐるであらうかと彼は考へた。彼にはそれは人々の心に同情と憐憫を起こさせねば止まぬものゝやうに思はれる。その顔はそれを見る人の心を鷲掴みにするやうな苦しみを表してゐる、ラゴージン自身も、彼は彼女に對して憐憫などは感じないと云ひ乍ら、彼女の言葉に從つて讀書を初めようとしてゐるではないか、これは一體『慈れみ』の始まりではないだらうか。彼女に對する彼の關係を自覺し始めたからではないだらうか。……

ナスターシャの家へ公爵が行つた時、ナスターシャは留守であつた。彼女はその時、ハーブロフスクなる或友達の家へ行つてゐるとの事だつた。公爵は自分の名を告げておいてその家を出ようとした。

と、その時、彼は再び色蒼褪め唇をぶる〳〵慄はせた。二つの焔のやうに燃えた目が往來の向うがはから公爵を眺めてゐた。それを見た瞬間公爵は、先刻からのあの自分の何故とも知れぬ精神の重苦しさの原因が分つたやうな氣がした。しかしそれは一體どう分つたといふのであるか。今朝公爵が停車場でちらと見たやうに思つた目もこの目であつた。また先刻ラゴージンの家で椅

子につく前に自分の後ろで光つた目もこの目であつた。この目は公爵の精神の上を蒼蠅の如くつき廻つて彼を重苦しく憂鬱にするのであつた。

瞬間、公爵は向う側に腕組みして立つてゐるラゴージンと目を合はせた。しかし、公爵は自ら知らぬ振をして行き過ぎていつた。そして自分の宿に急いだ。

只でさへ暗い宿の門は此時非常に暗かつた。じり〳〵と蔽ひ掛つて雷雨を知らせる黑雲は、夕べの光を呑み盡して一天に流れ廣がつた。彼が丁度門のすぐ這入り口を潜らうとした時、ふと門のずつと奥の方の暗がりに一人の男が立つてゐるのに氣づいた。此男は何物かを待受けてゐるかのやうに見えたが、公爵がそれを見た瞬間すつと姿を隱くした。公爵は判然りとそれを見分ける事が出來なかつたが、それがラゴージンに相違ない事は素早く見分けたやうに思つた。公爵は彼の後を追つて階段を駈け上つた。

公爵が三階の廊下へ駈け上らうとした時、廊下の隅の風穴に男が隱れてゐた。一瞬間公爵は何故か急にそこを通り過ぎたくなつて了つた。しかし彼は又思ひ返へして振返つた。

先刻ナスターシャの家の前で、往來に立つてゐた二つの燃えるやうな目がそこに立つてゐた。一秒間二人は向ひ合つて立つた。公爵は相手の肩に手をかけて、明りに近い階段の方へ捩ぢ向けた。もつとはつきりその男の顏が見たかつたからである。

ラゴージンの眼はぎら〳〵と輝き、物狂はしい薄笑にその顏が歪んで見えた。と右手が上つて何やらその中できらりと光つた。公爵はその手を止めようともしなかつた。彼は只自分が

「パルフエン、僕ア本當だと思へない！」

と、叫んだらしいのを覺えてゐるばかりであつた。それに續いて何かしら或物が彼の眼前に展開した。異常な內部の光が彼の魂を照らしたのである。かうした瞬間が恐らく半秒位も續いたであらう。けれども彼は自分の胸の底から自づと迸り出た悲しい悲鳴の最初の響を意識的に判然と覺えてゐる。それはどんな力を以つてしても止める事の出來ないやうな叫びであつた。つゞいて瞬間に意識は消えて、眞の暗闇が襲うたのである。それはもう以前から絕えてなかつた癲癇の發作が起つたのであつた。清純至極なミシュキン公爵の心は今やもうこの人間の恐ろしい心の惡魔の前に茫然自失して了つたのであつた。

ラゴージンは發作といふ事に思ひ當る暇もなく、公爵がよろ〳〵と後退りするや、不意に仰向けに倒れて、ぐわんと頭を石の段に打當て乍ら急轉直下梯子を轉がり落ちるのを見ると驀地らに下へ駈け下りて、倒れてゐる公爵を避けて通り、夢中で宿屋を走り出たのである。

間もなく、五分とは經ないうちに人々は公爵を見付け出して群をなした。頭の邊に池をなして流れてゐる血が人々の疑惑を生んだ。しかしすぐまた癲癇といふ事に氣づくと、人々の疑ひは消

えて、此事件は何等の紛擾もなく都合よく解決された。公爵は手當を受けてからすぐ正氣付いた。その頃噂を聞いてコーリヤがやつてきた。彼はそれが公爵だと知ると、急いで馬車に乘せて、レーベチェフの家に運んだ。その翌々日、一同はもうハーブロフスクなるレーベチェフの別莊に移つていつた。その頃ハーブロフスクには、エパンチーン將軍一家が行つてゐた。ナスターシヤ、フイリツポヴナもそこの或友達の家に來てゐる事は、讀者も既に知つてゐるであらう。

(四) 遺產事件

レーベチェフの別莊に公爵が着いたのはもう夕景の頃であつた。この三日間に公爵は自分の周圍に近寄つてくる人總てを嬉んだ。コーリヤはつきゝりであつた。イヂルギン將軍も大抵はレーベチェフの家にきてゐた。公爵の着いた日、ガーニヤが訪ねてきたが、すつかり面變りがして痩せて了つたので、公爵は一寸見それた位であつた。同じくハーブロフスクへ保養に來てゐるヴーリヤとプチーツインも姿を見せた。皆はもう友達のやうに口をきいてゐた。コーリヤが往來から飛込んできてお客が來た事を告げた。それはエパンチーン家のリザヒエータ夫人と三人の令孃とであつた。そこへレーベチェフの娘のヒーラが赤ん坊を抱いて出てきた。程なくイヴン將軍が一人の青年をつれて這入つてきた。この青年は年の頃二十八歲位、背の高いすらりとした美しい怜悧

さうな顔立の男で、その大きな黒い眼の表情は機智と冷笑に輝いてゐた。公爵は好奇心を持つて眺めてゐたが、これがエヴゲーニイに違ひないと思つた。唯彼は其文官の服裝に奇異の感じを抱かされた。エヴゲーニイが武官だといふ事は早くから聞いてゐた。しかし、これはやはりエヴゲーニイであつた。彼が武官の服裝を着けないで文官の服裝をつけてゐたのは、後にいろ〳〵の噂を立てる種であつた。エヴゲーニイは、エパンチーン家の人々から厚く待遇されてゐる。

その夜は一同が公爵のゐる露臺に集まつて賑やかな談笑のうちに過ごされた。ふとした事からコーリヤがアグラーヤを揶揄し始めた。それは嘗つてアグラーヤが世の中に『貧しき騎手』程よい者はないと云つて、姉のアヂエライーダにその肖像と書いて呉れと賴んだ事が原因してゐた。『貧しき騎手』の『清き美』といふ言葉が度々口に出た。

「この『貧しき騎手』とは誰の事か、ドン、キホーテの事か、エヴゲーニイさんの事か或はまた此處にゐるもつと他の人か、それは分らないが……」とコーリヤは公爵の顔を見ながらアグラーヤに云つた。アグラーヤは恐ろしく怒つて顔を赧くした。察するところアグラーヤがその冷靜な傲慢な態度を支へきれずに、困惑とその困惑に對する自分の苛立ちから血相をかへて怒つたりするのは公爵の話をしかけられる時であるらしい。

それは兎に角、一同が談笑に時を過ごしてゐた時、思ひがけない客人共が公爵に面會を求めて

きた。この客人共は四人の極く若い青年であつたが、その中の一人アンチープ、ブルドーフスキーは自ら、ミシュキン公爵が嘗つて後見人として厄介を受けたパヴリーシチエフ氏の息子と稱して、若し公爵に、かの恩人に對する報恩の念があるならば、公爵が受けた遺産の幾分は當然分與さるべきだ、當然自分はそれを受ける權利があると、主張するのであつた。此事件は相當前から公爵の耳にも入つてゐたので、公爵は此方の交渉はガーニャに委せてあつた。

この客人達の中に只つた一人もう三十位になるらしい男がゐた。それは『元ラゴージンの黨』に屬してゐた退職中尉で望み手があれは十五ルーブリで拳闘の教授をするといふ男である。彼が他の連中に隨いてきたのは、單に誠實なる親友として仲間の元氣を鼓舞しようといふに過ぎないらしい。但し一旦必要が生ずれば庇護の役に當る積りなのは勿論である。他の三人の中で座頭役を勤めてゐるのはかのパヴリーシチエフの息子といふ男である。その他の二人といふのは、コーリヤの親友イッポリトと、レーベチエフの甥なる不良漢であつた。イッポリトはもう肺病が餘程進んでゐるといふ事は一見してすぐ分る。

公爵は一同を椅子につかせた。

「アンチープ、ブルドーフスキーです。」と急き込み吃り乍ら『パヴリーシチエフ氏の息子』が切り出した。

「ヴラジミール、ドクトレンコ。」とレーベチエフの甥が、まるで自分がドクトレンコである事を自慢でもするやうな口調で名乗り上げた。

「ケルレルです。」と退職中尉が口疾に云つた。

「イッポリト、チエレンチエフ。」と最後に出し抜けに甲高い聲が叫んだ。

「皆さん、僕は皆さんが此處へお出下さらうとは思ひもよりませんでした。」と公爵は口を切つた。「僕自身もつい今日の日まで病氣してたもんですから、また旧々あなた方のお話はもう一箇月も前からガヴリーラ、イヂルギンさんに委託しました。その事は當時あなた方へも通知して置いた筈です。尤も僕だつて自分であの話を避けるわけではありませんが、御覧の通りの時ですからどうぞ僕と一緒に別室へお運び願ひたいのです。決してお手間は取らせません。今こゝには僕の友人の方がゐられますから……。」

「友人の方、えゝ〳〵お幾人でも。併し失禮ですが、」と不意にレーベチエフの甥が恐ろしく高飛車に云ひ出した。失禮ですがわたしの方にも少々云ひ分がありますよ。あなたは我々を遇するに今少し鄭重であつても宜かつた様ですね。人をボーイ部屋に二時間も待たせるなんて餘りでさあね……。」

「それに勿論僕だつて……あんなのをお華族式と云ふんですかね！　それにあんな事は……つま

りあなたは將軍氣取りなんですね！　僕だつて何もあなたのボーイぢやありませんよ。それに僕だつて、僕は、僕は……」といきなりブルドーフスキーが並外れた興奮の體で云ひ出した。しかし何を云はうとするのか全るで分らない云ひ方なのであつた。

「それがお華族流といふのだ！」甲高いひゞの入つたやうな聲でイッポリトが叫んだ。

「若しこれが我輩の事だつたら」と拳闘の先生も怒鳴り出した。「そのつまり我輩が直接この事件に關係のあることだつたら、我輩がブルドーフスキーの位置に立たされたなら、我輩は身分ある紳士として……」

「皆さん、僕は皆さんのいらつした事を、只つた今知つた許りなんです。嘘ぢや有りません。」と公爵は再び云つた。

「公爵、我々はあなたの友人がどんな人であらうと決して恐れませんよ。我々にちやんと立派な權利があるんだから。」と又してもレーベチエフの甥が云つた。

かういふ風で一同は並々ならぬ不穏の態度であつた。

「公爵！」と不意にリザヴエータ夫人が呼び掛けた。「さあこれを今此處で讀んで御覧なさい。今すぐに。これはあんたに直接關係があります。」

彼女はせか〳〵と一枚の週間滑稽新聞を突き出して、とある一文を指さした。これはレーベチ

エフが、未だ客人達が這入つた許りの時、前から何んとかして御機嫌をとらうとしてゐた將軍夫人の傍へそつと横から馳せ寄つて、一言も口を利かずにポケツトから取出して夫人の眼につき付けたのである。夫人はコーリヤをして聲高に皆の面前でそれを讀ませる事にした。夫人は非常に熱狂し易い性質の人であつたから、此記事を讀んで驚きのあまり前後も考へずにコーリヤに讀ませたのである。それは次のやうな書出しで書かれてゐた。

◆勞働者と成金

▲日毎白晝に行はれる强盜の挿話。

▲進歩！　改革！　正義！　公平！

奇々怪々なる事件は所謂我が神聖なるロシアに於いて日毎に行はれつゝあり。而もそれは現代萬事改革の必要ある秋、國民的自覺の時、會社企業の盛なる時……云々。

そしてさういふ書出しで、公爵が外國で呑氣至極な生活をした後歸國して莫大な財産を遺産として引受けたが、その公爵が以前非常な厄介になつた或恩人の私生兒が、今や言語に絶した悲慘な境遇にあるのに、公爵はそれを顧みようとはしない旨を述べて、公爵を攻擊し反省を促してあるのであつた。その中には次のやうな諷刺詩も入つてゐた。

レフ（公爵の名）はシュネイデル（瑞西の醫者）の外套を羽織り

五年の間を跳り拔き
藥にもならぬお談義で
その日その日を送りけり。
窮屈さうなゲートルで
歸ればすぐに百萬の
金が手に入る嬉しさに
ロシア言葉で祈りはすれど
貧乏書生の金盜む。」

コーリヤは讀み終るとすぐに新聞を公爵に渡し、自分はぴたりと壁に身を押しつけて兩手で顏を隱して了つた。未だ世の汚れに馴れない彼の子供らしく感じ易い心は、過度に搔き亂されたのであつた。リザヴェータ夫人は心の中の劇しい怒りを押へつけ乍ら、こんな事件に口を入れたのをひどく後悔するやうであつた。令孃達はひどくばつの惡い羞しい思ひをした。プチーツイン、ガーニヤ、ヴーリヤまでが何んとなく途方に暮れた顏付をした。又不思議な事に、イッポリトやブルドーフスキー自身さへも何やら驚いたやうな顏付をし、レーベチェフの甥も何やら不滿げな風附きであつた。只一人拳闘の先生だけは厭に落付いてゐた。

「これはまあ一體何んといふ事で、」とイヴン將軍は低い聲でぶつ〳〵云ひ出した。「まるで下司ボーイ連が五十人も集つて一緒に作つたやうな文章だ。」

「閣下、失禮ですが一寸伺ひます。あなたはそんな想像を逞しうして僕等を侮辱しようといふんですね。」イツポリトは身體中をぶる〳〵震はせ乍ら云つた。

「それは品位ある紳士の御身分として、ね、さうぢやありませんか、將軍、假にも品位ある紳士の言として、あんまり無禮ぢやないですか！」拳闘の先生が叫んだ。

「皆さん、皆さん、どうぞいゝ加減にして僕に一口云はして下さい。」公爵は胸に憂ひと悲しみを持つて云ひ出した。「そしてお願ひですから、お互をとくと了解出來るやうに話をしようぢやありませんか。皆さん、あの新聞記事の事に就いては僕平氣です。構ひません。ですがあの中に書いてある事は、すつかり出鱈目です。僕は皆さんもよく御承知だからかういふのです。全く恥しい位ではありませんか。かういふ譯ですから、若し萬一此文章を皆さんのうちどなたかゞお書きになつたのでしたら僕は只驚く他ありません。」

「僕はたつた今迄此記事の事は知らなかつたのです。」とイツポリトが明言した。「僕も此記事には感服出來ません。」

「わたしア書いたのは知つてゐましたがね、併し矢張り印刷に附するといふ事には賛成したくな

かつたですよ。未だ時が來ないからなあ……。」とレーベチェフの甥は附け足した。

「僕は知つてゐました。併し僕には權利があります。權利が……。」と『パブリーシチェフ氏の息子』が早口に云ひ出した。

「え？　ぢや、これはすつかり君が自分で作つたのですか。」と公爵は好奇の色を浮べ乍らブルドーフスキーに云つた。「まあそんな事があつてもいゝのですか！」

「併しあなたにそんな事を訊く權利があるんですかね。」とレーベチェフの甥が割込んできた。

議論は何時果てるとも推測出來ないやうであつた。しかしやがてイツポリトは、實はこの記事はケルレル、かの拳闘の先生の書いたものだといふ事を白狀した。

「まあ何んといふ！」とリザヱータ夫人が叫んだ。

「もうお話にならん！」とイヴン將軍が叫んだ。

「併し僕には權利があります。僕は無心するのぢやありません。要求するのです、要求です、正當なる要求……。」とブルドーフスキーは身體をぴり〳〵震はせ乍ら吃つて叫んだ。

「お靜かに皆さん、お靜かに、僕が事の顚末をお話しますから。」と公爵は哀願するやうに云つた。

「五週間ばかり前僕がZに居た時チェバーロフといふブルドーフスキー君の代人がやつてきました。ケルレル君、君は大變あの男を贔屓目に見てゐるやうですが」と不意に笑ひ乍ら公爵はケル

レルに向つて云つた。「併し僕は全くあの男が嫌ひでした。僕は一目見たばかりで、此チェバーロフが事件の張本人で、そして少々不躾な云ひ方ですが、この男がブルドーフスキー君の正直なのを利用して、こんな仕事を初めるやうに智慧をつけたのかもしれない、とかう見て取りました。」

「あなたにそんな事を云ふ權利はありません。僕は……正直ぢやない……それは……」はブルドーフスキーは大變な興奮であつた。

「これは實に無禮極まる。實に見當違ひな用もない臆測だ。」とイッポリトが黄色い聲で叫んだ。

「御免なさい、御免なさい。」と公爵は狼狽して詫びた。「これは僕がお互にすつかり胸襟を開いた方がよくはないかと思つて云つた事です。で僕はチェバーロフに向つて、僕は此通り今ペテルブルグにゐないのだから早速友達に頼んで此事件を處理して貰ひませうとかう云つたのです。でブルドーフスキー君この結果は今お知らせ致しますよ。打明けた所を申しますとね、僕は此事件は餘程詐欺的なものに思はれたのです。といつてもこれは何も皆さんの人格に直接何の關係もない事です。たゞ僕はチェバーロフの曲者が正直なブルドーフスキー君を欺いて、こんな詐欺を働くやうに焚きつけたに相違ないと確信したのです。といふのはこの事件は僕には何んとなく不自然に思はれてならないのです。」

「もう此上默つて聞いてはゐられない！」といふ聲が若い客人達の間から起つた。中には椅子の

上に飛上るものさへあつた。

「皆さん！　僕がかう思ふのはつまりブルドーフスキー君が正直な、寄邊の無い不仕合せな、易易と詐欺師の手に乘るやうな人だからで僕は此人を扶助する義務があると覺つてはゐます。さうすれば第一チェバーロフに對する面當てにもなるし、第二にブルドーフスキー君を誘導して同君に對する同情と友誼の一端を盡す事も出來る。かう思つて僕は同君に一萬ルーブリだけお渡しするやうに手續しました。僕の勘定では、これがパブリーシチェフ氏の僕に對して費消して呉れた金の全額だらうと思ひますから。」

「え？　たつた一萬ルーブリ？」とイッポリトが叫んだ。

「ねえ公爵、あなたは餘り算術がお得意でないのか、それとも餘りお得意すぎるのかどちらかですな。いや驚きますな！」とレーベチェフの甥が喚いた。

「僕ア一萬ルーブリぢや承知しません。」とブルドーフスキーが云つた。

しかしその時ガーニャが出て事件の詐欺的な事に對する斷定的な解決を與へたのであつた。といふのはガーニャがふとした偶然の機會からパブリーシチェフ氏自身自署の手紙を二通手に入れる事が出來たが、それによるとパブリーシチェフ氏はブルドーフスキーの生前一年半以上の頃外國に向けて出發してその儘ずつと三年間以上滯在した事實があり、またブルドーフスキーの母親

はその間ずつとロシアを離れた事は一度もなかつた事はブルドーフスキー自身を云つてゐた事である。で、ブルドーフスキーがパブリーシチエフ氏の息子といふのは全くこれを種に一儲けしようといふチエバーロフの詐欺である事が分つた。

「若しさうだとすれば僕は騙されたんだ。騙されたんだ。僕はもう一萬ルーブリも御免蒙ります。僕はあなたを信用するから一切を斷念する……左様なら。」

彼は帽子をとると椅子を押しのけて出てゆかうとした。

「ブルドーフスキーさん、もしお差支へがなかつたら、われ〳〵はもつと興味ある二三の事實についてお話する事が出來ます。」とガーニヤが云つた。

ブルドーフスキーは深く物思ひに沈んだ體でやゝ頭を垂れたまゝ默つて席に着いた。レーベチエフの甥はまだ仲々途方に暮れるなどゝいふのではないが、隨分毒氣を抜かれたらしかつた。イツポリトは眉を顰めて浮かぬ顏をしてゐたが、その瞬間烈しく咳き入つたかと思ふと自分の手巾を血ですつかり汚して了つた。ケルレルは吃驚仰天した。

「それ見ろ、フルドーフスキー。」と彼は忌々しさうに叫んだ。「だから我輩も一昨日云つたぢやないか。貴樣はひよつとしたら本當にパブリーシチエフ氏の息子ぢやないかも知れんぞつて！」

笑聲が一勢に起つた。しかしその笑聲をつき破るやうにして一つの聲が叫んだ。

「もう澤山です。もう澤山です。こんな、こんな話にもならない話なんて……」

それはリザヱータ夫人であつた。彼女は恐ろしく狂氣のやうに怒つてゐた。

「ほんとに此處は瘋癲病院だ！」と彼女は叫んだ。

「無論だわ！　狂人病院だわ！」と堪り兼ねてアグラーヤも叫んだ。

「馬鹿々々しい。『僕は無心するのぢやありません、要求するのです』つてさー　へつ、馬鹿らしい。公爵、あなたは屹度明日にも又あいつらの所へ出掛けていつて、友誼と金とを持ち出すんでせうね。ぺつお白痴さん！　明日行くでせう。行くの、行かないの？」

「行きます。」と公爵は答へた。

「あれをお聞きかえ？　それ御覽。」と夫人は喚いた。「そんならわたしはもうあんたなんか見度くもない。公爵あんたこの無神論者の所へ行くの、本當に？」そして夫人はイツポリトの方を向いたが今度は又彼に向つて「まあなんだつてお前はわたしをみてにた〳〵笑つてるんだえ！」夫人は頭到危くイツポリトに飛掛らうとした。

「奥さん！　奥さん！」と叫ぶ聲が四方から起つた。

「おつ母さん、何んてまあ恥しい事を！」とアグラーヤが必死になつて叫んだ。

「御心配なさいますな。アグラーヤさん、」と、イツポリトは落付いて云つた。彼はその手を强く